

正史を訪れる

十七章 東夷の内政と風俗

森隆一



角抵塚の壁画 中華人民共和国・吉林省・集安

(Wikipedia「高句麗」より)

はじめに

4.4 節で満州から沿海州に存在していた東夷諸国を記年記事と Wikipedia の記事の引用で見えてきた。訳も簡単にしているものに止めた。まずは、お馴染みの表 4.2 を再掲しておく。ここに挙げられている国々が対象となる。

表 4.2 正史に現れる東夷と朝貢

	後漢書	三國志	晉書	宋書	南齊書	梁書	魏書	周書	隋書	南史	北史	旧唐書	新唐書
扶余	○	○	○										
邑婁	○	○											
肅慎			○										
勿吉							○				○		
裨離			○										
東沃沮	○	○											
北沃沮	○												
靺鞨									○				
濊	○	○											
高句麗	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
馬韓	○	○	○										
辰韓	○	○	○										
弁辰	○	○	○										
百濟			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
新羅						○			○	○	○	○	○
加羅					○								
倭	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○
日本												○	○
扶桑						○				○			
流求									○		○		

本章では、正史に記事付きで記載されている東夷諸国の風俗・政治組織（統治方法）を主に見ていくことにし、表 4.2 に挙げられている国全てを見ることを目指す。記事の少ない国は全ての記事を対象とするつもりである。

17.1. 扶余の内政と風俗

正史に扶余条のあるのは漢書・三国志・晋書である。

まずは系口として、Wikipediaで幾つかの用語を見ることにする。

Wikipedia「夫余」建国以前では

夫余が建国する以前のこの地には濊族が住んでいたと思われ、松花江上流の弱水(奄利大水、現拉林河)を渡河南進して夫余を建国する以前の慶華古城(濊城、前漢初期には存在、黒龍江省賓県)も発見されている。

Wikipedia「賓県」では

賓県は、中華人民共和国黒龍江省ハルビン市に位置する県。

前漢から西晋にかけては挹婁、南北朝時代は勿吉、隋代は靺鞨の居住地であり、唐代は渤海の版図となった。968年に渤海が滅亡すると遼により東京道、その後金代により上京会寧府、元代は遼陽省開元路、明代は奴兒干都司を設置した。

Wikipedia「濊貊」では

濊貊は、中国の黒龍江省西部・吉林省西部・遼寧省から北朝鮮にかけて、北西から南東に伸びる帯状の地域に存在したとされる古代の種族。朝鮮民族の先祖たちとされる。同種の近縁である濊(濊とも表記される)と貊の2種族を連称したもの。

紀元前2世紀の中国東北部にいた「濊」「貊」は、濊貊・沃沮・高句麗・夫余の4種族の前身であり、現在の韓国江原道溟州にいた「東濊」は前漢代の中国東北部にいた濊の後裔とされる。

ここで、「濊」「貊」は、濊貊・沃沮・高句麗・夫余の四種族の前身は気になる記事である。濊貊から濊奴・倭奴

Wikipedia「濊」では

地域によっていくつかの集団に分けられ、臨屯濊と沃沮濊が主であり、臨屯濊は衛氏朝鮮に服属していたが、前漢の元朔元年 BC128、蕤君の南閭らが衛氏朝鮮の衛右渠に反逆し、遼東郡に服属した。武帝はこの地を蒼海郡としたが、数年で廃止した。

元鳳 6 年 BC75、貊族(夷貊)の攻撃を受けて玄菟郡治が北西の高句麗県へ移り、沃沮・濊貊は尽く楽浪の管轄へ移った。また、管轄範囲が広く遠いことから、濊貊・沃沮の住む単于大嶺の東側の部分に楽浪東部都尉を置き、不耐城を治所として嶺東七県(東曠県・不耐県・蚕台県・華麗県・耶頭味県・前莫県・夫租県)に分けて治めさせた。

Wikipedia「衛氏朝鮮」では

その都は王險城に置かれ、これは現在の平壤にあたる。

武帝は前 109 年に左将軍荀彘、楼船将軍楊僕ら命じて 50,000 人と称する兵を水陸から朝鮮へと差し向けた(漢の衛氏朝鮮遠征)。翌年には衛右渠は大臣の尼谿相参の家臣によって殺害された。大臣の成巳はなおも王險城を堅守して漢軍に対抗したが、漢は最終的にすでに降伏していた右渠の子の衛長降と路人の子の最を差し向け、成巳を殺して降伏させた。

慶華古城(濊城、前漢初期には存在、黒龍江省賓県)が賓県(中華人民共

和国黒竜江省ハルビン市)を今回初めて知った。まずは、濊城が哈爾濱にあったということで、思ったより北に位置している。今まで、何となく、長春辺りと思ってきた。これから色々連想される。

歳君の南閭が服属した BC128 年に蒼海郡が設置された。一方、漢の衛氏朝鮮遠征の 20 年程前である。これから、今まで蒼海郡は遼東郡以遠を指すと思っていたが、これは誤りで。朝鮮を含まず、長白山脈の北方を指すものと訂正する。

Wikipedia「匈奴」から、衛青と霍去病が伊稚斜単于に大勝したのは元狩 4 年 BC119 で、武帝の興味は長白山脈の東方と南方に移り、遼東郡に接する朝鮮が支配の対象となったと思われる

後漢書では

“夫余国は玄菟郡の北 1000 里に在り、南は高句麗と、東は挹婁と、西は鮮卑とそれぞれ接する。北には弱水がある。2000 里四方で、本は濊の地である。”

夫餘国 在玄菟北千里

南与高句驪 東与挹婁 西与鮮卑接 北有弱水 地方二千里 本濊地也（後漢）

これに続き、扶余の始祖東明王の話が書かれている。訳をさぼり、Wikipedia の記事を参照する。

東明王は、中国文献が記す夫余の建国者である。橐離国出身。夫余の後裔を自称した百済の遠祖ともされ、続日本紀最終巻には都慕王の名で現れる。朝鮮文献が記す解

慕漱や、高句麗の建国者である朱蒙(東明聖王)と同一人物であるか否かについては議論がある(後述)。

内藤湖南は、東明王が生まれた橐離国は、松花江支流に居住していたダウール族と指摘している。

後漢書の記事に戻る。

“官名には六畜を用いている。馬加・牛加・狗加がある。村落はどれかの加に属する。” 以六畜名官 有馬加 牛加 狗加 其邑落皆主屬諸加 (後漢)

“(訳)” (今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。)

食飲用俎豆 會同拜爵洗爵 揖讓升降 以臘月祭天 大會連日 飲食歌舞 名曰迎鼓 時斷刑獄 解囚徒 有軍事亦祭天 殺牛 以蹄佔其吉凶 行人無晝夜 好歌吟 音聲不絕

其俗用刑嚴急 被誅者皆沒其傢人為奴婢 盜一責十二 男女淫 皆殺之 尤治噁/惡妒婦, 既殺, 復尸于山上 兄死妻嫂 死則有槨無棺 殺人殉葬 多者以百數 其王葬用玉匣 (後漢)

前段は、食事に食器を用いることと会釈に触れたあと、臘月の祭天行事の記事である。後段は、刑罰と殉葬についてのようである。

Google:AI による概要では

俎豆は、古代中国の祭祀で使われた祭器の名前です。肉を載せるための台(俎)と、食物を盛るための器(豆)を指します。転じて、礼法や、祭祀の行事を指す言葉としても用いられます。

臘月は12月。日中友好協会：会報『日本と中国』 連載・コラム » 行事
目白押しの12月では：

“臘月”と「師走」：12月は師走ともいう。中国では公暦の12月は特に言い方はないが、陰暦の12月は“臘月”「臘月」という。「臘月」は「臘日」からきている。「臘」は元々、古代の人々が年の終わりに動物や鳥などを狩ってきて先祖に供えるという祭りの意味であった。「臘日」は陰暦の12月8日に当たるので、陰暦の12月は「臘月」と定められた。

臘月に入れば、お正月も近づいてくる。したがって、子供にとっては、臘月は待ち遠しいひと月である。「5日には五豆を食べ、8日には『臘八』を食べ、23日には糖瓜を食べ、あれこれでお正月だ」（田舎の童謡）

まず臘月5日には「五豆」を食べる。字面では5種類の豆類だが、実際は大豆、緑豆、黒豆、小豆、ササゲといった5種類の豆類を粟や米と一緒に炊いたお粥である。普段食うものに不自由をしていた時代だったので、子供のころは「五豆」は非常なご馳走であった。

8日は「臘日」で、この日には「臘八」を食べる。これは穀物そのものよりも、ナツメ、竜眼、栗、銀杏といった木の実や、蓮の実、ピーナツ、小豆、ハト麦と糯米などを一緒に炊いたお粥で、市販の「八宝粥」のようなものである。さらに23日には、麦芽糖で瓜の形をかたどった「糖瓜」などを食べる。これは一層のご馳走である。

5日の「五豆」は農業の神様「后稷」を祭るためのもので、8日の「臘八」は一年の終わりに先祖を祭る行事であるが、それが、釈迦の成道の日と言われる記念日と重

なってきた行事である。23日は、かまどの神様「竈王爺」が地上のことを報告しに天国へ赴く日に当たり、「糖瓜」は粘り強い麦芽糖で作られているから、「竈王爺」に食べさせて人間の悪口をしないようにという願いが込められていた。と書かれている。

訳するには、基本的に、漢字の意味を調べることになり、知らない漢字が増えれば相当な時間が懸かる。さらに、この調子で進めていくと、引用が多くなる。それ以上に、食器の材料は何かなど幾つかの面白そうな話題が派生する。扶余の場合は諸状況から青銅器と思っている。また、殉葬も気になる。埴輪は殉葬の代わりに作られたということと殷には殉葬があったというのが、現在記憶している殉葬の例である。

ということで、上で後漢書に対して行ったことを基本的には踏襲していくことにする。マニュアル的に述べれば、次の様になる。

Wikipediaで概説的な記事を見る。

内政と風俗に関する正史の記事を選ぶ。(短い場合は全て)

簡単に訳せそうなところは訳す。難しい個所はWikipediaから正史の訳や要約と思われる部分を引用する。

興味ある項目をWebで調べる。

このように設けた基準を良い加減に使い分けて進めていくことにする。

三国志では

“夫余は長城の北で、玄菟郡から 1000 里のところにある。南は高句麗、北は挹婁、西は鮮卑と接する。北には弱水がある。”

夫餘在長城之北 去玄菟千里 南與高句麗 東與挹婁 西與鮮卑接 北有弱水

作業仮説 7.4 では、韓と倭の記事では 1000 里=60Km とした。ここでは Wikipedia「里」での 1 里=400m をとれば 1000 里は 400Km となり、Google Map で、現在の丹東と哈爾濱間の距離に近い。

“民は定住している。宮室 倉庫 牢獄がある。山陵・廣澤が多く、東夷の城のなかで最も平坦である。土地は五穀に適し、五果は生育しない。・・・”

其民土著 有宮室 倉庫 牢獄 多山陵 廣 澤 於東夷之域最平敞 土地宜五穀 不生五果 其人粗大 性強勇謹厚 不寇鈔 國（三）

“国には君王がいる。六畜を官名にあてている。馬加・牛加・猪加・狗加・大使・大使者・使者がある。村落には豪民がいて、皆を下戸とよび、奴僕としている。諸加の別主は四方に出ている。”

國有君王 皆以六畜名官 有馬加 牛加 猪加 狗加 大使 大使者 使者 邑落有豪民 名下戸皆爲奴僕 諸加別主四出（三）

“(訳)”（今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

Wikipedia「夫余」で三国志を引用としている部分は

衣食住：食飲は俎豆(食器)を用い、宴会で酒杯を受けたり酒杯を返すときも、その

立ち居振舞いは謙虚である。陰暦の正月には、天を祭り、国中で大会を開き、連日飲食して歌舞する。この祭を「迎鼓」という。この時には刑罰を行わず、囚人を解放する。ただし、髪形の風習は述べられていない。

政治体制：国には統一的な君王がいる。古い夫余の風俗において、天候が不順で五穀の生育が順調でない時にはその責任を王のせいにし、あるいは王を替えるべきだと言い、あるいは王を殺すべきだとした。官職の名称はすべて六畜の名でよんでおり、馬加・牛加・猪加・狗加の諸加があり、諸加はそれぞれ四出道を守り、勢力の大きな者は数千家、勢力の小さな者は数百家を支配していた。諸加の下には大使・大使者・使者の諸使がある。邑落には豪民と呼ばれる奴隸を持った豪農、下戸と呼ばれる隷属農民や奴隸・奴僕と呼ばれる奴隸がいる。

産業：夫余の生業は主に農業であり遺跡では早い時代の層からも大量の鉄製農具が見つかるなど、農業技術や器具は同時代の東夷の中で最も発達していた。また、金銀を豊富に産出する土地であり、金属を糸状に加工して飾り付けるなど、金銀の加工に関しては非常に高い水準だったとされる。紡績に関しても養蚕が営まれ絹や繡・綵など様々な種類の絹織物が作られたほか、麻織物や毛織物が作られ東夷の中で最も発達していたとされる。また牲の牛を多く養い、名馬と赤玉・貂・狢・美珠を産出し、珠の大きなものは酸棗（やまなつめ）ほどもある。『魏略』には、国は賑わい富んでいるとあり、その頃が最盛期だったとみられる。

武器：弓矢・刀・矛を兵器としている。家々には自分たちの鎧や刀剣類を所蔵している。

刑罰：刑罰は厳しく、人を殺せば死刑となり、その家族は奴婢にされる。盗みは盗んだ物の12倍を償わせる。男女が私通したり、婦人が妬んだりすれば、すべて死刑にされる。妬みによる罪をもっとも憎んでおり、その罪により死刑にされると、死骸は国の南の山上にさらされ、腐爛するまで放置される。死骸が腐爛したのち、その婦人の家人がその死骸を引き取りたいと望んで牛馬を連れていけば、死骸を与える。

婚姻：兄が死んだ場合、兄嫁を弟が妻とする。これは匈奴と同じ習俗（レビラト婚）である。

葬祭：有力者が死ぬと、夏期であればみな氷を用い、人を殺して殉葬する。多い時には殉葬者が数百人に達する。死者を厚葬し、遺体を納める棺があるが槨はない。また、喪に停すること5月、久しきを以って栄とする。その亡くなった者を祭るのに生と熟がある。喪主は速やかなるを欲せずして他人がこれを強制し、常に諍引してこれを節とする。男女は皆純白の喪服を着用し、婦人は布面衣（布製のベール）を着用し、環珮（腰に付ける環状の玉）を去らす。これらのことは大体中国と似ている。

その他の風俗：人々は体格が非常に大きく、性格は勇敢で、謹み深く親切であり、あまり他国へは侵略しない。通訳が言葉を伝える時、みな跪いて両手を地につけ、小声で話をする。戦争を始めるときは天を祭り、牛を殺してその蹄を見て開戦の吉凶を占う。蹄が開いていれば凶、蹄が合わさっていれば吉である。戦争になれば、諸加はすすんで戦う。下戸は食糧を担いで諸加に従い、諸加は下戸の荷う食糧を飲食する。

三国志のほかに、

言語系統：（詳細は「夫余語」および「扶余語族」を参照）中国の史書によると、

夫余の言語は高句麗と同じとされ、沃沮と濊もほぼ同じとされる。一方、東の挹婁は独特の言語を使っていたとされ、夫余の言語と異なると記される。

道大者主數千家 小者數百家 食飲皆用俎豆 會同 拜爵 洗爵 揖讓升降 以殷正月祭天 國中大會 連日飲食 歌舞 名曰迎鼓 於是時斷刑獄 解囚徒 在國衣尚白 白布大袂 袍 袴 履革鞞 出國則尚繪繡錦罽 大人加狐狸 狢白 黑貂之裘 以金銀飾帽 譯人傳辭 皆跪 手據地竊語 用刑嚴急 殺人者死 沒其家人爲奴婢 竊盜一責十二 男女淫婦人妒 皆殺之 尤憎妒 已殺 屍之國南山上 至腐爛 女家欲得 輸牛馬 乃與之 兄死 妻嫂 與匈奴同俗 其國善養牲 出名馬 赤玉 貂狢 美珠 珠大者如酸棗 以弓矢刀矛爲兵 家家自有鎧仗 國之耆老自說古之亡人 作城柵皆 員 有似牢獄 行道晝夜無老幼皆歌 通日聲不絕 有軍事亦祭天 殺牛觀蹄以占吉凶 蹄解者爲凶 合者爲吉 有敵 諸加自戰 下戶俱擔糧飲食之 其死 夏月 皆用冰 殺人徇葬 多者百數 厚葬 有槨無棺
(三)

“夫余はもともと玄菟郡に帰属していた。公孫度が海東に勢力を拡げたとき、夫余王の尉仇台は遼東郡に帰属した。このとき、句麗と鮮卑は強大であった。度は夫余を二国の間においた。宗女を娶った。”

夫余本屬玄菟 漢末 公孫度雄張 海東 威服外夷 夫余王尉仇台更屬遼東 時句麗鮮卑強 度以夫余在二虜之間 妻以宗女 (三)

“位居が死に、諸加は麻餘を共立した。” 位居死 諸加共立麻餘 (三)

“正始中 240-249 幽州刺史の母丘句麗を討つことを検討した。玄菟郡の太守王頌を夫余に派遣した。位居は大加を郊外に遣わし、軍糧を供した。”

幽州刺史毋丘儉討句麗 遣玄菟太守王頎詣夫餘 位居遣大加郊迎 供軍糧 (三)

“その印には濊王之印と書かれていた。国には濊城と呼ばれている故城があった。ここはもと濊貊の地で、夫餘王は其中で、自ら亡人と謂った。”

印文言 濊王之印 國有故城名濊城 蓋本濊貊之地 而夫餘王其中 自謂亡人 (三)

晋書では

“(訳)” (今は訳せない。最終行を除いて、三国志の要約と想える)

有城邑宮室 地宜五穀 其人強勇 會同揖讓之儀有似中國 其出使 乃衣錦 厨 以金銀飾腰 其法 殺人者死 沒入其家；盜者一責十二；男女淫 婦人妒 皆殺之 若有軍事 殺牛祭天 以其蹄占吉凶 蹄解者爲凶 合者爲吉 死者以生 人殉葬 有槨無棺 其居喪 男女皆衣純白 婦人著布面衣 去玉佩 出善馬及貂豹 美珠 珠大如酸棗 其國殷富 自先世以來 未嘗被破 其王印文稱「穢王之印」 國中有古穢城 本穢貊之城也 (晋)

17.2. 沃沮の内政と風俗

(東：後漢、三国、北：後漢)

Wikipedia「沃沮」では、

沃沮は、紀元前2世紀から3世紀にかけて朝鮮半島北部の日本海に沿った地方(現在の咸鏡道付近)に住んでいたと思われる民族。三国志や後漢書では東沃沮と表記される。

概要：三国志では、北東は狭く西南に広い、高句麗の蓋馬大山(長白山脈)の東から海岸までに及び、北にユウ婁・夫餘と、南に濊貊と接し、その言語は高句麗と大体同じで時に少し異なると記される。

沃沮という独自の国家があったのではなく、前漢の玄菟郡の夫租県(現在の咸鏡南道の咸興市付近)にいた濊貊系種族を指すものと考えられており、同じく濊から分かれた夫余・東濊や高句麗とは同系とされている。

%% 咸興市を地図に

東沃沮

後漢書

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。北は挹婁・夫餘、南は濊貊と接するその地形は東北が狭く西南が長く千里程である。”

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接 其地東西夾

南北長 可摺方韃淠（後漢）

“(訳)”

土肥美 搆山嚮海 宜五穀 善田種，有邑落長帥 人性質直強/彊勇 便持矛步戰 言語
食飲 居處 衣服 有似句驪 其葬 作大木槨 長十餘丈 開一頭為戶 新死者先假埋之
令皮肉儘/盡 迺取骨置槨中 僚人皆共一槨 刻木如生 隨死者為數焉（後漢）

三国志

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。その地形は
東北が狭く西南が長く千里程である。北は挹婁・夫餘、南は濊貊と接する。”

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 濱大海而居 其地形東北狭 西南長 可千里 北與挹
婁 夫餘 南與濊貊接（三）

“大君王はいない。昔から集落に住み、夫々には長帥がいる。その言葉は
句麗とほとんど同じであるが、時々異なる。”

無大君王 世世邑落 各有長帥 其言語與句麗大同，時時小異（三）

“(訳) 沃沮の各邑落には渠帥がいて、三老と自稱している。これは丁度い
にしえの縣國の制度である。”

沃沮諸邑落渠帥 皆自稱三老 則故縣國之制也（三）

“毋丘儉が句麗を打ったとき、句麗王宮は沃沮に逃げた。軍を進めこれを
撃ち、沃沮の邑落の皆を破った。斬り獲った首級は三千余りであった。宮
は北沃沮に逃げた。北沃沮は置溝婁ともいい、南の沃沮まで八百里余りで、

風俗は南北同じで、挹婁と接している。”

毋丘儉討句麗 句麗王宮奔沃沮 遂進師擊之 沃沮邑落皆破之 斬獲首虜三千餘級
宮奔北沃沮 北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗南北皆同 與挹婁接 (三)

北沃沮

後漢書

“(訳)” (今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。)

又有北沃沮 一名置溝婁 去南沃沮八百餘里/裏/裡 其俗皆與南同 界南接挹婁 挹
婁人喜乘船寇抄 北沃沮畏之 每夏輒臧于岳/巖穴 至鑿船道不通 迺下居邑落 其耆者
言 嘗于海中得一佈衣 其形如中人衣 而兩袖長三丈 又于岸際見一人乘破船 頂中復/
復有麵 與語不通 食而死 (後漢)

17.3. 濊の内政と風俗

後漢書と三国志に記載されている。

Wikipedia「ワイ人」では

濊は、三国志やなどに記されている古代民族。現在の黒龍江省西部・吉林省西部・遼寧省東部から朝鮮半島北東部にかけて、北西～南東に伸びる帯状に存在したとされる。濊貊は、古代の韓国・北朝鮮の種族名で朝鮮半島北部と中国の東北部に住んでいた韓国・北朝鮮の根幹となる民族の一つを見ている。しかし、まだ様々な見解が示されている。

Wikipedia「濊」では

歴史：地域によっていくつかの集団に分けられ、臨屯濊と沃沮濊が主であり、臨屯濊は、衛氏朝鮮に服属していたが、前漢の元朔元年(前 128 年)君の南閭らが、衛氏朝鮮の衛右渠に反逆し、遼東郡に服属した。武帝はこの地を蒼海郡としたが、数年で廃止した。

元鳳6年(前75年)、貊族(夷貊)の攻撃を受けて玄菟郡治が北西の高句麗県へ移り、沃沮・濊貊は尽く楽浪の管轄へ移った。また、管轄範囲が広く遠いことから、濊貊・沃沮の住む単于大嶺の東側の部分に楽浪東部都尉を置き、不耐城を治所として嶺東七県(東曠県・不耐県・蚕台県・華麗県・耶頭味県・前莫県・夫租県)に分けて治めさせた。

後漢の建武6年(30年)、辺境の郡が整理され、東部都尉も罷免された。その後、それぞれの県の渠帥(首長)が県侯となり、不耐・華麗・沃沮(夫租)の諸県はみな侯国となった。

魏の正始6年(245年)、楽浪太守の劉茂と帯方太守の弓遵は、領内の東濊が高句麗に従属したため軍を起こして討ち、不耐侯らは配下の邑落を挙げて降伏した。8年(247年)、魏の宮廷へ朝貢に詣でたため、詔を下し改めて不耐濊王の位が授けられた。濊王は一般の住民と雑居していて、季節ごとに郡の役所へ朝謁する。楽浪と帯方の二郡に軍征や特別の徴税があるときには、濊人にも税や夫役が割り当てられるなど、濊人は二郡の住民と同様に待遇される。

住居：濊の風俗として山や川が重視され、山や川にはそれぞれに所属するところがあって、みだりに他人の山や川に入りこむことは許されない。また、生活・生産の場として、他集団の侵犯を許さない占有領域を形成し、死者が出ると旧宅を廃棄するなどの禁忌が多く、アイヌをはじめとする東北アジアの採集狩猟民との共通性が認められる。

官制：大君長はなく、漢代以来、侯邑君、三老といった官があって、下戸(平民)たちを統治している。

軍事：濊人は長さ三丈の矛を作り、これを時に数人で持ち、巧みに歩兵戦闘を行う。

性格：三国志魏書濊伝によれば、濊の人々の性格は慎み深く、素直で欲深いところが少ない。恥を知る心がある。また、後漢書濊伝によれば濊人の性質は馬鹿正直で、淡泊で、求めることが少ない。濊人は窃盗をしないため、人々は夜でも門戸を閉め

ず、また婦人は貞節である。

服装：言葉や風俗はだいたい夫余と同じであるが、衣服に違いがある。男女の上衣はともに曲領（まるくび）のものをつけ、男子は幅数寸の銀製の花文様を結びつけて飾りとする。

結婚：同姓の者は結婚しない。

行事：10月を天の祭りの月とし、昼夜にわたって酒を飲み歌い舞いを舞う。この行事を「舞天」と呼んでいる。また虎を神として祭る。

刑罰：邑落の間で侵犯があったときには、罰として奴隸や牛馬を取り立てることになっている。この制度を「責過」と呼ぶ。人を殺した者は死をもって罪を償わされる。

略奪や泥棒は少ない。

言語：（詳細は「扶余語族」および「濊貊語」を参照）中国の史書によると、濊の言語は夫余と同じと記される。夫余語が現在のどの系統に属すのかについては古くから論争があり、手掛かりがほとんど無く現在に至ってもよく解っていない。三国史記に記された古代の朝鮮半島の地名の記録から古代の朝鮮半島には日本語と同系統の言語が、倭人が定住していた朝鮮半島南端に限らず半島の広範囲に分布していたとの見方があり、高句麗語による地名ではないかとも考えられているが、その倭語系の地名は高句麗ではなく濊の言語によるものであり、濊語と倭語は共通祖語を持つ同系統の言語であるとの説も存在する。

%% 単単大嶺は白頭山と思ってきたが、もっと南かもしれない。例えば妙香山。

後漢書

“瀋は北は高句驪・沃沮と、南は辰韓と接する。東は大海で西は樂浪郡に至る。瀋と沃沮と高句麗は元の朝鮮の地である 瀋北與高句驪 沃沮南與辰韓接 東窮大海 西至樂浪 瀋及沃沮 句驪本皆朝鮮之地也（後漢）

“句驪は本は皆朝鮮の地である。昔、（周の）武王が箕子を朝鮮に封じたとき、箕子礼儀・田・蚕を教え、八條之教をつくった。”

句驪 本皆朝鮮之地也 昔武王封箕子于朝鮮 箕子教以禮義田蠶 又製八條之教 其人終不相益 無門戶之閉 婦人貞信 飲食以籩豆 後漢)

“建武六年 30 都尉官を廃し、領東の地を棄て、その渠帥を縣侯に封じた。皆は歲時に朝賀している”

省都尉官 遂棄領東地 悉封其渠帥為縣侯 皆歲時朝賀（後漢）

“大君長はない。官には侯と邑君や三老がある。老人は高句麗と同種であるという。言語法俗は凡そ同じである。”

無大君長 其官有侯 邑君 三老 耆舊自謂與句驪同種 言語法俗大抵相類（後漢）

Weblio 辞書「三老」では、中国、漢代に県や郷に置かれた郷官の一。父老中の有徳者として、その地方の住民の教化をつかさどった。

“(訳)” （今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

其人性愚慥 少嗜欲 不請丐 男女皆衣麩領 其俗重山川 山川各有部界 不得妄相乾 / 幹 / 榦 涉 同姓不昏 多所忌諱 疾病死亡 輒捐棄舊宅 更造新居 知種麻 / 蔴 養蠶 作

綿佈 曉候星宿 豫知年歲豐約 常用十月祭天 晝夜飲酒歌舞 名之為“舞天” 又祠虎
以為神 邑落有相侵犯者 輒相罰 責生口牛馬 名之為“責禍” 殺人者償死 少寇盜 能
步戰 作矛長三丈 或數人共持之 樂浪檀弓齣其地 又多文豹 有果下馬 海齣班魚 使
來皆獻之（後漢）

三国志

“(訳)”（今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

昔箕子既適朝鮮 作八條之教以教之 無門戶之閉而民不為盜（三）

“(訳)”（今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

陳勝等起 天下叛秦 燕 齊 趙民避地朝鮮數萬口 燕人衛滿 魑結夷服 復來王之 漢
武帝伐滅朝鮮 分其地為四郡 自是之 後 胡 漢稍別 無大君長 自漢已來 其官有侯邑
君 三老 統主下戶 其耆老舊自謂與句麗同種 其人性願慤 少嗜欲 有廉恥 不請（句麗）
句 言語法俗大 抵與句麗同 衣服有異 男女衣皆著曲領 男子擊銀花廣數寸以為飾 自
單單大山領以西屬樂浪 自領以東七縣 都尉主之 皆以濊為民 後省都尉 封其渠帥為
侯 今不耐濊皆其種也（三）

“(訳)”（今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれない。）

漢末更屬句麗 其俗重山川 山川各有部分 不得妄相涉入 同姓不婚 多忌諱 疾病死
亡輒損棄舊宅 更作新居 有麻布 蠶桑作綿 曉 候星宿 豫知年歲豐約 不以誅玉為寶
常用十月節祭天 晝夜飲酒歌舞 名之為舞天 又祭虎以為神 其邑落相侵犯 輒相罰責
生口牛馬 名之為責禍 殺人者償 死 少寇盜 作矛長三丈 或數人共持之 能步戰 樂浪

檀弓出其地 其海出班魚皮 土地饒文豹 又出果下馬 漢桓時獻之（三）

17.4. 挹婁・肅慎・勿吉・靺鞨の内政と風俗

記載されているのは、挹婁は後漢書・三国志、肅慎は晋書、勿吉は魏書・北史、靺鞨は隋書である。

新羅本記の初期の王紀で、靺鞨との抗争の記事が幾つか見られた。辰韓の地と靺鞨がいたと思われる北朝鮮北部以北の間には嶺東地方があり、ここは楽浪郡と後に高句麗により支配されていた。これより、新羅と靺鞨が戦うには、3王朝の1つが嶺東地方の北方にいたか高句麗の支配下でなくなったかが考えられ12章では前者を採用した。

また、子孫が女真(女直)を名乗り、最終的に清王朝を興した。清王朝は1644年から1912年まで続いた。この間に女真の地満州・沿海州は中国の一部となった。中華思想からは、東夷は日本→米国、北狄はロシア、南蛮は欧米、西戎はロシアといえるのっかもしれない。

靺鞨については、幅広く引用することにする。

Wikipedia「ユウ婁」では、

挹婁は、後漢から五胡十六国時代(1世紀から4世紀)にかけて、外満州付近に存在したとされる民族。

歴史：古の肅慎の末裔とされ、魏代・晋代でもそのまま肅慎と呼ばれ続けた。挹婁の呼称は、彼等自身の自称ではなく、鏃(yoro)、箭や後の牛祿(niru)、坑(yeru)など

の音訳と考えられている。

漢代以降は夫余に従属していたが、夫余が重税を課したため、魏の黄初年間(220年-226年)に反乱を起こした。夫余は何度か挹婁を討伐したが、独立し魏への朝貢を行った。

地理：三国志には、夫余の東北千余里のところにおり、大海に面し、南は北沃沮と境を接し、北はどこまで及ぶのかわからない。その土地は険しい山地が多い。気候は寒冷で、夫余よりも厳しいとあり、外満洲(現在のロシア連邦沿海地方)の松花江流域に居住した。

習俗

習俗衣食住と人尿洗顔：挹婁の生活スタイルは、その東夷諸国のなかでは極めて特異である。まず、挹婁人は地上に家を建てず、地下に縦穴(竪穴)を掘り生活する。竪穴は深く(梯子の段数が多く)かつ大きいほど尊ばれたという。住居を地中に構えたのは、防寒の為と考えられている。さらに、部屋の中央に置いた尿を溜めた容器を囲んで暮らし、その人尿で手や顔を洗ったという。尿に含まれるアンモニアは弱アルカリ性のために皮脂汚れを落とす効果があり、古代ローマでは回収した尿で洗濯する業者がいたことが現代では知られているが、当時の中国大陸ではそのような習俗はなく、『三国志』や『後漢書』では「その人々不潔」、「その人々臭穢不潔」とあらわしている。

また、挹婁人は養豚が盛んで、豚を主食とし、豚の皮を着物にした。夏にはほぼ全裸でわずかな布だけで前後を隠したが、冬には豚の膏(あぶら)を身体に数センチも

の厚さに塗って風や寒さを防いだという。食事をするとき、他の東夷諸国では俎豆と呼ばれる食器（高坏形土器）を常用していたのに対し、挹婁人は俎豆を使う習慣が無く、鼎や瓶や平皿を用いて炊事や食事をしていた。『後漢書』『三国志』では「東夷のなかで習俗が最も無規律な者たち」と記している。

人が少なく、険しい山に住み、衆は規律に服さず、操船が巧みでしばしば近隣諸国を寇掠したとも記されている。また、邑落の大人（たいじん）を一つの血族が継承する習俗があり、これは、近隣の扶余や沃沮が合議による選挙で大人を選んだのとは対照的である。

毒矢使用：挹婁人は、弓矢に長けており、必ず人の目を射当てる。矢には毒が塗られており、人に当たれば死に至る。石製または鉄製の鏃は先端が鋭利で、血抜き或は毒を塗る為の溝や凹みを設けており精巧な造りをしている。

婚礼：男性は女性の頭に羽毛を挿し、女性と和んだらすぐに自分の家に持ち帰って婚礼の儀を執り行う。

葬祭：死者が出たらその日のうちに木を交えて小槨を作り、死者の糧とするために猪を殺してその上に積み、土葬する。また、男子で泣く者は「男らしくない」と言われるため、父母が死んでも、男子は泣かない。

刑罰：最大の罪である窃盗をした者は、その盗んだ物が多かれ少なかれ死罪となる。

政治：挹婁には統一的な指導者は存在せず、邑落ごとに大人（部族長）がいた。

産業：五穀、麻布、赤玉、良質の貂（挹婁の貂）を産出。主な食料調達手段は漁業で漁網や釣竿が見つまっている。次いで農耕や養豚、他には狩猟や養犬も行っていた。

晋代の記録では「馬がいるが騎乗はせず、牛と羊がないが、多くの猪（ブタ）を飼っている」とあり、家畜は彼らの財産であった。また、遺跡からは猪と共に多数の魚や犬の骨が発見されているが、牛や鹿など他の動物の骨はあまり見られない。

言語系統：挹婁の言語について、中国の史書は「言語は独異」と記しており[5]、当時の東北アジアの中でも独特の言語を使用していたことがわかる。

Wikipedia 「肅慎(中国)」では

肅慎は、満州に住んでいたとされる狩猟民族。また、後にこの民族が住んでいた地域の名称ともなった。肅慎という呼び名は中国の周代・春秋戦国時代の華北を中心とする東アジア都市文化圏の人々(後に漢民族として統合されていく前身となった人々)が肅慎人の自称を音訳したもので、息慎・稷慎とも表記される。

中国の周代の文献の中にしばしば見られ、後代の挹婁・勿吉・靺鞨・女真(満州族)と同系の民族と考えられることがしばしばある。

日本の歴史書に現れる肅慎(みしはせ)とは字が同じだが、年代に大きな開きがあり、両者の関係性は不明である。

中国の文献における記述：中国の文献では、肅慎は弓矢作りの得意な東北方の異民族として描写されている。その中国史上への最初の登場は舜に遡り、以降、聖天子が中国に現れるとその徳に引かれて貢物を奉りにくるという描かれ方をしている。

中国最古の書物の一つである『書経』にも肅慎の記述はある。また、『国語』など複数の書物で、春秋時代の諸侯国の一つである陳において、孔子が肅慎の弓矢について

説明する逸話がある。

前漢以降は、途上に扶余国が勃興したため音信が途絶えたと見られ、肅慎はほとんど文献に見られなくなった。代わって文献中には扶余人が彼等と呼ぶ際の呼称である挹婁が多々出現するようになり、挹婁は肅慎の後裔として捉えられた。ただし、全く肅慎が出現しないわけではなく、例えば、前漢の司馬相如の「子虚賦」には、肅慎が登場してくるし、唐に編纂された『晋書』には四夷伝のなかに倭人の条とともに肅慎氏の条が収録されている。「子虚賦」について言えば、周について扱った作品であるから肅慎という名を使ったのである。また、『晋書』について言えば、実質的には挹婁を扱っているが、古典の中で用いられている由緒ある肅慎という言葉を使ったほうが雅であるとして、肅慎という表題をつけたのである。

Wikipedia 「勿吉」では

勿吉は、中国の南北朝時代に、高句麗の北から満州地域に住んでいた狩猟民族で、現在の松花江から長白山一帯に居住していたと思われる。肅慎、挹婁の末裔で、唐代における靺鞨の前身である。

歴史：勿吉は、5世紀ごろ、松花江下流、黒竜江下流から沿海州付近にかけて一大勢力を持っていたツングース系の国である。6世紀半ばごろまで中華王朝に朝貢していたが滅び、以後、勿吉国の子孫は靺鞨と呼ばれるようになった。勿吉と靺鞨は同じ音移したものと考えられている。

南北朝時代：

北魏の延興年間(471年-476年)、遣使の乙力支が北魏に朝献する。

太和(477年-499年)の初め、ふたたび乙力支が北魏に朝献し、馬500匹を貢納した。

太和9年(485年)、遣使の侯尼支が朝献。太和10年(486年)も入貢した。

太和12年(488年)、勿吉は遣使を送って楛矢方物を貢納した。

太和17年(493年)、遣使の婆非ら500余人が朝献。

景明4年(503年)、遣使の侯力帰らが朝貢。

東魏の興和2年(540年)6月、遣使の石久雲らが方物を貢納し、武定(543年-550年)に至るまで途絶えず。

習俗：勿吉の子孫たる靺鞨の7部族は、北は黒竜江下流から南は吉林地方まで広く分布した。南部の粟末部は粟や麦、クロキビなどを栽培し、豚や馬などの家畜を飼って生活した。北部の黒水靺鞨は冷涼な気候のため、農業は不可能で、狩猟を生業とする伝統的な生活をしていた。黒水靺鞨がもっとも強健と言われ、のちに女真族と呼ばれるようになった。

衣食住：勿吉人の服装は挹婁人と同様、男性が猪や犬の皮を着用し、女性が布製の裙を着用した。猪を多く飼っており、食物は主にその猪を食す。また米[要出典]を噛んで製造する酒、いわゆる「口噛み酒」を造って飲む。住居は夏季は樹上に簡素な家を構え、それ以外の季節は塚状の穴居式住居に数家族～一族が居住した。方形や長方形のものが多く上部に入口があってそこから梯子を使って下へ降りる。また、散居せず2～3m程度の生垣を備えた円形の小城(周囲200～300m)の内側に構えられた住居も多い、城の大半は河川の近傍にある丘の頂上から発見されている。

人尿洗顔：挹婁人と同様、「人尿で手や顔を洗う」という風習があり、中国の史書では「諸夷で最も不潔」と評される。

毒矢：彼らの使用する毒矢は殺傷能力に優れており、命中すれば必ず死に至り、毒薬の製造過程で発生する湯気でも死に至るといふ。その毒薬の製造は毎年7月8月に行われる。弓の長さは3尺、箭の長さは尺二寸、石を使って鏃とした。

婚姻：初婚の夜、男は女の実家で女の乳房を手に取り、そして止める。この行為で婚約が成り、夫婦となる。

埋葬：人が春夏に死んだら遺体を埋め、その塚の上に屋を作って雨があたらないようにする。しかし、秋冬に人が死んだらその遺体を貂狩りの餌として使用するため、野に遺体を置いて貂に食わせ、そのすきに貂を捕獲する。この貂は勿吉の特産品であり、上質なので中国に重宝され、かつては「挹婁の貂」と称された。

言語：勿吉の言語について、中国の史書は「言語は独異」と記しており[5]、当時の東北アジアの中でも独特の言語を使用していたことがわかる。

構成部族：粟末部…高句麗と接する。勝兵は数千、毎回高句麗を寇す。

伯咄部…粟末部の北に在り。勝兵は7千。

安車骨部…伯咄部の東北に在り。

拂涅部…伯咄部の東に在り。

号室部…拂涅部の東に在り。

黒水部…安車骨部の西北に在り。

白山部…粟末部の東南に在り。

Wikipedia 「靺鞨」では

靺鞨は、中国の隋唐時代に中国東北部、沿海州に存在した農耕漁労民族。南北朝時代における勿吉の表記が変化したものであり、肅慎、挹婁の末裔である。16部あったが、後に高句麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部と、後に女真族となって金朝、清朝を建国した北の黒水部の2つが主要な部族であった。

構成部族：靺鞨はいくつかの大部族に分かれ、そのうち粟末靺鞨、伯咄靺鞨、安車骨靺鞨、拂涅靺鞨、号室靺鞨、白山靺鞨、黒水靺鞨の7部族が有力で、靺鞨七部と呼ばれた。

粟末部：南は太白山(白頭山)で高句麗と隣接し、粟末水(第二松花江)流域に住む。勝兵は数千。

伯咄部：粟末部の北に住み、勝兵は7千。

安車骨部(安居骨部、鉄利部)：伯咄部の東北に住む。

拂涅部：伯咄部の東に住む。

号室部(越喜部)：拂涅部の東に住む。

黒水部：安車骨部の西北に住む。

白山部：粟末部の東南に住む。勝兵は約3千。

思慕部：黒水の西北に住む。

郡利部：思慕部の北に住む。

窟設部：郡利部の東北に住む。

莫曳皆部：窟設部の東南に住む。

虞婁部

歴史 隋代：開皇(581年-600年)の初め、靺鞨は隋に遣使を送って貢献した。煬帝(在位604年-618年)の高句麗遠征(612年・613年)の時、渠帥の突地稽はその部を率いて隋に降った。そのため右光祿大夫に拝され、柳城に住まわせてもらう。突地稽は中国の風俗を気に入り、冠帯することを請うた。煬帝はこれを喜び、錦綺を賜って突地稽を褒寵した。東の役において、突地稽はその部衆を率いて従軍し、戦功があった。

唐代：武徳(618年-626年)の初め、突地稽は遣使を送って朝貢をしたため、唐はその部落をもって燕州を置き、突地稽を総管とした。劉黒闥の叛乱において、突地稽は所部を率いて定州に赴き、遣使を送って太宗に詣でて節度を受けることを請い、戦功をもって蕃国公に封ぜられた。また、その部落を幽州の昌平城に遷す。高開道が突厥を招き寄せて幽州に来攻した際、突地稽は兵を率いて迎撃し、これを大破した。貞観(627年-649年)の初め、突地稽は右衛將軍に拝され、唐の国姓である李氏を賜った。突地稽が死ぬと、子の李謹行が後を継いだ。

渤海国・粟末靺鞨：(詳細は「渤海(国)」および「粟末靺鞨」を参照)

渤海国は、朝鮮史料・中国史料においては一般にみな渤海あるいは靺鞨と称する。

黒水靺鞨：武徳5年(622年)、渠長の阿固郎が唐に来朝。太宗の貞観2年(628年)に臣附したため、唐はその地をもって燕州とした。高句麗討伐戦(唐の高句麗出兵)ではその北部で反き、高句麗と連合した。高句麗の高恵真らは衆を率いて安市城を援

け、靺鞨は常に前線で戦った。唐軍は安市城を破り、高惠真を捕え、靺鞨の兵3千あまりを収めてことごとくこれを生き埋めにした。

後に渤海国が強盛になると、黒水靺鞨はこれに役属したが、唐に対してもたびたび使者を送って朝貢をした。

五代十国時代、渤海国が契丹によって滅ぼされると(926年)、黒水靺鞨は契丹に附属した。やがて、黒水靺鞨の中でも南に在って契丹に属した者たちは熟女直と号し、北に在って契丹に属さなかった者たちは生女直と号すようになる。

習俗 (以下はWikipedia「勿吉」とほぼ同じ)

衣食住：婦人は布製の服をまとい、男子は猪や犬の皮を衣とする。また、髪型は皆髪を編んでいる(辮髪)。牛と羊がいないが、猪を多く飼っており、食物は主にその猪を食す。また米を噛んで製造する酒、いわゆる「口噛み酒」を造って飲む。住居は塚状の穴居式で、塚の上部に入口があってそこから梯子を使って下へ降りる。

人尿洗顔：挹婁人と同様、最大の特徴である「人尿で手や顔を洗う」という風習も受け継いでおり、中国の史書では「諸夷で最も不潔」と評される。

毒矢：彼らの使用する毒矢は殺傷能力に優れており、命中すれば必ず死に至り、毒薬の製造過程で発生する湯気でも死に至るといふ。その毒薬の製造は毎年7月8月に行われる。弓の長さは3尺、箭の長さは尺2寸、石を使って鏃とした。石の矢じりを使うのは拂涅部より以東の者たちであり、彼らは古の肅慎氏の後裔とされる。

埋葬：地面に穴を掘って死者を埋めるが、棺はない。生前乗っていた馬を殺して屍前に供える。

政治体制：特に統一的な君主はおらず、各部族ごとに酋長がおり、その酋長（渠帥）を大莫弗瞞咄と叫ぶ。

言語系統・文字：（詳細は「靺鞨語」を参照）靺鞨が女真の別名であることから、言語は女真語と同じくツングース語の南方グループに属す。比較言語学的研究によれば、肅慎系の語彙はツングース系言語の語彙に近いとされてきた。また、発掘調査による出土品から、靺鞨時代の日用品や居住形態・食生活などが文字記録の残っている女真時代へと連続していることが確認されている。

後漢書

“挹婁は古の肅慎国である。扶余の東北千里程にあり、大海に沿い、北沃沮と南で接する。その北はしられていない。” 挹婁 古肅慎之國也 在

伏餘東北韃餘淠 東濱大海 南與北沃沮接 不知其北所極（後漢）

“(訳)”

人形似伏餘 而言語各異 有五穀、麻/麻布 齧赤玉、好貂 無君長 其邑落各有大人 處于山林之間 土氣極寒 常為穴居 以深為貴 大倅至接九梯 好養豕 食其肉 衣其皮 鑿以豕膏塗身 厚數分 以禦風寒 夏則裸袒 以呎布蔽其前後 其人臭穢不潔 作廁于中 園之而居 自漢興以後 臣屬伏餘 種眾/衆雖少 而多勇力 處山險 又善射 發/髮能入 人目 弓長四呎 力如弩 矢用枯 長一呎八吋 青石為鏃 鏃皆施毒 中人即死 便乘船 好寇盜 鄰國畏患 而卒不能服 東夷伏餘飲食類皆用俎豆 唯挹婁獨無 法俗最無綱紀 者也（後漢）

三国志

“挹婁は夫餘の東北千餘里に住む。大海に沿い、北沃沮と南で接する。その北はしられていない。その土地は険しい山が多い。扶余人に似てはいるが、言葉は夫余と異なり、高句麗と同じである。”

挹婁在夫餘東北千餘里 濱大海 南與北沃沮接 未知其北所極 其土地多山險 其人形似夫餘 言語不與夫餘 句麗同 (三)

“(訳) 東夷の飲食の類は皆俎豆を用いる。ただ、挹婁は用いていない。法俗は綱紀がない。” (三)

俎と豆。俎はいけにえの肉をのせるまないた、豆は菜を盛るたかつき。転じて、礼法。(コトバンク「俎豆」)

“(訳)”

其人形似夫餘 言語不與夫餘 句麗同 有五穀 牛 馬 麻布 人多 勇力 無大君長 邑落各有大人 處山林之間 常穴居 大家深九梯 以多爲好 土氣寒 劇於夫餘 其俗好養豬 食其肉 衣其皮 冬以豬膏塗身 厚數分 以禦 風寒 夏則裸袒 以尺布隱其前後 以蔽形體 其人不絜 作溷在中央 人圍其表居 其弓長四尺 力如弩 矢用楛 長尺八寸 青石爲鏃 古之肅慎氏之國也 善射 射人皆入 (因) 矢施毒 人中皆死 出赤玉 好貂 今所謂挹婁貂是也 自漢已來 臣屬夫餘 夫餘責其租賦重 以黃初中叛之 夫餘數伐之 其人衆雖少 所在山險 鄰國人畏其弓矢 卒不能服也 其國便乘船寇盜 鄰國患之 東夷飲食類皆用俎豆 唯挹婁不 法俗最無綱紀也(三)

晋書

“肅慎氏は挹婁ともいい、不鹹山の北に住む。夫餘から六十日の所である。東は大海に沿い、西は寇漫汗国と接する。北は弱水である。”

肅慎氏一名挹婁 在不鹹山北 去夫餘可六十日行 東濱大海 西接寇漫汗國 北極弱水（晋）

不鹹山は白頭山である。（Wikipedia「白頭山」）

弱水はエチナ川の別名で松花江の古称である。（Wikipedia「弱水」）

寇漫汗國を比定しているサイトは見つからなかった。

夏則 巢居 冬則穴處 父子世爲君長 無文墨 以言語爲約 有馬不乘 但以爲財産而已 無牛羊 多畜豬 食其肉 衣其皮 績毛以爲布 有樹名雜常 若中國有聖帝 代立 則其木生皮可衣 無井灶 作瓦鬲 受四五升以食 坐則箕踞 以足挾肉而啖之 得凍肉 坐其上令暖 土無鹽鐵 燒木作灰 灌取汁而食之 俗皆編發 以布作衾 徑尺餘 以蔽前後 將嫁娶 男以毛羽插女頭 女和則持歸 然後致禮娉之 婦貞而女淫 貴壯而賤老 死者其日即葬之於野 交木作小槨 殺豬積其上 以爲死者之糧 性兇悍 以無憂哀相尚 父母死 男子不哭泣 哭者謂之不壯 相盜竊 無多少皆殺之 故雖野處而不相犯 有石磬 皮骨之甲 檀弓三尺五寸 楛矢長尺有咫 其國東北有山出石 其利入鐵 將取之 必先祈神（晋）

Wikipedia 「肅慎(中国)」の訳

肅慎氏は一名を挹婁といい、不咸山(白頭山)の北に在り、夫余から60日ばかりの

行程である。東は大海(日本海)に沿い、西は寇漫汗国に接し、北は弱水(アムール川)にまで達している。その領域は東西・南北ともに数千里におよび、人々は奥深い山や谷に住んでいる。その路は険阻であり、車馬は通わない。夏の間は樹の上に住み、冬の間は地下の穴の中で生活する。父子が代々君長となる。文字はなく、口頭でもって約束ごとをおこなった。馬がいるが乗らず、ただ財産とするだけである。牛や羊はいないが、多くの猪(ブタ)を飼っており、その肉を食べ、その皮を衣とする。毛を紡いで布とする。樹の名前に雒常というものがあり、中国の聖帝が新たに帝位につく時には、その木は皮を生じるので衣とすることができた。井戸や竈はなく、瓦鬲(土釜)を作り、それに4・5升を盛って食べる。座り方は両足を伸ばして座り、足をもって肉をつかんで食べ、凍った肉を得れば、その上に座って暖める。その地には塩や鉄がなく、木を焼いて灰を作り、水を注いで汁を取り、それを食した。人々はみな髪を編み、布で檐(せん：まえだれ)を作った。その大きさは径一尺あまりであり、それで身体の前を蔽った。結婚しようとする時には、男が女の頭に毛羽を挿し、女が結婚を承諾すれば毛羽を家に持ち帰り、然る後に礼をつくして女を娶る。婦人は貞淑であるが、女はほしいままにふるまう。人々は壯者を貴び、老人を賤しむ。死者はその日のうちに野に葬られ、木を組み合わせて小さな槨(かく：ひつぎ)をつくり、猪を殺してその上に積み、死者の糧とする。性格はあらあらしく、憂い哀しまないことをもって互いに尚んだ。父母が死んでも男子は泣き叫んだりしない。泣き叫ぶような者は壯者とは言わない。盗竊した者はその多少にかかわらず皆これを殺すので、あたりに放り出しても盗む者はいない。武器は石弩・皮骨の甲、3尺5寸の檀弓、長さ1尺数

咫の楛矢がある。その国の東北には石を産出する山があり、その石の鋭利さは鉄をも凌ぐほどである。これを採取するときには必ずその前に神に祈るのである。

周の武王の時、その楛矢、石磐を献上した。周公旦が成王を補佐すると、ふたたび使者を遣わして入賀した。それから千余年、秦・漢が盛んになると、使者を送って朝貢することはなかった。文帝(司馬昭)が魏の丞相となった頃、魏の景元(260年-264年)の末に肅慎氏が来貢して楛矢・石磐・弓甲・貂皮などを献上した。魏帝(曹奐)は詔して献上物を相府に贈り、肅慎氏の王には儔鷄・錦罽・綿帛を与えた。晋の武帝(在位：265年-289年)の太康(280年-289年)初めに至り、ふたたび来朝して献上した。元帝(在位 317年-322年)晋朝を中興すると、また江左(東すなわち建康)詣でてその石磐を献上した。成帝(在位：325年 - 342年)の時に至り、後趙の石季龍に朝貢するようになり、4年で到達できた。季龍はこれを問い、肅慎の使者が答えて言った「たえず牛馬の様子を見ていましたところ、西南に向かって眠ることが3年続きました。これによって大国(後趙)の所在を知ることができましたので、やって参りました」と。 ※『晋書』四夷伝の記述は挹婁時代のものである。

魏書 (勿吉國)

“(訳)”

勿吉國 在高句麗北 舊肅慎國也 邑落各自有長 不相總一 其人勁悍 於東夷最強 言語獨異 常輕豆莫婁等國

“(訳)”

其地下濕 築城穴居 屋形似塚 開口於上 以梯出入 其國無牛 有車馬 佃則偶耕 車則步推 有粟及麥稜 菜則有葵 水氣鹹凝 鹽生樹上 亦有鹽池 多猪 無羊 嚼米醞酒 飲能至醉 婦人則布裙 男子猪犬皮裘 初婚之夕 男就女家執女乳而罷 便以為定 仍為夫婦 俗以人溺洗手面 頭插虎豹尾 善射獵 弓長三尺 箭長尺二寸 以石為鏃 其父母春夏死 立埋之 冢上作屋 不令雨濕；若秋冬 以其屍捕貂 貂食其肉 多得之 常七八月造毒藥 傳箭鏃 射禽獸 中者便死 煮藥毒氣亦能殺人 國南有徒太山 魏言「大白」 有虎豹羆狼害人 人不得山上洩汗 行逕山者 皆以物盛

隋書（靺鞨）

“(訊)”

邑落俱有酋長 不相總一 凡有七種：其一號粟末部 與高麗相接 勝兵數千 多驍武 每寇高麗中 其二曰伯咄部 在粟末之北 勝兵七千 其三曰安車骨部 在伯咄東北 其四曰拂涅部 在伯咄東 其五曰號室部 在拂涅東 其六曰黑水部 在安車骨西北 其七曰白山部 在粟末東南 勝兵 並不過三千 而黑水部尤為勁健 自拂涅以東 矢皆石鏃 即古之肅慎氏也 所居多依山水 渠帥曰大莫弗瞞咄 東夷中為強國 有徒太山者 俗甚敬畏 上有熊羆 豹狼 皆不害人 人亦不敢殺 地卑濕 築土如堤 鑿穴以居 開口向上 以梯出入 相與偶耕 土多粟麥稜 水氣咸 生鹽于木皮之上 其畜多猪 嚼米為酒 飲之亦醉 婦人服布 男子衣豬狗皮 俗以溺洗手面 于諸夷最為不潔 其俗淫而妒 其妻外淫 人有告其夫者 夫輒殺妻 殺而後悔 必殺告者 由是姦淫之事終不發揚 人皆射獵為業 角弓長三尺 箭長尺有二寸 常以七八月造毒藥 傳矢以射禽獸 中者立死

北史（勿吉）

“(訊)”

勿吉國在高句麗北 一曰靺鞨 邑落各自有長 不相總一 其人勁悍 於東夷最強 言語獨異 常輕豆莫婁等國

“(訊)”

其部類凡有七種：其一號粟末部 與高麗接 勝兵數千 多驍武 每寇高麗 其二伯咄部 在粟末北 勝兵七千 其三安車骨部 在伯咄東北 其四拂涅部 在 伯咄東 其五號室部 在拂涅東 其六黑水部 在安車骨西北 其七白山部 在粟末東南 勝兵並不過三千 而黑水部尤為勁健 自拂涅以東 矢皆石鏃 即古肅慎 氏也 東夷中為強國 所居多依山水 渠帥曰大莫弗瞞咄 國南有從太山者 華言太皇 俗甚敬畏之 人不得山上洩汗 行經山者 以物盛去 上有熊羆豹狼 皆不 害人 人亦不敢殺 地卑濕 築土如堤 鑿穴以居 開口向上 以梯出入 其國無牛 有馬 車則步推 相與偶耕 土多粟 麥 稌 菜則有葵 水氣城 生鹽于木 皮之上 亦有鹽池 其畜多獵 無羊 嚼米為酒 飲之亦醉 婚嫁 婦人服布裙 男子衣豬皮裘 頭插武豹尾 俗以溺洗手面 于諸夷最為不潔 初婚之夕 男就女 家執女乳而罷 妒 其妻外淫 人有告其夫 夫輒殺妻而後悔 必殺告者 由是姦淫事終不發 人皆善射 以射獵為業 角弓長三尺 箭長尺二寸 常以七八月造 毒藥 傅矢以射禽獸 中者立死 煮毒藥氣亦能殺人 其父母春夏死 立埋之 塚上作屋 令不雨濕 若秋冬死 以其屍捕貂 貂食其肉 多得之

13.5. 高句麗の内政と風俗

晋書と夷蛮伝のない陳書以外の唐書までの全ての書に記載されている。

Wikipedia「高句麗」では、

名称：高句麗は別名を貊と言う。日本では高麗と書いても貊(狛)と書いてもこまと読む。現在では高麗との区別による理由から「こうくり」と読む慣習が一般化しているが、本来、百済・新羅の「くだら」・「しらぎ」に対応する日本語での古名は「こま」である。

高句麗は文献記録上は貊族として現れる。そして 8 世紀に突厥で造られたオルホン碑文にはボクリ(bökli)という東方の国が登場する。岩佐精一郎はこのボクリが高句麗を指すものであると見、貊句麗の音を表したものであろうとした。それに対して護雅夫はこれは bök eli と読むべきで、高句麗を指すものには違いないが、意味は貊の国であるとする。

狛犬は獅子とされているが、神社の石造は、筆者には、ライオンには見えず、たてがみがないので虎ではないかと思っている。

Wikipedia「アムールトラ」では、

アムールトラ(*Panthera tigris altaica*)は、ネコ科に属する虎の一亜種。altaicaとは、ロシア領西シベリアにあるアルタイ地方を意味する。現在は極東ロシアの沿海地方、ハバロフスク地方のアムール川および中国東北部(旧満洲)を含むウスリー川

流域、長白山地区でのみ生息が確認されているが、かつては満洲、朝鮮半島、モンゴル、シベリアに広く分布しており、その生息範囲は中央アジアや西アジアにまで伸びていた。

「高句麗」を続ける。

言語＞周辺諸言語との関係：朝鮮語学者の李基文は、中国史料にある、高句麗、夫余（扶余）、東沃沮、濊の言語がほぼ同じであるという記述に依拠し、これらの言語が属する夫余系諸語（扶余語族）の存在を想定した。一方で、『三国志』や『北史』には肅慎、靺鞨（勿吉）の言語が高句麗語と異なるとする記録があることから、肅慎の言語がツングース系言語と想定されるならばツングース諸語と夫余諸語の違いが明記されていることとなり重大な意味を持つとする。

歴史＞建国神話：三国史記・高句麗本紀冒頭の神話によれば、高句麗は朱蒙（東明聖王）により建てられたという。朱蒙は河神の娘である柳花の息子であるとされる。その神話では顛末は以下のようなものである。夫余王の金蛙が大白山（白頭山）の南の優渤水で柳花に出会い話しかけると、彼女は天帝の子と称する解慕漱と愛し合ったが、解慕漱はどこかへいなくなってしまう、父母は媒酌人もなく人に従ったことを責め、彼女を幽閉したと言った。金蛙がこの話を不思議に思って家に柳花を閉じ込めると、日光が彼女を照らし彼女は身籠った。そして大きな卵を産み、やがて中から男の子が生まれた。これが朱蒙である。幼少より卓越した才能を見せた朱蒙は、夫余の王子たちの誰よりも優れていた。不安を覚えた夫余の王子たちは朱蒙を除くように

主張したが聞き入れられず、最終的に暗殺を試みたが、危険を察知した母柳花の助言によって朱蒙は国外へ脱出し、卒本川に至って建国した。なお、高句麗本紀の分注異伝では、朱蒙が卒本夫余に来た時、男子のいなかった夫余王が朱蒙の才を見て王女と結婚させ、後に朱蒙が王になったとする。そして国号を高句麗としたので高を氏の名前としたという。三国史記に従うならば、この建国は前漢の元帝建昭 2 年のことであり、西暦に直すと前 37 年となる。

後漢書

“(訳)”

多大山深穀 人隨而為居 少田業 力作不足以自資 故其俗節于飲食 而好脩宮室 東夷相傳以為佚餘別/警種 故言語法則多同 而跪拜拙一腳 行步皆走 凡有五族 有消奴部、絶奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部 本消奴部為王 稍微弱 後桂婁部代之 其置官 有相加、對盧、沛者、古鄒大加、主簿、優檣/臺/飈、使者、帛衣先人 武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟 賜鼓吹伎人 其俗淫 皆潔淨/淨自熹 暮夜輒男女群聚為倡樂 好祠鬼神、社稷、零星 以十月祭天大會 名曰“東盟” 其國東有大穴 號禊神 亦以十月迎而祭之 其公會衣服皆錦繡 金銀以自飾 大加、主簿皆著幘 如冠幘而無後；其小加著摺風 形如弁 無牢獄 有罪 諸加評議便殺之 沒入妻子為奴婢 其昏姻皆就婦傢 生子長大 然後將還 便稍營送終之具 金銀財幣儘/盡于厚葬 勳/積石為封 亦種鬆柏 其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮、東濊皆屬焉 (後漢)

三国志

“(訳)”

常從玄菟郡受朝服衣幘 高句麗令主其名籍 後稍驕恣 不復詣郡 於 東界築小城 置朝服衣幘其中 歲時來取之 (三)

“(訳)”

其國中大家不佃作 坐食者萬餘口 下戶遠擔米糧魚鹽供給之 其民喜歌舞 國中邑落暮 夜男女群聚 相就歌戲 無大倉庫 家家自有小倉 名之爲桴京 其人絜清自喜 喜藏釀 跪拜申一腳 與夫餘異 行步皆走 以十月祭天 國中大會 名曰東盟 其公會 衣服皆錦繡金銀以自飾 大加主簿頭著幘 如幘而無餘 其小加著折風 形如弁 其國東有大穴 名隧穴 十月國中大會 迎隧神還于國東上祭之 置木隧 於神坐 無牢獄 有罪諸加評議 便殺之 沒入妻子爲奴婢 其俗作婚姻 言語已定 女家作小屋於大屋後 名婿屋 婿暮至女家戶外 自名跪拜 乞得就女宿 如是者再三 女父母乃聽使就小屋中宿 傍頓錢帛 至生子已長大 乃將婦歸家 其俗淫 男女已嫁娶 便稍作送終之衣 厚葬 金銀財幣 盡於送死 積石爲封 列種松柏 其馬皆小 便登山 國人有氣力 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉 又有小水貊 句麗作國 依大水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水作國 因名之爲小水貊 出好弓 所謂貊弓是也 (三)

宋書

“東夷の高句麗國は、今は漢時代の遼東郡を治めている。”

東

夷高句麗國，今治漢之遼東郡

“(訳)”

高祖踐阼 詔曰：「使持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句驪王 樂浪公璉 使持節 督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王映 並執義海外 遠修貢職 惟新 告始 宜荷國休 璉可 征東大將軍 映可鎮東大將軍 持節 都督 王 公如故 」

南齊書 (高麗國)

風俗の記事は見当たらない。

梁書

“(訳)”

句驪地方可二千里 中有遼山 遼水所出 其王都於丸都之下 多大山深谷 無原澤 百姓依之以居 食澗水 雖土著 無良田 故其俗節食 好治宮 室 于所居之左立大屋 祭鬼神 又祠零星 社稷 人性凶急 喜寇抄 其官 有相加 對盧 沛者 古鄒加 主簿 優臺 使者 阜衣先人 尊卑各有等級 言語 諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異 本有五族 有消奴部 絕奴部 慎奴部 藿奴部 桂婁部 本消奴部爲王 微弱 桂婁部代之 漢時賜衣幘 朝服 鼓吹 常從玄菟郡受之 後稍驕 不復詣郡 但於東界築小城以受之 至今猶名此城爲幘溝婁 「溝婁」者 句驪名「城」也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置 對盧 其俗喜歌舞 國中邑落男女 每夜羣聚歌戲 其人潔清自喜 善藏釀 跪拜申一腳 行步皆走 以十月祭天大會 名曰「東明」 其公會衣服 皆錦繡金銀以 自飾 大加 主簿頭 所著似幘而無後；其小加著折風 形如弁 其國無牢獄 有罪者 則會諸加評議殺之 沒入

妻子 其俗好淫 男女多相奔誘 已嫁娶 便稍作送 終之衣 其死葬 有槨無棺 好厚葬
金銀財幣盡於送死 積石爲封 列植松柏 兄死妻嫂 其馬皆小 便登山 國人尚氣力 便
弓矢刀矛 有鎧甲 習戰鬪 沃 沮 東穢皆屬焉

魏書

風俗の記事は見当たらない。

周書

“(訳)”

其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城

“(訳)”

大官有大對盧 次有太大兄 大兄 小兄 意俟奢 烏拙 太大使者 大使者 小使者 褥
奢 翳屬 仙人并褥薩凡十三等 分掌內外事焉 其大對盧 則以彊弱相陵 奪而自為之
不由王之署置也 其刑法：謀反及叛者 先以火焚爇 然後斬首 籍沒其家 盜者 十餘倍
徵贓 若貧不能備 及負公私債者 皆聽評 其子女為奴婢以償之

隋書 (高麗)

“(訳)”

都於平壤城 亦曰長安城 東西六里 隨山屈曲 南臨湞水 復有國內城 漢城 並其都
會之所 其國中呼爲 三京

“(訳)”

官有太大兄 次大兄 次小兄 次對盧 次意侯奢 次烏拙 次太大使者 次大使者 次小使者 次褥奢 次翳屬 次仙人 凡十二 等 復有內評 外評 五部褥薩 人皆皮冠 使人加插鳥羽 貴者冠用紫羅 飾以金銀 服大袖衫 大口袴 素皮帶 黃革履 婦人裙襦加襖 兵器與中國略同 每 春秋校獵 王親臨之 人稅布五匹 谷五石 遊人則三年一稅 十人共細布一匹 租戶一石 次七門 下五門 反逆者縛之於柱 爇而斬之 籍沒其家 盜則償十倍 用刑既峻 罕有犯者 樂有五弦 琴 箏 箏 篳篥 橫吹 簫 鼓之屬 吹蘆以和曲 每年初聚戲于湏水之上 王乘腰輿 列羽儀以觀之 事畢 王以衣服入 水 分左右爲二部 以水石相濺擲 喧呼馳逐 再三而止 俗好蹲踞 潔淨自喜 以趨走爲敬 拜則曳一腳 立 各反拱 行必搖手 性多詭伏 父子同川而浴 共室 而寢 婦人淫奔 俗多遊女 有婚嫁者 取男女相悅 然即爲之 男家送豬酒而已 無財聘之禮 或有受財者 人共恥之 死者殯于屋內 經三年 擇吉日而葬 居 父母及夫之喪 服皆三年 兄弟三月 初終哭泣 葬則鼓舞作樂以送之 埋訖 悉取死者生時服玩車馬置於墓側 會葬者爭取而去 敬鬼神 多淫祠

南史 (高麗)

“(訳)” 其先所出 事詳北史

北史 (高麗)

蒙雖の話。

風俗の記事は記年記事の後に。

“(訊)”

其國 東至新羅 西度遼 二千里 南接百濟 北鄰靺鞨 一千餘里 人皆士著 隨山谷而居 衣布帛及皮 土田薄瘠 蠶農不足以自供 故其人節飲食 其王好修宮室 都平壤城 亦曰長安城 東西六里 隨山屈曲 南臨溟水 城內唯積倉儲器備 寇賊至日 方入固守 王別爲宅於其側 不常居之 其外復有國 內城及漢城 亦別都也 其國中呼爲三京 復有遼東 玄菟等數十城 皆置官司以統攝 與新羅每相侵奪 戰爭不息

“(訊)”

官有大對盧 太大兄 大兄 小兄 竟侯奢 鳥拙 太大使者 大使者 小使者 禡奢 翳屬 仙人 凡十二等 分掌內外事 其大對盧則以強弱相陵奪 而自爲之 不由王署置 復有內評 五部禡薩 人皆頭著折風 形如弁 士人加插二鳥羽 貴者 其冠曰蘇骨 多用紫羅爲之 飾以金銀 服大袖衫 大口袴 素皮 帶 黃革履 婦人裙襦加襪 書有《五經》 《三史》 《三國志》 《晉陽秋》 兵器與中國略同 及春秋校獵 王親臨之 稅 布五疋 谷五石 遊人則三年一 稅 十人共細布一疋 租 戶一石 次七斗 下五斗 其刑法 叛及謀逆者 縛之柱 蒸而斬之 籍沒其家 盜則償十倍 若貧不能償者樂及公私債負 皆聽評其子 女爲奴婢以償之 用刑既峻 罕有犯者 樂有五弦 琴 箏 篳篥 橫吹 簫 鼓之屬 吹蘆以和曲 每年初 聚戲溟水上 王乘腰輦 列羽儀觀之 事畢 王以衣 入水 分爲左右二部 以水石相濺擲 喧呼馳逐 再三而止 俗潔淨自喜 尚容止 以趨走爲敬 拜則曳一腳 立多反拱 行必插手 性多詭伏 言辭鄙穢 不簡親 疏 父子同川而浴 共室而寢 好歌舞 常以十月祭天 其公會衣服 皆錦繡金銀以爲飾 好蹲踞 食用俎機 出三尺馬 云本朱蒙所乘馬種 即果下也 風俗尚 淫 不以爲愧 俗多遊女 夫無常人 夜則男女群聚而戲 無有貴賤之

節 有婚嫁 取男女相悅即爲之 男家送豬酒而已 無財聘之禮 或有受財者 人共恥之
以 爲賣婢 死者 殯在屋內 經三年 擇吉日而葬 居父母及夫喪 服皆三年 兄弟三月
初終哭泣 葬則鼓舞作樂以送之 埋訖 取死者生時服玩車馬置墓側 會葬 者爭取而去
信佛法 敬鬼神 多淫祠 有神廟二所：一曰夫餘神 刻木作婦人像 一曰高登神 雲是其
始祖夫余神之子 並置官司 遣人守護 蓋河伯女 硃蒙 云

舊唐書

“(詛)”

高麗者 出自扶餘之別種也 其國都於平壤城 即漢樂浪郡之故地 在京師東五千一百
里 東渡海至於新羅 西北渡遼水至於營州 南渡海至於百濟 北 至靺鞨 東西三千一百
里 南北二千里 其官大者號大對盧 比一品 總知國事 三年一代 若稱職者 不拘年限
交替之日 或不相祇服 皆勒兵相攻 勝者爲 之 其王但閉宮自守 不能制禦 次曰太大
兄 比正二品 對盧以下官 總十二級 外置州縣六十餘城 大城置儻薩一 比都督 諸城
置道使 比刺史 其下各有僚 佐 分掌曹事 衣裳服飾 唯王五彩 以白羅爲冠 白皮小帶
其冠及帶 咸以金飾 官之貴者 則青羅爲冠 次以緋羅 插二鳥羽 及金銀爲飾 衫筒袖
褲大 口 白韋帶 黃韋履 國人衣褐戴弁 婦人首加巾幘 好圍棋投壺之戲 人能蹴鞠 食
用籩豆 簠簋 尊俎 疊洗 頗有箕子之遺風

“(詛)”

其所居必依山谷 皆以茅草葺舍 唯佛寺 神廟及王宮 官府乃用瓦 其俗貧窶者多 冬月皆作長坑 下燃；焮火以取暖 種田養蠶 略同中國 其法：有謀反叛者 則集衆持火炬競燒灼之 焦爛備體 然後斬首 家悉籍沒；守城降敵 臨陣敗北 殺人行劫者 斬；盜物者 十二倍酬贓；殺牛馬者 沒身爲奴婢 大體用法嚴峻 少有犯者 乃至路不拾遺 其俗多淫祀 事靈星神 日神 可汗神 箕子神 國城東有大穴 名神隧 皆以十月 王自祭之

“(訊)”

俗愛書籍 至於衡門廡養之家 各於街衢造大屋 謂之扁堂 子弟未婚之前 晝夜于此 讀書習射 其書有五經及史記 漢書 範曄後漢書 三國志 孫盛晉春秋 玉篇 字統 字林；又有文選 尤愛重之

新唐書 (高麗)

“(訊)”

高麗 本扶餘別種也。其君居平壤城 亦謂長安城 漢樂浪郡也 去京師五千里而 贏 隨山屈繚爲郭 南涯湏水 王築宮其左 又有國內城 漢城 號別都 水有大遼 少遼：大遼出靺鞨西南山 南曆安市城；少遼出遼山西 亦南流 有梁水出塞 外 西行與之合 有馬訾水出靺鞨之白山 色若鴨頭 號鴨淥水 曆國內城西 與鹽難水合 又西南至安市 入於海 而平壤在鴨淥東南 以巨鱸濟人 因恃以爲 塹

“(訊)”

官凡十二級：曰大對廬 或曰吐摔；曰鬱折 主圖簿者；曰太大使者；曰帛衣頭大兄 所謂帛衣者 先人也 秉國政 三歲一易 善職則否 凡代日 有 不服則相攻 王爲閉宮守 勝者聽爲之；曰大使者；曰大兄；曰上位使者；曰諸兄；曰小使者；曰過節；曰先 人；曰古鄒大加 其州縣六十 大城置僣薩一 比都 督；餘城置處閭近支 亦號道使 比 刺史 有參佐 分幹 有大模達 比衛將軍；末客 比中郎將

分五部：曰內部 即漢桂婁部也 亦號黃部；曰北部 即絕奴部也 或號後部；曰東部 即順奴部也 或號左部；曰南部 即灌奴部也 亦號前部；曰西部 即消奴部也

“(訊)”

王服五采 以白羅制冠 革帶皆金扣 大臣青羅冠 次絳羅 珥兩鳥羽 金銀雜扣 衫筒 袖 褲大口 白韋帶 黃革履 庶人衣褐 戴弁 女子首巾幘 俗喜弈 投壺 蹴鞠 食用籩 豆 簠 簋 罍 洗 居依山谷 以草茨屋 惟王宮 官府 佛廬以瓦 饑民盛冬作長坑 煇火 以取暖 其治 峭法以繩下 故少 犯 叛者叢炬灼體 乃斬之 籍入其家 降 敗 殺人及剽 劫者斬 盜者十倍取償 殺牛馬者沒爲奴婢 故道不掇遺 婚娶不用幣 有受者恥之 服父 母喪三年 兄 弟逾月除 俗多淫祠 禮靈星及日 箕子 可汗等神 國左有大穴曰神隧 每 十月 王皆自祭 人喜學 至窮里廝家 亦相矜勉 衢側悉構嚴屋 號局堂 子弟未婚 者曹 處 誦經習射

13.6. 韓・馬韓の内政と風俗

後漢書・三国志・晋書

後漢書

“(訳)”

韓有三種・・・皆古之辰國也 馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 儘/盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉

馬韓人知田蠶 作綿佈 齧大慄如梨 有長尾雞/鷄 尾長五呎 邑落雜居 亦無城郭 作土室 形如冢 開戶在上 不知跪拜 無長幼男女之別/警 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重瓔珠 以綴衣為飾 及縣頸垂耳 大率皆魁頭露_レ介 佈袍草履 其人壯勇 少年有築室作力者 輒以繩貫脊皮 縋以大木 歡呼為健 常以五月田竟祭鬼神 晝夜酒會 群聚歌舞 舞輒數十人相隨 蹋地為節 十月農功畢 亦復/複如之 諸國邑各以一人主祭天神 號為“天君” 又立嚇/甦/蘇塗 建大木以縣鈴鼓 事鬼神 其南界近倭 亦有文身者 (後漢)

三国志

“(訳)”

知蠶桑 作綿布 各有長帥 大者自名為臣智 其次為邑借 散在山海間 無城郭 (三)

“(訳)”

凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治月支國 臣智或加優呼臣
雲遣支報安邪馱支濱臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率善 邑君 歸義侯 中郎
將 都尉 伯長 (三)

“(訊)”

其俗少綱紀 國邑雖有主帥 邑落雜居 不能善相制禦 無跪拜之禮 居處作草屋土室
形如塚 其戶在上 舉家共在中 無長幼男女之別 其葬有槨無 棺 不知乘牛馬 牛馬盡
於送死 以瓔珠爲財寶 或以綴衣爲飾 或以縣頸垂耳 不以金銀錦繡爲珍 其人性強勇
魁頭露紒 如炁兵 衣布袍 足履革躡蹋 其國 中有所爲及官家使築城郭 諸年少勇健者
皆鑿脊皮 以大繩貫之 又以丈許木錘之 通日嚙呼作力 不以爲痛 既以勸作 且以爲健
常以五月下種訖 祭鬼神 群聚歌舞 飲酒晝夜無休 其舞 數十人俱起相隨 踏地低昂
手足相應 節奏有似鐸舞 十月農功畢 亦復如之 信鬼神 國邑各立一人主祭天神 名之
天君 又 諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之
好作賊 其立蘇塗之義 有似浮屠 而所行善惡有異 其北方近郡諸國差曉禮 俗 其遠處
直如囚徒奴婢相聚 無他珍寶 禽獸草木略與中國同 出大栗 大如梨 又出細尾雞 其尾
皆長五尺餘 其男子時時有文身 又有州胡在馬韓之西海中 大 島上 其人差短小 言語
不與韓同 皆髡頭如鮮卑 但衣韋 好養牛及豬 其衣有上無下 略如裸勢 乘船往來 市
買韓中 (三)

晉書

大者萬戶 小者數千家 各有渠帥 俗少綱紀 無跪拜之禮 居處作土室 形如塚 其戶

向上 舉家共在 其中 無長幼男女之別 不知乘牛馬 畜者但以送葬 俗不重金銀錦麗 而貴瓔珠 用以綴衣或飾發垂耳 其男子科頭露紒 衣布袍 履草躡 性勇悍 國中有所調 役 及起築城隍 年少勇健者皆鑿其背皮 貫以大繩 以杖搖繩 終日歡呼力作 不以爲痛 善用弓楯矛櫓 雖有鬥爭攻戰 而貴相屈服 俗信鬼神 常以五月耕種 畢 群聚歌舞以祭 神；至十月農事畢 亦如之 國邑各立一人主祭天神 謂爲天君 又置別邑 名曰蘇塗 立 大木 懸鈴鼓 其蘇塗之義 有似西域浮屠也 而所行 善惡有異（晉）

13.7. 辰韓の内政と風俗

後漢書・三国志・晋書

後漢書

“(訳)”

耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦語 故或名之為秦韓 有城柵屋室 諸小別/警邑 各有渠 帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊祗 次有殺奚 次有邑藉 土地肥美 宜五穀 知蠶桑 作縑佈 乘駕牛馬 嫁娶以禮 行者讓路 國齣鐵 濊、倭、馬韓並/併從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨 俗喜歌舞、飲酒、鼓瑟 兒生欲令其頭扁 皆押之以石（後漢）

三国志

“(訳)”

其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之 有城柵 其言語不與馬韓同 名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為 行觴 相呼皆為徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人為阿殘；東方人名我為阿 謂樂浪人本其殘餘人 今有名之為秦韓者 始有六國 稍分為十二國（三）

晋書

“(訊)”

自言秦之亡人避役入韓 韓割東界以居之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓
初有六國 後稍分爲十二 (晉)

13.8. 弁韓の内政と風俗

後漢書・三国志・晋書

後漢書

“(訳)”

弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美發/髮 衣服潔清
而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者 (後漢)

三国志

“(訳)”

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺
奚 次有邑借 (三)

“(訳)”

弁辰韓合二十四國 大國四五千家 小國六七百家 總四五萬戶 其十二國屬辰王 辰
王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王 (三)

“(訳)”

土地肥美 宜種五穀及稻 曉蠶桑 作縑布 乘駕牛馬 嫁娶禮俗 男女有別 以大鳥羽
送死 其意欲使死者飛揚 國出鐵 韓濊倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以

供給二郡 俗喜歌舞飲酒 有瑟 其形似築 彈之亦有音曲 兒生 便以石厭其頭 欲其褊
今辰韓人皆褊頭 男女近倭 亦文身 便步戰 兵仗與馬韓同 其俗 行者相逢 皆住讓路

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶
皆在戶西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大 衣服絜清 長髮 亦作廣幅細
布 法俗特嚴峻（三）

晉書

“(訊)”

各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之
人 故爲馬韓所制也 地宜五穀 俗饒蠶桑 善作縑布 服 牛乘馬 其風俗可類馬韓 兵器
亦與之同 初生子 便以石押其頭使扁 喜舞 善彈瑟 瑟形似築（晉）

17.9. 他の東夷諸国の4内政と風俗

小水貊、裨離、加羅、扶桑、流求

小水貊の風俗

後漢書

(条は無し、)

“高句麗は貊ともいう。別種があり、小水の畔に住んでいる。これにより小水貊という。弓を好む。いわゆる貊弓である。”

句驪一名貊 有別種 依小水為居 因名曰小水貊 齣好弓 所謂貊弓是也 (後漢)

“(訳)”

又有小水貊 句麗作國 依大水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水作國 因名之為小水貊 出好弓 所謂貊弓是也 (三)

裨離

晋書

“(訳)”

裨離國在肅慎西北 馬行可二百日 領戶二萬 養雲國去裨離馬行又五十日 領戶二萬 寇莫汗國去養雲國又百日行 領戶五萬餘 一群國去莫汗又百五十日 計去肅慎五萬餘里 其風俗土壤並未詳 (晋)

“(訳)”

泰始三年 各遣小部獻其方物 至太熙初 復有牟奴國帥逸芝惟離 模盧國帥沙支臣芝
於離末利國帥加牟臣芝 蒲都國帥因末 繩全國帥馬路 沙樓國帥鈺加 各遣正副使詣東
夷校尉何龕歸化（晋）

州鬻國

後漢書

“(訳)”

馬韓之西 海島上有州鬻國 其人短小 髡頭 衣韋衣 有上無下 好養牛豕 乘船往來
貨市韓中

加羅

南齊書

“(訳)” 加羅國 三韓種也

風俗の記事は見当たらない。

扶桑

梁書

南史

“(訊)”

扶桑國者 齊永元元年 其國有沙門慧深來至荊州 說云：「扶桑在大漢國東二萬餘里 地在中國之東 其土多扶桑木 故以爲名 」扶桑葉似桐 而初 生如筍 國人食之 實如梨 而赤 績其皮爲布以爲衣 亦以爲綿 作板屋 無城郭 有文字 以扶桑皮爲紙 無兵甲 不攻戰 其國法 有南北獄 若犯輕者入南 獄 重罪者入北獄 有赦則赦南獄 不赦北獄 在北獄者 男女相配 生男八歲爲奴 生女九歲爲婢 犯罪之身 至死不出 貴人有罪 國乃大會 坐罪人於坑 對 之宴飲 分訣若死別焉 以灰繞之 其一重則一身擯退 二重則及子孫 三重則及七世 名國王爲乙禘；貴人第一者爲大對盧 第二者爲小對盧 第三者爲納咄沙 國王行有鼓角導從 其衣色隨年改易 甲乙年青 丙丁年赤 戊己年黃 庚辛年白 壬癸年黑 有牛角甚長 以角載物 至勝二十斛 車有馬車 牛車 鹿車 國人 養鹿 如中國畜牛 以乳爲酪 有桑梨 經年不壞 多蒲桃 其地無鐵有銅 不貴金銀 市無租估 其婚姻 婿往女家門外作屋 晨夕灑掃 經年而女不悅 卽驅 之 相悅乃成婚 婚禮大抵與中國同 親喪 七日不食；祖父母喪 五日不食；兄弟伯叔姑姊妹 三日不食 設靈爲神像 朝夕拜奠 不制縵經 嗣王立 三年不視 國事 其俗舊無佛法 宋大明二年 罽賓國嘗有比丘五人遊行至其國 流通佛法 經像 教令出家 風俗遂改 」

流求

隋書

“(訊)”

國有四五帥 統諸洞 洞有小王 往往有村 村有鳥了帥 並以善戰者爲之 自相樹立
理一村之事 男女皆以白系寧繩纏髮 從項後般繞至額 其男子用鳥羽爲冠 裝以珠貝
飾以赤毛 形制不同 婦人以羅紋白布爲帽 其形正方 織門鏤皮並雜色系甯及雜毛以
爲衣 制裁不一 綴毛垂螺爲飾 雜色相間 下垂小貝 其聲如佩 綴璫施釧 懸珠於頸 織
藤爲笠 飾以毛羽 有刀 槊 弓 箭 劍 鉞之屬 其處少鐵 刃皆薄小 多以骨角輔助之
編系寧爲甲 或用熊豹皮 王乘木獸 令左右輿之而行 導從不過數十人 小王乘機 鏤
爲獸形 國人好相攻擊 人皆驍健善走 難死而耐創 諸洞各爲部隊 不相救助 兩陣相當
勇者三五人出前跳噪 交言相罵 因相擊射 如其不勝 一軍皆走 遣人致謝 即共和解
收取鬥死者 共聚而食之 仍以髑髏將向王所 王則賜之以冠 使爲隊帥 無賦斂 有事則
均稅 用刑亦無常准 皆臨事科 決 犯罪皆斷于鳥了帥；不伏 則上請于王 王令臣下共
議定之 獄無枷鎖 唯用繩縛 決死刑以鐵錐 大如箸 長尺餘 鑽頂而殺之 輕罪用杖 俗
無文字 望月 虧盈以紀時節 候草藥枯以爲年歲

“(訊)”

人深目長鼻 頗類于胡 亦有小慧 無君臣上下之節 拜伏之禮 父子同床而寢 男子拔
去髭鬚 身上有毛之處皆亦除去 婦人以墨黥手 爲蟲蛇之文 嫁娶以酒肴珠貝爲聘 或
男女相悅 便相匹偶 婦人產乳 必食子衣 產後以火自炙 令汗出 五日便平復 以木槽
中暴海水爲鹽 木汁爲酢 釀米麥爲酒 其味甚薄 食皆用手 偶得異味 先進尊者 凡有
宴會 執酒者必待呼名而後飲 上王酒者 亦呼王名 銜杯共飲 頗同突厥 歌呼蹋蹄 一
人唱 從皆和 音頗哀怨 扶女子上膊 搖手而舞 其死者氣將絕 舉至庭 親賓哭泣相吊
浴其屍 以布帛纏之 裹以葦草 親土而殯 上不起墳 子爲父者 數月不食肉 南境風俗

少異 人 有死者 邑里共食之

北史

“(訊)”

流求國 居海島 當建安郡東 水行五日而至 土多山洞 其王姓歡斯氏 名渴刺兜 不知其由來有國世數也 彼土人呼之爲可老羊 妻曰多拔茶 所居 曰波羅檀洞 塹柵三重 環以流水 樹棘爲籬 王所居舍 其大一十六間 雕刻禽獸 多門鏤樹 似橘而葉密 條纖如發之下垂 國有四五帥 統諸洞 洞有小王 往往有村 村有鳥了帥 並以善戰者爲之 自相樹立 主一村之事 男女皆白系寧繩纏發 從項後盤繞至額 其男子用鳥羽爲冠 裝以珠貝 飾以赤毛 形制不同 婦人以羅紋白布爲帽 其形方正 織門鏤皮並雜毛以爲衣 制裁不一 綴毛垂螺爲飾 雜色相間 下垂小貝 其聲如珮 綴璫施釧 懸珠於頸 織藤爲笠 飾以毛 羽 有刀槊 弓箭 劍鉞之屬 其處少鐵 刀皆薄小 多以骨角輔助之 編系寧爲甲 或用熊豹皮 王乘木獸 令左右輿之 而導從不過十數人 小王乘機 鏤爲獸形 國人好相攻擊 人皆驍健善走 難死耐創 諸洞各爲部隊 不相救助 兩軍相當 勇者三五人出前跳噪 交言相罵 因相擊射 如其不勝 一軍皆走 遣人致謝 即共和解 收取鬥死者 聚食之 仍以髑髏將向王所 王則賜之以冠 便爲隊帥

“(訊)”

無賦斂 有事則均稅 用刑亦無常准 皆臨事科決 犯罪皆斷于鳥了帥 不伏則上請于王 王令臣下共議定之 獄無枷鎖 唯用繩縛 決死刑以鐵錐大如筋 長尺餘 鑽頂殺之 輕罪用杖 俗無文字 望月虧盈 以紀時節 草木榮枯 以爲年歲 人深目長鼻 類于胡 亦

有小慧 無君臣上下之節 拜伏之禮 父子同 床而寢 男子拔去髭須 身上有毛處皆除去 婦人以黑黥手爲蟲蛇之文 嫁娶以酒 珠貝爲聘 或男女相悅 便相匹偶 婦人產乳 必食子衣 產後以火自灸 令汗 出 五日便平復 以木槽中暴海水爲鹽 木汁爲酢 米麵爲酒 其味甚薄 食皆用手 遇得異味 先進尊者 凡有宴會 執酒者必待呼名而後飲 上王酒者亦呼王 名後銜杯共飲 頗同突厥 歌呼蹋蹄 一人唱 衆皆和 音頗哀怨 扶女子上膊 搖手而舞 其死者氣將絕 輦至庭前 親賓哭泣相吊 浴其屍 以布帛縛纏之 裹 以葦席 襯土而殯 上不起墳 子爲父者 數月不食肉 其南境風俗少異 人有死者 邑里共食之 有熊 豺 狼 尤多豬 雞 無羊 牛 驢 馬 厥田良沃 先 以火燒 而引水灌 持一鍤 以石爲刃 長尺餘 闊數寸 而墾之 宜稻 粱 禾 黍 麻 豆 赤豆 胡黑豆等 木有楓 栝 樟 松 榿 楠 粉 梓 竹 藤 果 藥 同于江表 風土氣候 與嶺南相類 俗事山海之神 祭以肴酒 戰鬥殺人 便將所殺人祭其神 或依茂樹起小屋 或懸髑髏於樹上 以箭射之 或累石系幡 以爲神主 王之所居 壁下多聚髑髏以爲佳 人間門戶上 必安獸頭骨角

旧唐書

この他に

文身國

文身國 在倭國東北七千餘里 人體有文如獸 其額上有三文 文直者貴 文小者賤 土俗歡樂 物豐而賤 行客不齎糧 有屋宇 無城郭 其王所居 飾以金銀珍麗 繞屋爲綏

廣一丈 實以水銀 雨則流于水銀之上 市用珍寶 犯輕罪者則鞭杖；犯死罪則置猛獸食之 有枉則猛獸避而不食 經宿則赦之

大漢國

大漢國 在文身國東五千餘里 無兵戈 不攻戰 風俗並與文身國同而言語異

17.10. 百濟の内政と風俗

晋書以降夷蛮伝のない陳書を除く全て

晋書

四夷傳にはなく、本紀に記事がある。

宋書

“(訳)”

百濟國 本與高麗俱在遼東之東千餘里 其後高麗略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治
謂之晉平郡晉平縣

南齊書 (高麗國)

風俗の記事は見当たらない。

梁書

“(訳)”

百濟者 其先東夷有三韓國 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 弁韓 辰韓各十二國 馬
韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 百濟卽 其一也 後漸強大 兼諸
小國 其國本與句驪在遼東之東 晉世句驪既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣

自置百濟郡

“(訊)”

其國有二十二簷魯 皆以子弟宗族分據之 其人形長 衣服淨潔 其國近倭 頗有文身者 今言語服章略與高麗同 行不張拱 拜不申足則異 呼帽曰 冠 襦曰復衫 袴曰禪 其言參諸夏 亦秦 韓之遺俗云 中大通六年 大同七年 累遣使獻方物；并請《涅槃》等經義 《毛詩》博士 并工匠 畫師等 敕並給 之 太清三年 不知京師寇賊 猶遣使貢獻；既至 見城闕荒毀 並號慟涕泣 侯景怒 囚執之 及景平 方得還國

魏書

“(訊)”

百濟國 其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南 其民土著 地多下濕 率皆山居 有五穀 其衣服飲食與高句麗同

周書

“(訊)”

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方

“(訊)”

王姓夫餘氏 號於羅瑕 民呼為鞬吉支 夏言竝王也 妻號於陸 夏言妃也 官有十六品 左平五人 一品 達率三十人 二品 恩率三品 德率四品 扞率五品 柰率六品 六品已上 冠飾銀華 將德七品 紫帶 施德八品 皂帶 固德九品 赤帶 (李) [季] 德十品 青

帶 對德十一品 文督十二品 皆黃 帶 武督十三品 佐軍十四品 振武十五品 克虞十六
品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀部 肉部 內
掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法部 後官部 外官有司軍部 司徒部 司
空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 網部 日官部 都市部 都下有萬家 分為 五部 曰
上部 前部 中部 下部 後部 統兵五百人 五方各有方領一人 以達率為之 郡將三人
以德率為之 方統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外 民庶及餘小城 咸分 (肆)
[隸] 焉

“(訊)”

其衣服 男子畧同於高麗 若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據
地為敬 婦人衣 (以) [似] 袍 而袖微大 在室者 編發盤於 首 後垂一道為飾 出嫁者
乃分為兩道焉 兵有弓箭刀矛 俗重騎射 兼愛墳史 其秀異者 頗解屬文 又解陰陽五行
用宋《元嘉曆》 以建寅月為歲首 亦解 醫藥卜筮占相之術 有投壺 樽蒲等雜戲 然尤
尚奕碁 僧尼寺塔甚多 而無道士 賦稅以布絹絲麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑
罰：反叛 退軍及殺人者 斬 盜者 流 其贓兩倍徵之 婦人犯姦者 沒入夫家為婢 婚娶
之禮 畧同華俗 父母及夫死者 三年治服 餘親 則葬訖除之 土田下濕 氣候溫暖 五穀
雜果 菜蔬及酒醴肴饌藥品之屬 多同於內地 唯無駝驢騾羊鵝鴨等 其王以四仲之月
祭天及五帝之神 又每歲四祠其始祖仇台之廟

“(訊)”

建德六年 577 齊滅 昌始遣使獻方物 宣政元年 578 又遣使來獻

隋書

“(訊)”

南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔城 官有十六品：長曰左平 次大率 次恩率 次德率 次杆率 次奈率 次將 德 服紫帶；次施德 阜帶；次固德 赤帶；次李德 青帶；次對德 以下 皆黃帶；次文督 次武督 次佐軍 次振武 次克虞 皆用白帶 其冠制並同 唯奈率 以上飾以銀花 長史三年一交代 畿內爲五部 部有五巷 士人倨焉 五方各有方領一人 方佐貳之 方有十郡 郡有將 其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其衣服與高麗略 同 婦人不加粉黛 女辮發垂後 已出嫁則分爲兩道 盤於頭上 俗尚騎射 讀書史 能吏 事 亦知醫藥 蓍龜 占相之術 以兩手據地爲敬 有僧 尼 多寺塔 有鼓角 篳篥 箏 竽 簾 笛之樂 投壺 圍棋 樗蒲 握槊 弄珠之戲 行宋《元嘉曆》 以建寅月爲歲首 國中 大 姓有八族 沙氏 燕氏 刀 氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苗氏 婚娶之禮 略同于華 喪制如 高麗 有五穀 牛 豬 雞 多不火食 厥田下濕 人皆山居 有巨粟 每以四仲之月 王祭天 及五帝之神 立其始祖仇台廟于國城 歲四祠之 國西南人島居者十五所 皆有城邑

南史

“(訊)”

馬韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十余萬戶 百濟即 其一也 後漸強大 兼諸小國 其國本與句麗俱在遼東之東千余里 晉世句麗既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣 自置百濟郡

北史

“(訳)” 百濟之國 蓋馬韓之屬也

に続き東明王の話。

“(訳)”

其外更有五方：中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城 王姓餘氏 號「于羅瑕」 百姓呼爲「韃吉支」 夏言並王也 王妻號「于陸」 夏言妃也 官有 十六品：左平五人 一品 達率三十人 二品 恩率 三品 德率 四品 杆率 五品 奈率 六品 已上冠飾銀華 將德 七品 紫帶 施德 八品 阜帶 固德 九品 赤帶 季德 十品 青帶 對德 十一品 文督 十二品 皆黃帶 武督 十三品 佐軍 十四品 振武 十五品 克虞 十六品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀內部 內掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法陪 後宮部 外官有司軍部 司徒部 司空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 網部 日官部 市部 長吏三年一交代 都下有萬家 分爲五部 曰上部 前部 中部 下部 後部 部有五巷 士庶居焉 部統兵五百人 五方各有方領一人 以達率爲之 方佐貳之 方有十郡 郡有將三人 以德率爲之 統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外人庶及余小城 鹹分隸焉

“(訳)”

其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其飲食衣服 與高麗略同

“(訳)”

若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據地爲禮 婦人不加粉 黛 女辮發垂後 已出嫁 則分爲兩道 盤於頭上 主似袍而袖微大 兵有弓箭刀槊 俗重騎射

兼愛墳史 而秀異者頗解屬文 能吏事 又知醫藥 蓍龜 與相 術 陰陽五行法 有僧尼 多寺塔 而無道士 有鼓角 篳篥 箏竽 簾笛之樂 投壺 樗蒲 弄珠 握槊等雜戲 尤尚奕 棋 行宋《元嘉曆》 以建寅月爲歲首 賦稅以布 絹 絲 麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑罰 反叛 退軍及殺人者 斬 盜者 流 其贓兩倍征之 婦犯奸 沒入夫家爲婢 婚娶 之禮 略同華 俗 父母及夫死者 三年居服 餘親則葬訖除之 土田濕 氣候溫暖 人皆山 居 有巨栗 其五穀 雜果 菜蔬及酒醴肴饌之屬 多同於內地 唯無駝 騾 驢 羊 鵝 鴨 等 國中大姓有八族 沙氏 燕氏 芻氏 解氏 真氏 國氏 木氏 苗氏 其王每以四仲月祭 天及五帝之神 立其始祖仇台之廟于國城 歲四祠之 國 西南 人島居者十五所 皆有城 邑

舊唐書

“(詛)”

百濟國 本亦扶餘之別種 嘗爲馬韓故地 在京師東六千二百里 處大海之北 小海之 南 東北至新羅 西渡海至越州 南渡海至倭國 北渡海至高麗 其王所居有東西兩城 所置內官曰內臣佐平 掌宣納事；內頭佐平 掌庫藏事；內法佐平 掌禮儀事；衛士佐平 掌宿衛兵事；朝廷佐平 掌刑獄事；兵官佐平 掌 在外兵馬事 又外置六帶方 管十郡 其 用法：叛逆者死 籍沒其家；殺人者 以奴婢三贖罪；官人受財及盜者 三倍追贓 仍終身 禁錮 凡諸賦稅及風土所產 多 與高麗同 其王服大袖紫袍 青錦褲 烏羅冠 金花爲飾 素皮帶 烏革履 官人盡緋爲衣 銀花飾冠 庶人不得衣緋紫 歲時伏臘 同於中國 其書 籍有《五 經》 子 史 又表疏並依中華之法

新唐書

“(詠)”

百濟 扶餘別種也 直京師東六千里而羸 濱海之陽 西界越州 南倭 北高麗 皆逾海
乃至 其東 新羅也 王居東 西二城 官有內臣佐平者宣納號 令 內頭佐平主帑聚 內法
佐平主禮 衛士佐平典衛兵 朝廷佐平主獄 兵官佐平掌外兵 有六方 方統十郡 大姓有
八：沙氏 燕氏 耆氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苜氏 其法：反逆者誅 籍其家；殺人者
輸奴婢三贖罪；吏受賕及盜 三倍償 錮終身 俗與高麗同 有三島 生黃漆 六月刺取沈
色若金 王服大袖紫袍 青錦褲 素皮帶 烏革履 烏羅冠飾以金花 群臣絳衣 飾冠以銀
花 禁民衣絳紫 有文籍 紀時月如華人

17.11. 新羅の内政と風俗

梁書と隋書以降

梁書

“(訳)”

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有似中國 人名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人作之 世相係 辰韓不得自立爲王 明其流移之人故也；恒爲馬韓所 制 辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里 其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通使聘

“(訳)”

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評 五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名 有子賁早支 齊早支 謁早支 壹告支 奇貝早支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 袴曰柯半 靴曰洗 其拜及行與高麗相類 無文字 刻木爲信 語言待百濟而後通焉

隋書

“(訳)”

在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將毋丘儉討高麗 破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗 百濟 之屬 兼有沃沮 不耐 韓獺之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國

“(訊)”

其官有十七等：其一曰伊罰幹 貴如相國；次伊尺幹 次迎幹 次破彌幹 次大阿尺幹 次阿尺幹 次乙吉幹 次沙咄幹 次及伏幹 次大奈摩幹 次奈 摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大烏 次小烏 次造位 外有郡縣 其文字 甲兵同於中國 選人壯健者悉入軍 烽戍 邏俱有屯管部伍 風俗 刑政 衣服 略與高麗 百濟同 每正月旦相賀 王設宴會 班賚群官 其日拜日月神 至八月十五日 設樂 令官人射 賞以馬布 其有大事 則聚群官 詳議而定之 服色尚 素 婦人辮發繞頭 以雜彩及珠爲飾 婚嫁之禮 唯酒食而已 輕重隨貧富 新婚之夕 女先拜舅姑 次即拜夫 死有棺斂 葬起墳陵 王及父母妻子喪 持服一年 田甚良沃 水陸兼種 其五穀 果菜 鳥獸物產 略與華同 大業以來 歲遣朝貢 新羅地多山險 雖與百濟構隙 百濟亦不能圖之

南史

“(訊)”

其地東濱大海 南北與句麗 百濟接 魏時曰新盧；宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通其先事詳北史 在百濟東南五使聘

“(訊)”

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評

五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名有子賁
早支 壹早支 齊早支 謁早支 壹吉支 奇貝早支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 褲曰柯半
靴曰洗 其拜及行與高麗相類 無文字 刻木 爲信 語言待百濟而後通焉

北史

“(訊)”

新羅者 其先本辰韓種也 地在高麗東南 居漢時樂浪地 辰韓亦曰秦韓 相傳言秦世
亡人避役來適 馬韓割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言 語名物 有似中國人
名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人
作之 世世相傳 辰韓不得自立王 明其流移之人

“(訊)”

辰韓之始 有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 或稱魏將毋丘儉討高麗破之 奔沃沮
其後復歸故國 有留者 遂爲新羅 亦曰斯盧 其人 雜有華夏 高麗 百濟之屬

舊唐書

“(訊)”

新羅國 本弁韓之苗裔也 其國在漢時樂浪之地 東及南方俱限大海 西接百濟 北鄰
高麗 東西千里 南北二千里 有城邑村落 王之所居曰金城 周 七八里 衛兵三千人 設
獅子隊 文武官凡有十七等 其王金真平 隋文帝時授上開府 樂浪郡公 新羅王 武德四
年 遣使朝貢 高祖親勞問之 遣通直散騎侍郎 庾文素往使焉 賜以璽書及畫屏風 錦彩

三百段 自此朝貢不絕 其風俗 刑法 衣服 與高麗 百濟略同 而朝服尚白 好祭山神 其食器作柳杯 亦以銅及瓦 國人多金 樸兩姓 異姓不爲婚 重元日 相慶賀燕饗 每以其日拜日月神 又重八月十五日 設樂飲宴 賚群臣 射其庭 婦人發繞頭 以彩及珠爲飾 發甚長 美

新唐書

“(訊)” 新羅 弁韓苗裔也

“(訊)”

而王居金城 環八里所 衛兵三千人 謂城爲侵 牟羅 邑在內曰喙評 外曰邑勒 有喙評六 邑勒五十二 朝服尚白 好祠山神 八月望日 大宴齋官吏 射 其建官 以親屬爲上 其族名第一骨 第二骨以自 別 兄弟女 姑 姨 從姊妹 皆聘爲妻 王族爲第一骨 妻亦其族 生子皆爲第一骨 不娶第二骨女 雖娶 常爲妾媵 官有宰相 侍中 司農卿 太府令 凡十 有七等 第二骨得爲之 事必與衆議 號「和白」 一人異則罷 宰相家不絕祿 奴僮三千人 甲兵牛馬豬稱之 畜牧海中山 須食乃射 息谷米於人 償不滿 庸 爲奴婢 王姓金 貴人姓朴 民無氏有名 食用柳杯若銅 瓦 元日相慶 是日拜日月神 男子褐褲 婦長襦 見人必跪 則以手據地爲恭 不粉黛 率美髮以繚 首 以珠彩飾之 男子翦發鬻 冒以黑巾 市皆婦女貿販 冬則作灶堂中 夏以食置冰上 畜無羊 少驢 羸 多馬 馬雖高大 不善行

“(訊)”

長人者 人類長三丈 鋸牙鉤爪 黑毛覆身 不火食 噬禽獸 或搏人以食；得婦人 以治

衣服 其國連山數十里 有峽 固以鐵闔 號關門 新羅常屯弩士數千守之

17.12. 倭の内政と風俗

魏書周書以外

後漢書

“(訳)”

使驛通于漢者三十許國 國皆稱王 世世傳統 其大倭王居邪馬臺/臺/颱國 樂浪郡

徼（後漢）

“(訳)”

其地大較在會稽東冶之東 與硃崖、儋耳相近 故其法俗多同 土宜禾稻、麻/麻紵、蠶桑 知織績為縑佈 齧白珠、青玉 其山有丹土 氣溫暖 肇夏生菜茹 無牛、馬、虎、豹、羊、鵠 其兵有矛、楯、木弓、竹矢 或以骨為鏃 男子皆黥麵文身 以其文左右大小別/警尊卑之差 其男衣皆橫幅 結束相連 女人被發/髮屈纒介 衣如單被 貫頭而著之；並/併以丹硃塗身 如中國之用粉也 有城柵屋室 父母兄弟異處 唯會同男女無別/警 飲食以手 而用籩豆 俗皆徒跣 以蹲踞為恭敬 人性嗜酒 多壽攷 至百餘歲者甚眾/衆 國多女子 大人皆有四五妻 其餘或兩或三 女人不淫不妒 又俗不盜竊 少爭訟 犯法者沒其妻子 重者滅其門族 其死停喪十餘日 儵人哭泣 不進酒食 而等類就歌舞為樂 灼骨以蔔 用決吉凶 行來度海 令一人不櫛沐 不食肉 不近婦人 名曰“持衰” 若在塗吉利 則僱以財物；如病疾遭害 以為持衰不謹 便共殺之（後漢）

三国志

“(訊)”

男子無大小皆黥面文身 自古以來 其使詣中國 皆自稱大夫 夏後少康之子封於會稽 斷發文身以避蛟龍之害 今倭水人好沈沒捕魚蛤 文身亦以厭大 魚水禽 後稍以爲飾 諸國文身各異 或左或右 或大或小 尊卑有差 計其道里 當在會稽 東冶之東 其風俗 不淫 男子皆露紒 以木綿招頭 其衣橫幅 但結 束相連 略無縫 婦人被發屈紒 作衣如 單被 穿其中央 貫頭衣之 種禾稻 紵麻 蠶桑 緝績 出細紵 縑綿 其地無牛馬虎豹羊 鵲 兵用矛 楯 木弓 木弓 短下長上 竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與僭耳 硃崖同 倭地 溫暖 冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室 父母兄弟臥息異處 以硃丹塗其身體 如中國用粉也 食飲用籩 豆 手食 其死 有棺無槨 封土作塚 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣 他人就歌舞飲酒 已葬 舉家詣水中澡浴 以如練沐 其行來渡海詣中國 恆使 一人 不 梳頭 不去蟣虱 衣服垢汙 不食肉 不近婦人 如喪人 名之爲持衰 若行者吉善 共顧其 生口財物；若有疾病 遭暴害 便欲殺之 謂其持衰不謹 出 真珠 青玉 其山有丹 其木 有柟 杼 豫樟 榑欂 投櫃 烏號 楓香 其竹筱簞 桃支 有薑 橘 椒 蘘荷 不知以爲滋 味 有獼猴 黑雉 其俗舉事行來 有所雲爲 輒灼骨而蔔 以占吉凶 先告所蔔 其辭如 令龜法 視火坼占兆 其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒 見 大人所敬 但搏手以當 跪拜 其人壽考 或百年 或八九十年 其俗 國大人皆四五婦 下戶或二三婦 婦人不淫 不妒忌 不盜竊 少諍訟 其犯法 輕者沒其妻 子 重者滅其門戶 及宗族尊卑 各有差序 足相臣服 收租賦 有邸閣國 國有市 交易有無 使大倭監之 自女王國以北 特置一大 率 檢察諸國 諸國畏憚 之 常治伊都國 於國中有如刺史 王遣使詣京都 帶方郡 諸韓

國 及郡使倭國 皆臨津搜露 傳送文書賜遺之物詣女王 不得差錯 下戶與大人相逢道路 逡巡 入草 傳辭說事 或蹲或跪 兩手據地 爲之恭敬 對應聲曰噫 比如然諾 (三)

晋書

“(訳)” 無良田 食海物 舊有百餘小國相接 (晋)

“(訳)”

男子無大小 悉黥面文身 自謂太伯之後 又言上古使詣中國 皆自稱大夫 昔夏少康之子封於會稽 繼發文身以避蛟龍之害 今倭人好沈沒取魚 亦文身以厭水禽 計其道里當會稽東冶之 東 其男子衣以橫幅 但結束相連 略無縫綴 婦人衣如單被 穿其中央以貫頭 而皆被發徒跣 其地溫暖 俗種禾稻系甯麻而蠶桑織績 土無牛馬 有刀楯弓箭 以鐵爲鏃 有屋宇 父母兄弟臥息異處 食飲用俎豆 嫁娶不持錢帛 以衣迎之 死有棺無槨 封土爲塚 初喪 哭泣 不食肉 已葬 舉家入水澡浴自潔 以除不 祥 其舉大事 輒灼骨以占吉凶 不知正歲四節 但計秋收之時以爲年紀 人多壽百年 或八九十 國多婦女 不淫不妒 無爭訟 犯輕罪者沒其妻孥 重者族滅其 家 舊以男子爲主 (晋)

宋書

風俗の記事は見当たらない。

南齊書

“(訳)” 土俗已見前史

他に風俗の記事は見当たらない。

梁書

“(訳)” 倭者 自云太伯之後 俗皆文身

“(訳)”

民種禾稻紵麻 蠶桑織績 有薑 桂 橘 椒 蘇 出黑雉 真珠 青玉 有獸如牛 名山鼠；又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射之中 蛇則死矣 物產略與儋耳 朱崖同 地溫 暖 風俗不淫 男女皆露紵 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死 有棺無槨 封土作冢 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 多至八九十 或至百歲 其俗女多男少 貴者至四五妻 賤者猶兩三妻 婦人無淫妬 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者沒其妻子 重則滅其宗族

隋書

“(訳)”

無城郭 內官有十二等：一曰大德 次小德 次大仁 次小仁 次大義 次小義 次大禮 次小禮 次大智 次小智 次大信 次小信 員無定數 有軍尼一百二十人 猶中國牧宰 八十戶置一伊尼 翼 如今裏長也 十伊尼翼屬一軍尼 其服飾 男子衣裙襦 其袖微小 履如屨形 漆其上 系之於腳 人庶多跣足 不得用金銀爲飾 故時衣橫幅 結束相連而無縫 頭亦無冠 但垂發於兩耳上 至隋 其王始制冠 以錦彩爲之 以金銀鏤花爲飾 婦人束發於後 亦衣裙襦 裳皆有襞 髡竹爲梳 編草爲薦 雜皮爲表 緣以文皮 有弓 矢 刀

樂 弩 櫝 斧 漆皮爲甲 骨爲矢鏑 雖有兵 無征戰 其王朝會 必陳設儀仗 奏其國樂 戶可十萬

“(訊)”

其俗殺人強盜及奸皆死 盜者計贓酬物 無財者沒身爲奴 自餘輕重 或流或杖 每訊 究獄訟 不承引者 以木壓膝 或張強弓 以弦鋸其項 或置小石 于沸湯中 令所競者探 之 云理曲者即手爛 或置蛇甕中 令取之 云曲者即螫手矣 人頗恬靜 罕爭訟 少盜賊 樂有五弦 琴 笛 男女多黥臂點面文身 沒水 捕魚 無文字 唯刻木結繩 敬佛法 於百 濟求得佛經 始有文字 知卜筮 尤信巫覡 每至正月一日 必射戲飲酒 其餘節略與華同 好棋博 握槊 樗蒲之戲 氣候溫暖 草木冬青 土地膏腴 水多陸少 以小環掛鷺鷥項 令入水捕魚 日得百餘頭 俗無盤俎 藉以檉葉 食用手哺之 性質直 有雅風 女多男少 婚嫁不 取同姓 男女相悅者即爲婚 婦入夫家 必先跨犬 乃與夫相見 婦人不淫妒 死 者斂以棺郭 親賓就屍歌舞 妻子兄弟以白布制服 貴人三年殯于外 庶人荀日而 瘞 及 葬 置屍船上 陸地牽之 或以小輿 有阿蘇山 其石無故火起接天者 俗以爲異 因行禱 祭 有如意寶珠 其色青 大如雞卵 夜則有光 云魚眼精也 新 羅 百濟皆以倭爲大國 多珍物 並敬仰之 恆通使往來

南史

“(訊)” 其先所出及所在 事詳北史

“(訊)”

其官有伊支馬 次曰彌馬獲支 次曰奴往鞮 人種禾 稻 紵 麻 蠶桑織績 有姜 桂 橘

椒 蘇 出黑雉 真 珠 青玉 有獸如牛名山鼠 又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射中而蛇則死矣 物產略與儋耳 朱崖同 地氣溫暖 風俗不淫 男女皆露髻 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死有棺無槨 封土作塚 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 或至八九十 或至百歲 其俗女 多男少 貴者至四五妻 賤者猶至兩三妻 婦人不媼妒 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者沒其妻子 重則滅其宗族

北史

“(訊)”

漢光武時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣朝貢 謂之倭奴國 靈帝光和中 其國亂 遞相攻伐 歷年無主 有女子名卑彌呼 能以鬼道惑衆 國人 共立爲王 無夫 有二男子 給王飲食 通傳言語 其王有宮室 樓觀 城柵 皆持兵守衛 爲法甚嚴 魏景初三年 公孫文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金 印紫綬 正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女台與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 江左曆晉 宋 齊 梁 朝聘不絕

“(訊)”

名太子爲利歌彌多弗利 無城郭 內官有十二等：一 曰大德 次小德 次大仁 次小仁 次大義 次小義 次大禮 次小禮 次大智 次小智 次大信 次小信 員無定數 有軍尼一百二十人 猶中國牧宰 八十戶置 一伊尼翼 如今里長也 十伊尼翼屬一軍尼 其服飾 男子衣裙襦 其袖微小 履如屨形 漆其上 系之腳 人庶多跣足 不得用金銀爲飾 故時

衣橫幅 結束相連而無縫 頭亦無冠 但垂發於兩耳上 至隋 其王始制冠 以錦彩爲之 以金銀鏤花爲飾 婦人束發於後 亦衣裙襦 裳皆有襖 拖竹聚以爲梳 編草爲薦 雜皮爲表 緣以文皮 有弓 矢 刀 槩 弩 攢 斧 漆皮爲甲 骨爲矢鏃 雖有兵 無征戰 其王朝會 必陳設儀仗 奏其國樂 戶可十萬 俗 殺人 強盜及奸 皆死 盜者計贓酬物 無財者 沒身爲奴 自餘 輕重 或流或杖 每訊冤獄 不承引者 以木壓膝 或張強弓 以弦鋸其項 或置小石于沸湯中 令所競者探之 云理曲者即手爛 或置蛇甕中 令取之 云曲者即螫手 人頗恬靜 罕爭訟 少盜賊 樂有五弦 琴 笛 男女皆黥臂 點面 文身 沒水捕魚 無文字 唯刻木結繩 敬佛法 於百濟求得佛經 始有文字 知卜 筮 尤信巫覡 每至正月一日 必射戲飲酒 其餘節 略與華同 好棋博 握槩 樗蒲之戲 氣候溫暖 草木冬青 土地膏腴 水多陸少 以小環掛鸕鷀項 令入水 搏魚 日得百餘頭 俗無盤俎 藉以櫛葉 食用手舖之 性質直 有雅風 女多男少 婚嫁不取同姓 男女相悅者即爲婚 婦入夫家 必先跨火 乃與夫相見 婦人 不淫妒 死者斂以棺槨 親賓就屍歌舞 妻子兄弟以白布制服 貴人三年殯 庶人藹日而瘞 及葬 置屍船上 陸地牽之 或以小輿 有阿蘇山 其石無故火起接天 者 俗以爲異 因行祭禱 有如意寶珠 其色青 大如雞卵 夜則有光 云魚眼睛也 新羅 百濟皆以倭爲大國 多珍物 並仰之 恆通使往來

舊唐書 (倭國)

“(訊)”

倭國者 古倭奴國也 去京師一萬四千里 在新羅東南大海中 依山島而居 東西五月行 南北三月行 世與中國通 其國 居無城郭 以木爲柵 以草 爲屋 四面小島五十余國

皆附屬焉 其王姓阿每氏 置一大率 檢察諸國 皆畏附之 設官有十二等 其訴訟者 匍匐而前 地多女少男 頗有文字 俗敬佛法 並皆跣足 以幅布蔽其前後 貴人戴錦帽 百姓皆椎髻 無冠帶 婦人衣純色裙 長腰襦 束發於後 佩銀花 長八寸 左右各數枝 以明貴賤等級 衣服之制 頗類新羅

舊唐書 (日本)

“(詛)”

日本國者 倭國之別種也 以其國在日邊 故以日本爲名 或曰：倭國自惡其名不雅 改爲日本 或云：日本舊小國 併倭國之地 其人入朝者 多自矜大 不以實對 故中國疑焉 又云：其國界東西南北各數千里 西界 南界咸至大海 東界 北界有大山爲限 山外即毛人之國

新唐書

“(詛)”

日本 古倭奴也。 . . . 國無城郭 聯木爲柵落 以草茨屋 左右小島五十餘 皆自名國 而臣附之 置本率一人 檢察諸部 其俗多女少男 有文字 尚浮屠法 其官十有二等 其王姓阿每氏 自言初主號天御中主 至彥瀲 凡三十二世 皆以「尊」爲號 居築紫城

“(詛)”

おわりに

付録 1. 扶余の内政と風俗記事

後漢書

夫餘國 在玄菟北千里 南與高句驪 東與挹婁 西與鮮卑接 北有弱水 地方二千里
本濊地也

初 北夷索離國王訥行 其待兒于後妊身 王還 欲殺之 侍兒曰：“前見天上有氣 大如
雞/鷄子 來降我 因以有身 ” 王囚之 後遂生男 王令置于豕牢 豕以口氣噓之 不死 復
/復徙于馬蘭 馬亦如之 王以為神 迺聽母收養 名曰東明 東明長而善射 王忌其猛 復
/復欲殺之 東明奔走 南至掩淲水 以弓擊水 魚鱉皆聚浮水上 東明乘之得度 因至伏
餘而王之焉 于東夷之域 最為平敞 土宜五穀 訥名馬、赤玉、貂狝 大珠如瘿棗/棘 以
貝柵為城 有宮室、倉庫、牢獄 其人粗大強/彊勇而謹厚 不為寇鈔 以弓矢刀矛為兵

以六畜名官 有馬加、牛加、狗加 其邑落皆主屬諸加 食飲用俎豆 會同拜爵洗爵 揖
讓升降 以臘月祭天 大會連日 飲食歌舞 名曰“迎鼓” 是時斷刑獄 解囚徒 有軍事亦
祭天 殺牛 以蹄佔其吉兇 行人無晝夜 好歌吟 音聲不絕 其俗用刑嚴急 被誅者皆沒
其傢人為奴婢 盜一責十二 男女淫 皆殺之 尤治噁/惡妒婦 既殺 復/復尸于山上 兄
死妻嫂 死則有槨無棺 殺人殉葬 多者以百數 其王葬用玉匣 漢朝常豫以玉匣付玄菟
郡 王死則迎取以葬焉

三國志

夫餘在長城之北 去玄菟千里 南與高句麗 東與挹婁 西與鮮卑接 北有弱水 方可二千里 戶八萬 其民土著 有宮室 倉庫 牢獄 多山陵 廣 澤 於東夷之域最平敞 土地宜五穀 不生五果 其人粗大 性強勇謹厚 不寇鈔 國有君王 皆以六畜名官 有馬加 牛加 豬加 狗加 大使 大使者 使者 邑落有豪民 名下戶皆爲奴僕 諸加別主四出 道大者主數千家 小者數百家 食飲皆用俎豆 會同 拜爵 洗爵 揖讓升降 以殷正月祭天 國中大會 連日飲食 歌舞 名曰迎鼓 於是時斷刑獄 解囚徒 在國衣尚白 白布大袂 袍 袴 履革鞞 出國則尚繪繡錦罽 大人加狐狸 狢白 黑貂之裘 以金銀飾帽 譯人傳辭 皆跪手據地竊語 用刑嚴急 殺人者死 沒其家人爲奴婢 竊盜一責十二 男女淫 婦人妒 皆殺之 尤憎妒 已殺 屍之國南山上 至腐爛 女家欲得 輸牛馬 乃與之 兄死妻嫂 與匈奴同俗 其國善養牲 出名馬 赤玉 貂狢 美珠 珠大者如酸棗 以弓矢刀矛爲兵 家家自有鎧仗 國之耆老自說古之亡人 作城柵皆 員 有似牢獄 行道晝夜無老幼皆歌 通日聲不絕 有軍事亦祭天 殺牛觀蹄以占吉凶 蹄解者爲凶 合者爲吉 有敵 諸加自戰 下戶俱擔糧飲食之 其死 夏月 皆用冰 殺人徇葬 多者百數 厚葬 有槨無棺 魏略曰：其俗停喪五月 以久爲榮 其祭亡者 有生有熟 喪主不欲速而他人強之 常諍引以此爲節 其居喪 男女皆純白 婦人著布面衣 去環珮 大體與中國相仿佛也

夫餘本屬玄菟 漢末 公孫度雄張海東 威服外夷 夫餘王尉仇台更屬遼東 時句麗 鮮卑強 度以夫餘在二虜之間 妻以宗女 尉仇台死 簡位居立 無適子 有孽子麻餘 位居死 諸加共立麻餘 牛加兄子名位居 爲大使 輕財善施 國人附之 歲歲遣使詣京都貢獻

晉書

夫余國 在玄菟北千余里 南接鮮卑 北有弱水 地方二千里 戶八萬 有城邑宮室 地宜五穀 其人強勇 會同揖讓之儀有似中國 其出使 乃衣錦 罽 以金銀飾腰 其法 殺人者死 沒入其家；盜者一責十二；男女淫 婦人妒 皆殺之 若有軍事 殺牛祭天 以其蹄占吉凶 蹄解者爲凶 合者爲吉 死者以生 人殉葬 有槨無棺 其居喪 男女皆衣純白 婦人著布面衣 去玉佩 出善馬及貂豹 美珠 珠大如酸棗 其國殷富 自先世以來 未嘗被破 其王印文稱「穢王之 印」 國中有古穢城 本穢貊之城也

付録 2. 沃沮の風俗記事

後漢書

東沃沮

東沃沮在高句驪蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁、伏餘 南與濊貊接 其地東西夾南北長 可摺方韃淠/裏/裡 土肥美 搆山嚮海 宜五穀 善田種 有邑落長帥 人性質直強/彊勇 便持矛步戰 言語、食飲、居處 衣服 有似句驪 其葬 作大木槨 長十餘丈 開一頭為戶 新死者先假埋之 令皮肉儘/盡 迺取骨置槨中 儵人皆共一槨 刻木如生 隨死者為數焉

武帝滅朝鮮 以沃沮地為玄菟郡 後為夷貊所侵 徙郡于高句驪西北 更以沃沮為縣 屬樂浪東部都尉 至光武罷都尉官 後皆以封其渠帥 為沃沮侯 其土迫小 介于大國之間 遂臣屬句驪 句驪復/複置其中大人為使者 以相監/鑑領 責其租稅 貂、佈、魚、鹽、海中食物 發/髮美女為婢妾焉

北沃沮

又有北沃沮 一名置溝婁 去南沃沮八百餘淠/裏/裡 其俗皆與南同 界南接挹婁 挹婁人喜乘船寇抄 北沃沮畏之 每夏輒臧于岳/巖穴 至鑿船道不通 迺下居邑落 其耆者言 嘗于海中得一佈衣 其形如中人衣 而兩袖長三丈 又于岸際見一人乘破船 頂中復/複有麵 與語不通 不食而死 又說海中有女國 無男人 或傳其國有神井 窺之輒生子雲

三國志

東沃沮

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 濱大海而居 其地形東北狹 西南長 可千里 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接 戶五千 無大君王 世世邑落 各有長 帥 其言語與句麗大同 時小異 漢初 燕亡人衛滿王朝鮮 時沃沮皆屬焉 漢武帝元封二年 伐朝鮮 殺滿孫右渠 分其地爲四郡 以沃沮城爲玄菟郡 後爲夷 貊所侵 徙郡句麗西北 今所謂玄菟故府是也 沃沮還屬樂浪 漢以土地廣遠 在單于大領之東 分置東部都尉 治不耐城 別主領東七縣 時沃沮亦皆爲縣 漢（光）武六年 省邊郡 都尉由此罷 其後皆以其縣中渠帥爲縣侯 不耐 華麗 沃沮諸縣皆爲侯國 夷狄更相攻伐 唯不耐濊侯至今猶置功曹 主簿諸曹 皆濊民 作之 沃沮諸邑落渠帥 皆自稱三老 則故縣國之制也 國小 迫於大國之間 遂臣屬句麗 句麗復置其中大人爲使者 使相主領 又使大加統責其租稅 貊布 魚 鹽 海中食物 千里擔負致之 又送其美女以爲婢妾 遇之如奴僕

其土地肥美 背山向海 宜五穀 善田種 人性質直強勇 少牛馬 便持矛步戰 食飲居處 衣服禮節 有似句麗 魏略曰：其嫁娶之法 女年十歲 已相設許 婿家迎之 長養以爲婦 至成人 更還女家 女家責錢 錢畢 乃復還婿 其葬作大木槨 長十餘丈 開一頭作戶 新死者皆假埋之 才使覆形 皮肉盡 乃取骨置槨中 舉家皆共一槨 刻木如生形 隨死者爲數 又有瓦甕 置米其中 編縣之於槨戶邊

毋丘儉討句麗 句麗王宮奔沃沮 遂進師擊之 沃沮邑落皆破之 斬獲首虜三千餘級 宮奔北沃沮

北沃沮

北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗南北皆 同 與挹婁接 挹婁喜乘船寇鈔
北沃沮畏之 夏月恆在山岩深穴中爲守備 冬月冰凍 船道不通 乃下居村落 王頎別遣
追討宮 盡其東界 問其耆老「海東復有 人不」？耆老言國人嘗乘船捕魚 遭風見吹數
十日 東得一島 上有人 言語不相曉 其俗常以七月取童女沈海 又言有一國亦在海中
純女無男 又說得一布衣 從海中浮出 其身如中（國）人衣 其兩袖長三丈 又得一破
船 隨波出在海岸邊 有一人項中復有面 生得之 與語不相通 不食而死 其域皆在沃沮
東大海中

付録 3. 濊の内政と風俗記事

後漢書

濊北與高句驪 沃沮 南與辰韓接 東窮大海 西至樂浪 濊及沃沮 句驪 本皆朝鮮之地也 昔武王封箕子于朝鮮 箕子教以禮義田蠶 又製八條之教 其人終不相益 無門戶之閉 婦人貞信 飲食以籩豆 其後四十餘世 至朝鮮侯準自稱王 漢初大亂 燕、齊、趙人往避地者數萬口 而燕人衛滿/滿擊破準 而自王朝鮮 傳國至孫右渠 元朔元年 濊君南閭等畔右渠 率二十八萬口詣遼東內屬 武帝以其地為蒼海郡 數年迺罷 至元封三年 滅朝鮮 分置樂浪、臨屯、玄菟、真番四郡 至昭帝始元五年 罷臨屯、真番 以並/併樂浪、玄菟 玄菟復/複徙居句驪 自單單大領已東 沃沮、濊貊悉屬樂浪 後以境土廣遠 復/複分領東七縣 置樂浪東部都尉 自內屬已後 風俗稍薄 法禁亦浸多 至有六十餘條 建武六年 省都尉官 遂棄領東地 悉封其渠帥為縣侯 皆歲時朝賀

無大君長 其官有侯、邑君、三老 耆舊自謂與句驪同種 言語法俗大抵相類 其人性愚慤 少嗜欲 不請丐 男女皆衣麩領 其俗重山川 山川各有部界 不得妄相乾/幹/榦涉 同姓不昏 多所忌諱 疾病死亡 輒捐棄舊宅 更造新居 知種麻/麻 養蠶 作綿佈 曉候星宿 豫知年歲豐約 常用十月祭天 晝夜飲酒歌舞 名之為“舞天” 又祠虎以為神 邑落有相侵犯者 輒相罰 責生口牛馬 名之為“責禍” 殺人者償死 少寇盜 能步戰 作矛長三丈 或數人共持之 樂浪檀弓齣其地 又多文豹 有果下馬 海齣班魚 使來皆獻之

三國志

濊南與辰韓 北與高句麗 沃沮接 東窮大海 今朝鮮之東皆其地也 戶二萬 昔箕子既適朝鮮 作八條之教以教之 無門戶之閉而民不爲盜 其後四十餘世 朝鮮侯（淮）僭號稱王 陳勝等起 天下叛秦 燕 齊 趙民避地朝鮮數萬口 燕人衛滿 魑結夷服 復來王之 漢武帝伐滅朝鮮 分其地爲四郡 自是之後 胡 漢稍別 無大君長 自漢已來 其官有侯 邑君 三老 統主下戶 其耆老舊自謂與句麗同種 其人性願慤 少嗜欲 有廉恥 不請（句麗）句 言語法俗大抵與句麗同 衣服有異 男女衣皆著曲領 男子擊銀花廣數寸以爲飾 自單單大山領以西屬樂浪 自領以東七縣 都尉主之 皆以濊爲民 後省都尉 封其渠帥爲 侯 今不耐濊皆其種也 漢末更屬句麗 其俗重山川 山川各有部分 不得妄相涉入 同姓不婚 多忌諱 疾病死亡輒損棄舊宅 更作新居 有麻布 蠶桑作綿 曉 候星宿 豫知年歲豐約 不以珠玉爲寶 常用十月節祭天 晝夜飲酒歌舞 名之爲舞天 又祭虎以爲神 其邑落相侵犯 輒相罰責 生口牛馬 名之爲責禍 殺人者償 死 少寇盜 作矛長三丈 或數人共持之 能步戰 樂浪檀弓出其地 其海出班魚皮 土地饒文豹 又出果下馬 漢桓時獻之 〈臣松之按：果下馬高三尺 乘之可於果樹下行 故謂之果下 見博物志

魏都賦〉

正始六年 樂浪太守劉茂 帶方太守弓遵以領東濊屬句麗 興師伐之 不耐侯等舉邑降 其八年 詣闕朝貢 詔更拜不耐濊王 居處雜在民間 四時詣郡朝謁 二郡有軍征賦調 供給役使 遇之如民

付録 4. 挹婁・肅慎・勿吉・靺鞨の内政と風俗記事

後漢書

挹婁

挹婁 古肅慎之國也 在夫餘東北韃餘淠/裏/裡 東濱大海 南與北沃沮接 不知其北所極 土地多山險 人形似夫餘 而言語各異 有五穀、麻/麻布 齧赤玉、好貂 無君長 其邑落各有大人 處于山林之間 土氣極寒 常為穴居 以深為貴 大傢至接九梯 好養豕 食其肉 衣其皮 鑿以豕膏塗身 厚數分 以禦風寒 夏則裸袒 以呎佈蔽其前後 其人臭穢不潔 作廁于中 圍之而居 自漢興以後 臣屬夫餘 種眾/衆雖少 而多勇力 處山險 又善射 發/髮能入人目 弓長四呎 力如弩 矢用枯 長一呎八吋 青石為鏃 鏃皆施毒 中人即死 便乘船 好寇盜 鄰國畏患 而卒不能服 東夷夫餘飲食類皆用俎豆 唯挹婁獨無 法俗最無綱紀者也

三國志

挹婁

挹婁在夫餘東北千餘里 濱大海 南與北沃沮接 未知其北所極 其土地多山險 其人形似夫餘 言語不與夫餘 句麗同 有五穀 牛 馬 麻布 人多 勇力 無大君長 邑落各有大人 處山林之間 常穴居 大家深九梯 以多為好 土氣寒 劇於夫餘 其俗好養豬 食其肉 衣其皮 冬以豬膏塗身 厚數分 以禦 風寒 夏則裸袒 以尺布隱其前後 以蔽形體 其人不絜 作溷在中央 人圍其表

居 其弓長四尺 力如弩 矢用楛 長尺八寸 青石爲鏃 古之肅慎氏之國也 善射 射人皆入（因） 矢施毒 人中皆死 出赤玉 好貂 今所謂挹婁貂是也 自漢已來 臣屬夫餘 夫餘責其租賦重 以黃初中叛之 夫餘數伐之 其人衆雖少 所在山險 鄰國人畏其弓矢 卒不能服也 其國便乘船寇盜 鄰國患之 東夷飲食類皆用俎豆 唯挹婁不 法俗最無綱紀也

晉書

肅慎

肅慎氏一名挹婁 在不鹹山北 去夫餘可六十日行 東濱大海 西接寇漫汗國 北極弱水 其土界廣袤數千里 居深山窮谷 其路險阻 車馬不通 夏則 巢居 冬則穴處 父子世爲君長 無文墨 以言語爲約 有馬不乘 但以爲財產而已 無牛羊 多畜豬 食其肉 衣其皮 績毛以爲布 有樹名雜常 若中國有聖帝 代立 則其木生皮可衣 無井灶 作瓦鬲 受四五升以食 坐則箕踞 以足挾肉而啖之 得凍肉 坐其上令暖 土無鹽鐵 燒木作灰 灌取汁而食之 俗皆編發 以 布作ㄗ簷 徑尺餘 以蔽前後 將嫁娶 男以毛羽插女頭 女和則持歸 然後致禮娉之 婦貞而女淫 貴壯而賤老 死者其日即葬之於野 交木作小槨 殺豬積其 上 以爲死者之糧 性兇悍 以無憂哀相尚 父母死 男子不哭泣 哭者謂之不壯 相盜竊 無多少皆殺之 故雖野處而不相犯 有石弩 皮骨之甲 檀弓三尺五 寸 楛矢長尺有咫 其國東北有山出石 其利入鐵 將取之 必先祈神

周武王時 獻其楛矢 石磐 逮于周公輔成王 復遣使入賀 爾後千餘年 雖秦漢之盛 莫之致也 及文帝作相 魏景元末 來貢楛矢 石磐 弓甲 貂 皮之屬 魏帝詔歸於相府 賜其王 儻雞錦罽 綿帛 至武帝元康初 復來貢獻 元帝中興 又詣江左貢其石磐 至成帝時 通貢于石季龍 四年方達 季龍問之 答曰：「每候牛馬向西南眠者三年矣 是知有大國所在 故來一雲」

魏書

勿吉

勿吉國 在高句麗北 舊肅慎國也 邑落各自有長 不相總一 其人勁悍 於東夷最強 言語獨異 常輕豆莫婁等國 諸國亦患之 去洛五千里 自和龍北二 百餘里有善玉山 山北行十三日至祁黎山 又北行七日至如洛瓌水 水廣里餘 又北行十五日至太魯水 又東北行十八日到其國 國有大水 闊三里餘 名速末水 其地下濕 築城穴居 屋形似塚 開口於上 以梯出入 其國無牛 有車馬 佃則偶耕 車則步推 有粟及麥稌 菜則有葵 水氣鹹凝 鹽生樹上 亦有鹽池 多猪 無羊 嚼米醞酒 飲能至醉 婦人則布裙 男子猪犬皮裘 初婚之夕 男就女家執女乳而罷 便以為定 仍為夫婦 俗以人溺洗手面 頭插虎豹尾 善射獵 弓長三 尺 箭長尺二寸 以石為鏃 其父母春夏死 立埋之 冢上作屋 不令雨濕；若秋冬 以其屍捕貂 貂食其肉 多得之 常七八月造毒藥 傅箭鏃 射禽獸 中者便 死 煮藥毒氣亦能殺人 國南有徒太山 魏言「大白」 有虎豹羆狼害人 人不得山上澠汗 行逕山者 皆以物盛

去延興中 遣使乙力支朝獻 太和初 又貢馬五百匹 乙力支稱：初發其國 乘船沂難河 西上 至太涂河 沉船於水 南出陸行 渡洛孤水 從契丹西界達 和龍 自云其國先破高 句麗十落 密共百濟謀從水道并力取高句麗 遣乙力支奉使大國 請其可否 詔敕三國同 是藩附 宜共和順 勿相侵擾 乙力支乃還 從其來 道 取得本船 汎達其國 九年 復遣 使侯尼支朝獻 明年復入貢

其傍有大莫盧國 覆鍾國 莫多回國 庫婁國 素和國 具弗伏國 [3]匹黎尔國 拔大何 國 [4]郁羽陵國 庫伏真國 魯婁國 羽真侯國 前後各遣使朝獻

隋書

靺鞨

靺鞨 在高麗之北 邑落俱有酋長 不相總一 凡有七種：其一號粟末部 與高麗相接 勝兵數千 多驍武 每寇高麗中 其二曰伯咄部 在粟末之北 勝兵七千 其三曰安車骨 部 在伯咄東北 其四曰拂涅部 在伯咄東 其五曰號室部 在拂涅東 其六曰黑水部 在 安車骨西北 其七曰白山部 在粟末東南 勝兵 並不過三千 而黑水部尤為勁健 自拂涅 以東 矢皆石鏃 即古之肅慎氏也 所居多依山水 渠帥曰大莫弗瞞咄 東夷中為強國 有 徒太山者 俗甚敬畏 上有熊羆 豹狼 皆不害人 人亦不敢殺 地卑濕 築土如堤 鑿穴以 居 開口向上 以梯出入 相與偶耕 土多粟麥稌 水氣咸 生鹽于木皮之上 其畜多豬 嚼 米為酒 飲 之亦醉 婦人服布 男子衣豬狗皮 俗以溺洗手面 于諸夷最為不潔 其俗淫 而妒 其妻外淫 人有告其夫者 夫輒殺妻 殺而後悔 必殺告者 由是姦淫之事終不 發

揚 人皆射獵爲業 角弓長三尺 箭長尺有二寸 常以七八月造毒藥 傳矢以射禽獸 中者立死

開皇初 相率遣使貢獻 高祖詔其使曰：「朕聞彼土人庶多能勇捷 今來相見 實副朕懷 朕視爾等如子 爾等宜敬朕如父 」對曰：「臣等僻處一方 道路悠遠 聞內國有聖人 故來朝拜 既蒙勞賜 親奉聖顏 下情不勝歡喜 願得長爲奴僕也 」其國西北與契丹相接 每相劫掠 後因其使來 高祖誡之曰：「我 憐念契丹與爾無異 宜各守土境 豈不安樂？何爲輒相攻擊 甚乖我意！」使者謝罪 高祖因厚勞之 令宴飲於前 使者與其徒皆起舞 其曲折多戰鬥之容 上顧謂 侍臣曰：「天地間乃有此物 常作用兵意 何其甚也！」然其國與隋懸隔 唯粟末 白山爲近

煬帝初與高麗戰 頻敗其衆 渠帥度地稽率其部來降 拜爲右光祿大夫 居之柳城 與邊人來往 悅中國風俗 請被冠帶 帝嘉之 賜以錦綺而褒寵之 及遼東之役 度地稽率其徒以從 每有戰功 賞賜優厚 十三年 從帝幸江都 尋放歸柳城 在途遇李密之亂 密遣兵邀之 前後十余戰 僅而得免 至高陽 復沒 于王須拔 未幾 遁歸羅藝

北史

勿吉

勿吉國在高句麗北 一曰靺鞨 邑落各自有長 不相總一 其人勁悍 於東夷最強 言語獨異 常輕豆莫婁等國 諸國亦患之 去洛陽五千里 自和龍北 二百餘里有善玉山 山北

行十三日至祁黎山 又北行七日至洛環水 水廣里餘 又北行十五日至太岳魯水 又東北行十八日到其國 國有大水 闊三里餘 名速末 水 其部類凡有七種：其一號粟末部 與高麗接 勝兵數千 多驍武 每寇高麗 其二伯咄部 在粟末北 勝兵七千 其三安車骨部 在伯咄東北 其四拂涅部 在 伯咄東 其五號室部 在拂涅東 其六黑水部 在安車骨西北 其七白山部 在粟末東南 勝兵並不過三千 而黑水部尤爲勁健 自拂涅以東 矢皆石鏃 即古肅慎 氏也 東夷中爲強國 所居多依山水 渠帥曰大莫弗瞞咄 國南有從太山者 華言太皇 俗甚敬畏之 人不得山上洩汗 行經山者 以物盛去 上有熊羆豹狼 皆不 害人 人亦不敢殺 地卑濕 築土如堤 鑿穴以居 開口向上 以梯出入 其國無牛 有馬 車則步推 相與偶耕 土多粟 麥 稌 菜則有葵 水氣城 生鹽于木 皮之上 亦有鹽池 其畜多獵 無羊 嚼米爲酒 飲之亦醉 婚嫁 婦人服布裙 男子衣豬皮裘 頭插武豹尾 俗以溺洗手面 于諸夷最爲不潔 初婚之夕 男就女 家 執女乳而罷 妒 其妻外淫 人有告其夫 夫輒殺妻而後悔 必殺告者 由是姦淫事終不發 人皆善射 以射獵爲業 角弓長三尺 箭長尺二寸 常以七八月造 毒藥 傅矢以射禽獸 中者立死 煮毒藥氣亦能殺人 其父母春夏死 立埋之 塚上作屋 令不雨濕 若秋冬死 以其屍捕貂 貂食其肉 多得之

延興中 遣乙力支朝獻 太和初 又貢馬五百匹 乙力支稱：初發其國 乘船溯難河西 上 至太瀾河 沈船于水 南出陸行 度洛孤水 從契丹西界達和 龍 自云其國先破高句麗十落 密共百濟謀 從水道並力取高麗 遣乙力支奉使大國 謀其可否 詔敕：「三國同是藩附 宜共和順 勿相侵擾」 乙力支乃還 從 其來道 取得本船 泛達其國 九年 復遣使侯尼支朝 明年 復入貢 其傍有大莫盧國 覆鐘國 莫多回國 庫婁國 素和國 具弗伏國 匹黎爾國 拔大何國 郁羽陵國 庫伏真國 魯婁國 羽真侯國 前後各遣使朝獻

太和十二年 勿吉復遣使貢楛矢 方物于京師 十七年 又遣使人婆非等五百餘人朝貢
景明四年 復 遣使侯力歸朝貢 自此迄於正光 貢使相尋 爾後中國紛擾 頗或不至 興
和二年六月 遣石文雲等貢方物 以至於齊 朝貢不絕

隋開皇初 相率遣使貢獻 文帝詔其使曰：「朕聞彼土人勇 今來實副朕懷 視爾等如
子 爾宜敬朕如父 」對曰：「臣等僻處一方 聞內國有聖人 故 來朝拜 既親奉聖顏
願長爲奴僕 」其國西北與契丹接 每相劫掠 後因其使來 文帝誡之 使勿相攻擊 使者
謝罪 文帝因厚勞之 令宴飲于前 使者與其徒皆 起舞 曲折多戰鬥容 上顧謂侍臣曰：
「天地間乃有此物 常作用兵意 」然其國與隋懸隔 唯粟末 白山爲近 煬帝初 與高麗
戰 頻敗其衆 渠帥突地稽率其部 降 拜右光祿大夫 居之柳城 與邊人來往 悅中國風
俗 請被冠帶 帝嘉之 賜以錦綺而褒寵之 及遼東之役 突地稽率其徒以從 每有戰功
賞賜甚厚 十三年 從幸江都 尋放還柳城 李密遣兵邀之 僅而得免 至高陽 沒于王須
拔 未幾 遁歸羅藝

付録 5. 高句麗の内政と風俗記事

夷蛮伝のない陳書と晋書以外の全てで採り挙げられ得ている。

後漢書

高句驪 在遼東之東韃淠/裏/裡 南與朝鮮、濊貊 東與沃沮 北與扶餘接 地方二韃淠/裏/裡 多大山深穀 人隨而為居 少田業 力作不足以自資 故其俗節于飲食 而好脩宮室 東夷相傳以為扶餘別/警種 故言語法則多同 而跪拜拙一腳 行步皆走 凡有五族 有消奴部、絕奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部 本消奴部為王 稍微弱 後桂婁部代之 其置官 有相加、對盧、沛者、古鄒大加、主簿、優檣/臺/廳、使者、帛衣先人 武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟 賜鼓吹伎人 其俗淫 皆潔淨/淨自熹 暮夜輒男女群聚為倡樂 好祠鬼神、社稷、零星 以十月祭天大會 名曰“東盟” 其國東有大穴 號禊神 亦以十月迎而祭之 其公會衣服皆錦繡 金銀以自飾 大加、主簿皆著幘 如冠幘而無後； 其小加著摺風 形如弁 無牢獄 有罪 諸加評議便殺之 沒入妻子為奴婢 其昏姻皆就婦 儵 生子長大 然後將還 便稍營送終之具 金銀財幣儘/盡于厚葬 勳/積石為封 亦種鬆 柏 其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮、東濊皆屬焉

句驪一名貊 有別/警種 依小水為居 因名曰小水貊 齣好弓 所謂“貊弓”是也

三國志

高句麗在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接 都於丸都之下 方可二千里 戶三萬 多大山深谷 無原澤 隨山谷以爲居 食澗水 無良田 雖力佃作 不足以實口腹 其俗節食 好治宮室 於所居之左右立大屋 祭鬼神 又祀靈星社稷 其人性凶急 善寇鈔 其國有王 其官有相加 對盧 沛者 古雛加 主簿 優台丞 使者 皐衣先人 尊卑各有等級 東夷舊語以爲夫餘別種 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服有異 本有五族 有涓奴部 絕奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部代之 漢時賜鼓吹技人 常從玄菟郡受朝服衣幘 高句麗令主其名籍 後稍驕恣 不復詣郡 於東界築小城 置朝服衣幘其中 歲時來取之 今胡猶名此城爲幘溝瀆 溝瀆者 句麗名城也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置對盧 王之宗族 其大加皆 稱古雛加 涓奴部本國主 今雖不爲王 適統大人 得稱古雛加 亦得立宗廟 祠靈星社稷 絕奴部世與王婚 加古雛之號 諸大加亦自置使者 皐衣先人 名皆 達於王 如卿大夫之家臣 會同坐起 不得與王家使者 皐衣先人同列 其國中大家不佃作 坐食者萬餘口 下戶遠擔米糧魚鹽供給之 其民喜歌舞 國中邑落 暮夜男女群聚 相就歌戲 無大倉庫 家家自有小倉 名之爲桴京 其人絜清自喜 喜藏釀 跪拜申一腳 與夫餘異 行步皆走 以十月祭天 國中大會 名曰東盟 其公會 衣服皆錦繡金銀以自飾 大加主簿 頭著幘 如幘而無餘 其小加著折風 形如弁 其國東有大穴 名隧穴 十月國中大會 迎隧神還于國東上祭之 置木隧 於神坐 無牢獄 有罪諸加評議 便殺之 沒入妻子爲奴婢 其俗作婚姻 言語已定 女家作小屋於大屋後 名婿屋 婿暮至女家戶外 自名跪拜 乞得就女宿 如是者再三 女父母乃聽使就小屋中宿 傍頓錢帛 至生子已長大 乃將婦歸家

其俗淫 男女已嫁娶 便稍作送終之衣 厚葬 金銀財幣 盡於送死 積石爲封 列 種松柏
其馬皆小 便登山 國人有氣力 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉 又有小水貊 句麗作國 依大
水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水作 國 因名之爲小水貊 出好弓
所謂貊弓是也

宋書

東夷高句驪國 今治漢之遼東郡 に始まり記年記事のみ。

南齊書

高麗俗服窮袴 冠折風一梁 謂之幘 知讀《五經》 使人在京師 中書郎王融戲之
曰：「服之不衷 身之災也 頭上定是何物？」答曰：「此卽古弁之遺像也 」

梁書

王以爲神 乃聽收養 長而善射 王忌其猛 復欲殺之 東明乃奔走 南至淹滯水 以弓
擊水 魚鱉 皆浮爲橋 東明乘之得渡 至夫餘而王焉 其後支別爲句驪種也

句驪地方可二千里 中有遼山 遼水所出 其王都於丸都之下 多大山深谷 無原澤 百
姓依之以居 食澗水 雖土著 無良田 故其俗節食 好治宮 室 于所居之左立大屋 祭鬼
神 又祠零星 社稷 人性凶急 喜寇抄 其官 有相加 對盧 沛者 古鄒加 主簿 優臺 使
者 阜衣先人 尊卑各有等級 言語 諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異 本有五族 有

消奴部 絕奴部 慎奴部 藿奴部 桂婁部 本消奴部爲王 微弱 桂婁部代之 漢時賜衣幘
朝服 鼓吹 常從玄菟郡受之 後稍驕 不復詣郡 但於東界築小城以受之 至今猶名此
城爲幘溝婁 「溝婁」者 句驪名「城」也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置
對盧 其俗喜歌舞 國中邑落男女 每夜羣聚歌戲 其人潔清自喜 善藏釀 跪拜申一腳
行步皆走 以十月祭天大會 名曰「東明」 其公會衣服 皆錦繡金銀以 自飾 大加 主
簿頭所著似幘而無後；其小加著折風 形如弁 其國無牢獄 有罪者 則會諸加評議殺之
沒入妻子 其俗好淫 男女多相奔誘 已嫁娶 便稍作送 終之衣 其死葬 有槨無棺 好厚
葬 金銀財幣盡於送死 積石爲封 列植松柏 兄死妻嫂 其馬皆小 便登山 國人尚氣力
便弓矢刀矛 有鎧甲 習戰鬪 沃沮 東穢皆屬焉

魏書

(朱蒙の話が続いた後)

民皆土著 隨山谷而居 衣布帛及皮 土田薄瘠 蠶農不足以自供 故其人節飲食 其俗淫
好歌舞 夜則男女羣聚而戲 無貴賤之節 然 潔淨自喜 其王好治宮室 其官名有謁奢
太奢 大兄 小兄之號 頭著折風 其形如弁 旁插鳥羽 貴賤有差 立則反拱 跪拜曳一腳
行步如走 常以十月祭 天 國中大會 其公會 衣服皆錦繡 金銀以爲飾 好蹲踞 食用俎
几 出三尺馬 云本朱蒙所乘 馬種即果下也 後貢使相尋 歲致黃金二百斤 白銀四百斤

時馮文通率眾奔之 世祖遣散騎常侍封撥詔璉令送文通 璉上書稱當與文通俱奉王化 竟不送 世祖怒 欲往討之 樂平王丕等議待後舉 世祖乃止 而文通亦尋為璉所殺

周書

高麗者 其先出於夫餘 自言始祖曰朱蒙 河伯女感日影所孕也 朱蒙長而有材畧 夫餘人惡而逐之 土于紇斗骨城 自號曰高句麗 仍以高為氏 其孫莫來漸盛 擊夫餘而臣之 莫來裔孫璉 始通使於後魏

其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城 其城 東西六里 南臨湏水 城內唯積倉儲器備 寇賊至日 方入固守 王則別為宅於其側 不常居之 其外有國內城及漢城 亦別都也 復有遼東 玄菟等數十城 皆置官司 以相統攝 大官有大對盧 次有太大兄 大兄 小兄 意侯奢 烏拙 太大使者 大使者 小使者 禡奢 翳屬 仙人并禡薩凡十三等 分掌內外事焉 其大對盧 則以彊弱相陵 奪而自為之 不由王之署置也 其刑法：謀反及叛者 先以火焚爇 然後斬首 籍沒其家 盜者 十餘倍徵贓 若貧不能備 及負公私債者 皆聽評 其子女為奴婢以償之

丈夫衣同袖衫 大口褲 白韋帶 黃革履 其冠曰骨蘇 多以紫羅為之 雜以金銀為飾 其有官品者 又插二鳥羽於其上 以顯異之 婦人服裙襦 裾袖 皆為袂 書籍有《五經》《三史》《三國志》《晉陽秋》 兵器有甲弩弓箭戟稍矛鋌 賦稅則絹布及粟 隨其所有 量貧富差等輸之 土田瘠薄 居處節儉 然尚容止 多詐偽 言辭鄙穢 不簡親疏

乃至同川而浴 共室而寢 風俗好淫 不以為愧 有游女者 夫無常人 婚娶之禮 畧無財幣 若受財者 謂之賣婢 俗 甚恥之 父母及夫喪 其服制同於華夏 兄弟則限以三月 敬信佛法 尤好淫祀 又有神廟二所：一曰夫餘神 刻木作婦人之象 一曰登高神 云是其始祖夫餘神之 子 竝置官司 遣人守護 蓋河伯女與朱蒙云

隋書

高麗之先 出自夫餘 夫余王嘗得河伯女 因閉於室內 為日光隨而照之 感而遂孕 生一大卵 有一男子破殼而出 名曰硃蒙 夫余之臣以硃蒙非人所 生 鹹請殺之 王不聽 及壯 因從獵 所獲居多 又請殺之 其母以告硃蒙 硃蒙棄夫余東南走 遇一大水 深不可越 硃蒙曰：「我是河伯外孫 日之子也 今 有難 而追兵且及 如何得渡？」於是魚鱉積而成橋 硃蒙遂渡 追騎不得濟而還 硃蒙建國 自號高句麗 以高為氏 硃蒙死 子閔達嗣 至其孫莫來興兵 遂並 夫餘 至裔孫位宮 以魏正始中入寇西安平 毋丘儉拒破之 位宮玄孫之子曰昭列帝 為慕容氏所破 遂入丸都 焚其宮室 大掠而還 昭列帝后為百濟所殺 其曾 孫璉 遣使後魏 璉六世孫湯 在周遣使朝貢 武帝拜湯上開府 遼東郡公 遼東王 高祖受禪 湯復遣使詣闕 進授大將軍 改封高麗王 歲遣使朝貢不絕

其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城 亦曰長安城 東西六里 隨山屈曲 南臨溟水 復有國內城 漢城 並其都會之所 其國中呼為「三京」 與新羅每相侵奪 戰爭不息 官有太大兄 次大兄 次小兄 次對盧 次意侯奢 次烏拙 次太大使者 次大使者 次小使者 次褥奢 次翳屬 次仙人 凡十二 等 復有內評 外評 五部褥薩 人皆皮冠 使人加插

鳥羽 貴者冠用紫羅 飾以金銀 服大袖衫 大口袴 素皮帶 黃革屨 婦人裙襦加襪 兵器與中國略同 每 春秋校獵 王親臨之 人稅布五匹 谷五石 遊人則三年一稅 十人共細布一匹 租戶一石 次七門 下五門 反逆者縛之於柱 爇而斬之 籍沒其家 盜則償十倍 用刑既峻 罕有犯者 樂有五弦 琴 箏 篳篥 橫吹 簫 鼓之屬 吹蘆以和曲 每年初 聚戲于湏水之上 王乘腰輿 列羽儀以觀之 事畢 王以衣服入 水 分左右爲二部 以水石相濺擲 喧呼馳逐 再三而止 俗好蹲踞 潔淨自喜 以趨走爲敬 拜則曳一腳 立各反拱 行必搖手 性多詭伏 父子同川而浴 共室 而寢 婦人淫奔 俗多遊女 有婚嫁者 取男女相悅 然即爲之 男家送豬酒而已 無財聘之禮 或有受財者 人共恥之 死者殯于屋內 經三年 擇吉日而葬 居 父母及夫之喪 服皆三年 兄弟三月 初終哭泣 葬則鼓舞作樂 以送之 埋訖 悉取死者生時服玩車馬置於墓側 會葬者爭取而去 敬鬼神 多淫祠

南史

高句麗 在遼東之東千里 其先所出 事詳北史 地方可二千里 中有遼山 遼水所出 漢 魏世 南與朝鮮獫狁 東與沃沮 北與夫餘接 其王都於丸 都山下 地多大山深谷 無原澤 百姓依之以居 食澗水 雖土著 無良田 故其俗節食 好修宮室 于所居之左立大屋 祭鬼神 又祠零星 社稷 人性凶急 喜 寇鈔 其官有相加 對盧 沛者 古鄒加 主簿 優台 使者 阜衣 先人 尊卑各有等級 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服有異 本有五族 有消奴部 絕奴 部 慎奴部 灌奴部 桂婁部 本消奴部爲王 微弱 桂婁部代之 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置對盧 俗喜歌舞 國中邑落 男女每夜群聚歌戲 其人潔淨自喜 善藏釀 跪拜申一腳 行步皆走 以十月祭天大會 其公會衣服皆錦繡金銀

以自飾 大加 主簿頭所著似幘而無後 其小加著折風 形如弁 其國無牢 獄 有罪者則會諸加評議 重者便殺之 沒入其妻子 其俗好淫 男女多相奔誘 已嫁娶便稍作送終之衣 其死葬 有槨無棺 好厚葬 金銀財幣盡於送死 積石爲 封 列植松柏 兄死妻嫂 其馬皆小 便登山 國人尚氣力 便弓矢刀矛 有鎧甲 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉

北史

高句麗 其先出夫餘 王嘗得河伯女 因閉於室內 爲日所照 引身避之 日影又逐 既而有孕 生一卵 大如五升 夫余王棄之與犬 犬不食 與豕 豕不食 棄于路 牛馬避之 棄於野 衆鳥以毛茹之 王剖之不能破 遂還其母 母以物裹置暖處 有一男破而出 及長 字之曰硃蒙 其俗言「硃蒙」者 善射 也 夫余人以硃蒙非人所生 請除之 王不聽 命之養馬 硃蒙私試 知有善惡 駿者減食令瘦 駑者善養令肥 夫余王以肥者自乘 以瘦者給硃蒙 後狩于田 以 硃蒙善射 給之一矢 硃蒙雖一矢 殪獸甚多 夫餘之臣 又謀殺之 其母以告硃蒙 硃蒙乃與焉違等二人東南走 中道遇一大水 欲濟無梁 夫餘人追之甚急 硃蒙告水曰：「我是日子 河伯外孫 今追兵垂及 如何得濟？」於是魚鱉爲之成橋 硃蒙得度 魚鱉乃解 追騎不度 硃蒙遂至普述水 遇見三人 一著麻衣 一著 衲衣 一著水藻衣 與硃蒙至紇升骨城 遂居焉 號曰高句麗 因以高爲氏 其在夫余妻懷孕 硃蒙逃後 生子始閭諧 及長 知硃蒙爲國王 即與母亡歸之 名曰 閭達 委之國事

舊唐書

高麗者 出自扶餘之別種也 其國都於平壤城 即漢樂浪郡之故地 在京師東五千一百里 東渡海至於新羅 西北渡遼水至於營州 南渡海至於百濟 北 至靺鞨 東西三千一百里 南北二千里 其官大者號大對盧 比一品 總知國事 三年一代 若稱職者 不拘年限 交替之日 或不相祇服 皆勒兵相攻 勝者爲 之 其王但閉宮自守 不能制禦 次曰太 兄 比正二品 對盧以下官 總十二級 外置州縣六十餘城 大城置僣薩一 比都督 諸城 置道使 比刺史 其下各有僚 佐 分掌曹事 衣裳服飾 唯王五彩 以白羅爲冠 白皮小帶 其冠及帶 咸以金飾 官之貴者 則青羅爲冠 次以緋羅 插二鳥羽 及金銀爲飾 衫筒袖 褲大 口 白韋帶 黃韋履 國人衣褐戴弁 婦人首加巾幘 好圍棋投壺之戲 人能蹴鞠 食 用籩豆 簠簋 尊俎 疊洗 頗有箕子之遺風

其所居必依山谷 皆以茅草葺舍 唯佛寺 神廟及王宮 官府乃用瓦 其俗貧窶者多 冬 月皆作長坑 下燃；煨火以取暖 種田養蠶 略同中國 其法： 有謀反叛者 則集衆持火 炬競燒灼之 焦爛備體 然後斬首 家悉籍沒；守城降敵 臨陣敗北 殺人行劫者 斬；盜 物者 十二倍酬贓；殺牛馬者 沒身爲奴婢 大 體用法嚴峻 少有犯者 乃至路不拾遺 其俗多淫祀 事靈星神 日神 可汗神 箕子神 國城東有大穴 名神隧 皆以十月 王自祭 之

俗愛書籍 至於衡門廡養之家 各於街衢造大屋 謂之扁堂 子弟未婚之前 晝夜于此 讀書習射 其書有《五經》及《史記》 《漢書》 範曄《後漢書》 《三國志》 孫盛 《晉春秋》 《玉篇》 《字統》 《字林》；又有《文選》 尤愛重之

新唐書

高麗 本扶餘別種也 地東跨海距新羅 南亦跨海距百濟 西北度遼水與營州接 北靺鞨 其君居平壤城 亦謂長安城 漢樂浪郡也 去京師五千里而 羸 隨山屈繚爲郭 南涯涓水 王築宮其左 又有國內城 漢城 號別都 水有大遼 少遼：大遼出靺鞨西南山 南曆安市城；少遼出遼山西 亦南流 有梁水出塞 外 西行與之合 有馬訾水出靺鞨之白山 色若鴨頭 號鴨淥水 曆國內城西 與鹽難水合 又西南至安市 入於海 而平壤在鴨淥東南 以巨廬濟人 因恃以爲 暫

官凡十二級：曰大對廬 或曰吐粹；曰鬱折 主圖簿者；曰太大使者；曰帛衣頭大兄 所謂帛衣者 先人也 秉國政 三歲一易 善職則否 凡代日 有 不服則相攻 王爲閉宮守 勝者聽爲之；曰大使者；曰大兄；曰上位使者；曰諸兄；曰小使者；曰過節；曰先人；曰古鄒大加 其州縣六十 大城置僣薩一 比都 督；餘城置處閭近支 亦號道使 比 刺史 有參佐 分幹 有大模達 比衛將軍；末客 比中郎將

分五部：曰內部 即漢桂婁部也 亦號黃部；曰北部 即絕奴部也 或號後部；曰東部 即順奴部也 或號左部；曰南部 即灌奴部也 亦號前部；曰西部 即消奴部也

王服五采 以白羅制冠 革帶皆金扣 大臣青羅冠 次絳羅 珥兩鳥羽 金銀雜扣 衫筒 袖 褲大口 白韋帶 黃革履 庶人衣褐 戴弁 女子首巾幘 俗喜弈 投壺 蹴鞠 食用籩 豆 簋 簠 洗 居依山谷 以草茨屋 惟王宮 官府 佛廬以瓦 窶民盛冬作長坑 煨火

以取暖 其治 峭法以繩下 故少 犯 叛者叢炬灼體 乃斬之 籍入其家 降 敗 殺人及剽
劫者斬 盜者十倍取償 殺牛馬者沒爲奴婢 故道不掇遺 婚娶不用幣 有受者恥之 服父
母喪三年 兄 弟逾月除 俗多淫祠 禮靈星及日 箕子 可汗等神 國左有大穴曰神隧 每
十月 王皆自祭 人喜學 至窮里廡家 亦相矜勉 衢側悉構嚴屋 號局堂 子弟未婚 者曹
處 誦經習射

付録 6. 韓・馬韓の内政と風俗記事

後漢書

韓有三種：一曰馬韓、二曰辰韓、三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 大者萬餘戶 小者數韃儵 各在山海間 地郤/闊方四韃餘 湮/裏/裡 東西以海為限 皆古之辰國也

馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 儘/盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉

馬韓人知田蠶 作綿佈 齧大慄如梨 有長尾雞/鷄 尾長五呎 邑落雜居 亦無城郭 作土室 形如冢 開戶在上 不知跪拜 無長幼男女之別/警 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重瓔珠 以綴衣為飾 及縣頸垂耳 大率皆魁頭露_纒介 佈袍草履 其人壯勇 少年有築室作力者 輒以繩貫脊皮 縋以大木 歡呼為健 常以五月田竟祭鬼神 晝夜酒會 群聚歌舞 舞輒數十人相隨 蹋地為節 十月農功畢 亦復/複如之 諸國邑各以一人主祭天神 號為“天君” 又立嚙/甦/蘇塗 建大木以縣鈴鼓 事鬼神 其南界近倭 亦有文身者

三國志

韓在帶方之南 東西以海為限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也

馬韓在西 其民土著 種植 知蠶桑 作綿布 各有長帥 大者自名為臣智 其次為邑借

散在山海間 無城郭 (国のリスト) 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 辰王治
月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪蹶支濱臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官有魏率
善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長

俗少綱紀 國邑雖有主帥 邑落雜居 不能善相制禦 無跪拜之禮 居處作草屋土室 形
如塚 其戶在上 舉家共在中 無長幼男女之別 其葬有槨無 棺 不知乘牛馬 牛馬盡於
送死 以瓔珠爲財寶 或以綴衣爲飾 或以縣頸垂耳 不以金銀錦繡爲珍 其人性強勇 魁
頭露紒 如炁兵 衣布袍 足履革躡蹋 其國 中有所爲及官家使築城郭 諸年少勇健者
皆鑿脊皮 以大繩貫之 又以丈許木鍤之 通日嚙呼作力 不以爲痛 既以勸作 且以爲健
常以五月下種訖 祭鬼神 群聚歌舞 飲酒晝夜無休 其舞 數十人俱起相隨 踏地低昂
手足相應 節奏有似鐸舞 十月農功畢 亦復如之 信鬼神 國邑各立一人主祭天神 名之
天君 又 諸國各有別邑 名之爲蘇塗 立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之
好作賊 其立蘇塗之義 有似浮屠 而所行善惡有異 其北方近郡諸國差曉禮 俗 其遠處
直如囚徒奴婢相聚 無他珍寶 禽獸草木略與中國同 出大栗 大如梨 又出細尾雞 其尾
皆長五尺餘 其男子時時有文身 又有州胡在馬韓之西海中 大 島上 其人差短小 言語
不與韓同 皆髡頭如鮮卑 但衣韋 好養牛及豬 其衣有上無下 略如裸勢 乘船往來 市
買韓中

晉書

韓種有三：一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帶方南 東西以海爲限
馬韓居山海之間 無城郭 凡有小國五十六所 大者萬戶 小者數千家 各有渠帥 俗少綱

紀 無跪拜之禮 居處作土室 形如塚 其戶向上 舉家共在 其中 無長幼男女之別 不知乘牛馬 畜者但以送葬 俗不重金銀錦罽 而貴瓔珠 用以綴衣或飾發垂耳 其男子科頭露紒 衣布袍 履草躡 性勇悍 國中有所調 役 及起築城隍 年少勇健者皆鑿其背皮 貫以大繩 以杖搖繩 終日歡呼力作 不以爲痛 善用弓楯矛櫓 雖有鬥爭攻戰 而貴相屈服 俗信鬼神 常以五月耕種 畢 群聚歌舞以祭神；至十月農事畢 亦如之 國邑各立一人主祭天神 謂爲天君 又置別邑 名曰蘇塗 立大木 懸鈴鼓 其蘇塗之義 有似西域浮屠也 而所行 善惡有異

付録 7. 辰韓の内政と風俗記事

後漢書

辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦語 故或名之為秦韓 有城柵屋室 諸小別/警邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊祗 次有殺奚 次有邑藉 土地肥美 宜五穀 知蠶桑 作縑佈 乘駕牛馬 嫁娶以禮 行者讓路 國齟鐵 濊、倭、馬韓並/併從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨 俗喜歌舞、飲酒、鼓瑟 兒生欲令其頭扁 皆押之以石

三國志

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割其東界地與之 有城柵 其言語不與馬韓同 名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為 行觴 相呼皆為徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人為阿殘；東方人名我為阿 謂樂浪人本其殘餘人 今有名之為秦韓者 始有六國 稍分為十二國

晉書

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 韓割東界以居之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之為秦韓 初有六國 後稍分為十二 又有弁辰 亦十二 國 合四五萬戶 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故為馬韓所制也 地宜五穀 俗饒蠶桑 善作縑布 服 牛乘馬 其風俗可類馬韓 兵器亦與之

同 初生子 便以石押其頭使扁 喜舞 善彈瑟 瑟形似築

武帝太康元年 其王遣使獻方物 二年復來朝貢 七年又來

(全文)

付録 8. 弁韓の内政と風俗記事

後漢書

弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美發/髮 衣服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者

三國志

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚 次有邑借

(弁辰韓合二十四國のリスト)

弁辰韓合二十四國 大國四五千家 小國六七百家 總四五萬戶 其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立爲王 〈魏略曰：明其爲流移之人 故爲馬韓所制〉 土地肥美 宜種五穀及稻 曉蠶桑 作縑布 乘駕牛馬 嫁娶禮俗 男女有別 以大鳥羽送死 其意欲使死者飛揚 魏略曰：其國作屋 橫累木爲之 有似牢獄也 國出鐵 韓濊 倭皆從取之 諸市買皆用鐵 如中國用錢 又以供給二郡 俗喜歌舞飲酒 有瑟 其形似築 彈之亦有音曲 兒生 便以石厭其頭 欲其褊 今辰韓人皆褊頭 男女近倭 亦文身 便步戰 兵仗與馬韓同 其俗 行者相逢 皆住讓路

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶 皆在戶西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大 衣服潔清 長髮 亦作廣幅細布 法俗特嚴峻

晉書

弁韓の記事は無い。

付録 9. 他の東夷諸国の内政と風俗記事

小水貊

後漢書

句驪一名貊 有別/警種 依小水為居 因名曰小水貊 齣好弓 所謂“貊弓”是也

三国志

又有小水貊 句麗作國 依大水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水
作 國 因名之為小水貊 出好弓 所謂貊弓是也

裨離

晉書

裨離國在肅慎西北 馬行可二百日 領戶二萬 養雲國去裨離馬行又五十日 領戶二
寇莫汗國去養雲國又百日行 領戶五萬餘 一群國去莫汗又百五十日 計去肅慎五萬
餘里 其風俗土壤並未詳

泰始三年 各遣小部獻其方物 至太熙初 復有牟奴國帥逸芝惟離 模盧國帥沙支臣芝
於離末利國帥加牟臣芝 蒲都國帥因末 繩全國帥馬路 沙樓國帥鈇加 各遣正副使詣東
夷校尉何龕歸化

加羅

南齊書

加羅國 三韓種也 建元元年 國王荷知使來獻 詔曰：「量廣始登 遠夷洽化 加羅王 荷知款關海外 奉贄東遐 可授輔國將軍 本國王 」

扶桑

梁書

扶桑國者 齊永元元年 其國有沙門慧深來至荊州 說云：「扶桑在大漢國東二萬餘里 地在中國之東 其土多扶桑木 故以爲名 」扶桑葉似桐 而初 生如筍 國人食之 實如梨而赤 績其皮爲布以爲衣 亦以爲綿 作板屋 無城郭 有文字 以扶桑皮爲紙 無兵甲 不攻戰 其國法 有南北獄 若犯輕者入南 獄 重罪者入北獄 有赦則赦南獄 不赦北獄 在北獄者 男女相配 生男八歲爲奴 生女九歲爲婢 犯罪之身 至死不出 貴人有罪 國乃大會 坐罪人於坑 對 之宴飲 分訣若死別焉 以灰繞之 其一重則一身擯退 二重則及子孫 三重則及七世 名國王爲乙祔；貴人第一者爲大對盧 第二者爲小對盧 第三者爲納咄沙 國王行有鼓角導從 其衣色隨年改易 甲乙年青 丙丁年赤 戊己年黃 庚辛年白 壬癸年黑 有牛角甚長 以角載物 至勝二十斛 車有馬車 牛車 鹿車 國人 養鹿 如中國畜牛 以乳爲酪 有桑梨 經年不壞 多蒲桃 其地無鐵有銅 不貴金銀 市無租估 其婚姻 婿往女家門外作屋 晨夕灑掃 經年而女不悅 卽驅 之 相悅乃成婚 婚禮大抵與中國同 親喪 七日不食；祖父母喪 五日不食；兄弟伯叔姑姊妹 三日不食 設靈

爲神像 朝夕拜奠 不制纓經 嗣王立 三年不視 國事 其俗舊無佛法 宋大明二年 罽賓國嘗有比丘五人遊行至其國 流通佛法 經像 教令出家 風俗遂改 」

慧深又云：「扶桑東千餘里有女國 容貌端正 色甚潔白 身體有毛 髮長委地 至二三月 競入水則任娠 六七月產子 女人胸前無乳 項後生毛 根白 毛中有汁 以乳子一百日能行 三四年則成人矣 見人驚避 偏畏丈夫 食鹹草如禽獸 咸草葉似邪蒿 而氣香味鹹 」天監六年 有晉安人渡海 爲風所 飄至一島 登岸 有人居止 女則如中國 而言語不可曉；男則人身而狗頭 其聲如吠 其食有小豆 其衣如布 築土爲牆 其形圓 其戶如竇云

南史

扶桑國者 齊永元元年 其國有沙門慧深來至荊州 說云：「扶桑在大漢國東二萬餘里 地在中國之東 其土多扶桑木 故以爲名 扶桑葉似桐 初生如 筍 國人食之 實如梨而赤 績其皮爲布 以爲衣 亦以爲錦 作板屋 無城郭 有文字 以扶桑皮爲紙 無兵甲 不攻戰 其國法有南北獄 若有犯 輕罪者入南 獄 重罪者入北獄 有赦則放南獄 不赦北獄 在北獄者男女相配 生男八歲爲奴 生女九歲爲婢 犯罪之身 至死不出 貴人有罪 國人大會 坐罪人于坑 對之 宴飲分訣若死別焉 以灰繞之 其一重則一身擯退 二重則及子孫 三重者則及七世 名國王爲乙祔 貴人第一者爲對盧 第二者爲小對盧 第三者爲納咄沙 國王 行有鼓角導從 其衣色隨年改易 甲乙年青 丙丁年赤 戊己年黃 庚辛年白 壬癸年黑 有牛角甚長 以角載物 至勝二十斛 有馬車 牛車 鹿車 國人養鹿如

中國畜牛 以乳爲酪 有赤梨 經年不壞 多蒲桃 其地無鐵有銅 不貴金銀 市無租估 其昏姻法 則婿往女家門外作屋 晨夕灑掃 經年而女不悅即驅之 相悅 乃成昏 昏禮大抵與中國同 親喪七日不食 祖父母喪五日不食 兄弟伯叔姑姊妹三日不食 設座爲神像 朝夕拜奠 不制衰經 嗣王立 三年不親國事 其俗舊無 佛法 宋大明二年 罽賓國嘗有比丘五人遊行其國 流通佛法經像 教令出家 風俗遂改 』

慧深又云：「扶桑東千餘里有女國 容貌端正 色甚潔白 身體有毛 發長委地 至二三月競入水則任娠 六七月產子 女人胸前無乳 項後生毛 根 白 毛中有汁以乳子 百日能行 三四年則成人矣 見人驚避 偏畏丈夫 食鹹草如禽獸 鹹草葉似邪蒿 而氣香味鹹 梁天監六年 有晉安人度海 爲風所飄至一 島 登岸 有人居止 女則如中國 而言語不可曉 男則人身而狗頭 其聲如吠 其食有小豆 其衣如布 築土爲牆 其形圓 其戶如竇云 』

流求

隋書

流求國 居海島之中 當建安郡東 水行五日而至 土多山洞 其王姓歡斯氏 名渴刺兜 不知其由來有國代數也 彼土人呼之爲可老羊 妻曰多拔茶 所居曰波羅檀洞 塹柵三重 環以流水 樹棘爲籬 王所居舍 其大一十六間 雕刻禽獸 多門鏤樹 似橘而葉密 條纖如發然下垂 國有四五帥 統諸洞 洞有小 王 往往有村 村有鳥了帥 並以善戰者爲之 自相樹立 理一村之事 男女皆以白糸寧繩纏髮 從項後般繞至額 其男子用鳥羽爲

冠 裝以珠貝 飾以赤毛 形制 不同 婦人以羅紋白布爲帽 其形正方 織鬥鏤皮並雜色 系甯及雜毛以爲衣 制裁不一 綴毛垂螺爲飾 雜色相間 下垂小貝 其聲如佩 綴璫施釧 懸珠於頸 織 藤爲笠 飾以毛羽 有刀 槊 弓 箭 劍 鉞之屬 其處少鐵 刃皆薄小 多以 骨角輔助之 編系寧爲甲 或用熊豹皮 王乘木獸 令左右輿之而行 導從不過數 十人 小王乘機 鏤爲獸形 國人好相攻擊 人皆驍健善走 難死而耐創 諸洞各爲部隊 不相救 助 兩陣相當 勇者三五人出前跳噪 交言相罵 因相擊射 如其 不勝 一軍皆走 遣人致 謝 即共和解 收取鬥死者 共聚而食之 仍以髑髏將向王所 王則賜之以冠 使爲隊帥 無賦斂 有事則均稅 用刑亦無常准 皆臨事科 決 犯罪皆斷于鳥了帥；不伏 則上請于 王 王令臣下共議定之 獄無枷鎖 唯用繩縛 決死刑以鐵錐 大如箸 長尺餘 鑽頂而殺 之 輕罪用杖 俗無文字 望月 虧盈以紀時節 候草藥枯以爲年歲

人深目長鼻 頗類于胡 亦有小慧 無君臣上下之節 拜伏之禮 父子同床而寢 男子拔 去髭鬚 身上有毛之處皆亦除去 婦人以墨黥手 爲蟲蛇之文 嫁娶以酒肴珠貝爲聘 或 男女相悅 便相匹偶 婦人產乳 必食子衣 產後以火自炙 令汗出 五日便平復 以木槽 中暴海水爲鹽 木汁爲酢 釀米麥爲酒 其味甚 薄 食皆用手 偶得異味 先進尊者 凡有 宴會 執酒者必待呼名而後飲 上王酒者 亦呼王名 銜杯共飲 頗同突厥 歌呼蹋蹄 一 人唱 從皆和 音頗哀怨 扶 女子上膊 搖手而舞 其死者氣將絕 舉至庭 親賓哭泣相吊 浴其屍 以布帛纏之 裹以葦草 親土而殯 上不起墳 子爲父者 數月不食肉 南境風俗 少異 人 有死者 邑里共食之

有熊羆豺狼 尤多豬雞 無牛羊驢馬 厥田良沃 先以火燒而引水灌之 持一插 以石爲刃
長尺餘 闊數寸 而墾之 土宜稻 梁 沔 黍 麻 豆 赤豆 胡豆 黑豆等 木有楓 栝 樟
松 榿 楠 杉 梓 竹 藤 果 藥 同于江表 風土氣候與嶺南相類

俗事山海之神 祭以酒肴 鬥戰殺人 便將所殺人祭其神 或依茂樹起小屋 或懸髑髏
於樹上 以箭射之 或累石系幡以爲神主 王之所居 壁下多聚髑髏以爲佳 人間門戶上
必安獸頭骨角

大業元年 海師何蠻等 每春秋二時 天清風靜 東望依稀 似有煙霧之氣 亦不知幾千
里 三年 煬帝令羽騎尉硃寬入海求訪異俗 何蠻言之 遂與蠻 俱往 因到流求國 言不
相通 掠一人而返 明年 帝復令寬慰撫之 流求不從 寬取其布甲而還 時倭國使來朝
見之曰：「此夷邪久國人所用也」 帝遣武賁郎 將陳稜 朝請大夫張鎮州率兵自義安
浮海擊之 至高華嶼 又東行二日至郤鼉嶼 又一日便至流求 初 稜將南方諸國人從軍
有昆侖人頗解其語 遣人慰諭之 流 求不從 拒逆官軍 稜擊走之 進至其都 頻戰皆敗
焚其宮室 虜其男女數千人 載軍實而還 自爾遂絕

付録 10. 百濟の内政と風俗記事

晉書では本記に朝貢の記事が書かれているだけである。

宋書

百濟國 本與高麗俱在遼東之東千餘里 其後高麗略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治
謂之晉平郡晉平縣

南齊書には内政・風俗の記事は無い。

梁書

百濟者 其先東夷有三韓國 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 弁韓 辰韓各十二國 馬
韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 百濟卽 其一也 後漸強大 兼諸
小國 其國本與句麗在遼東之東 晉世句麗既略有遼東 百濟亦據有遼西

魏書

其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南 其民土著 地多下濕 率皆山居
有五穀 其衣服飲食與高句麗同

周書

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方 故其地界東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 東西四百五十里 南北九百餘里 治固麻城 其外更有五方：中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城

王姓夫餘氏 號於羅瑕 民呼為韃吉支 夏言竝王也 妻號於陸 夏言妃也 官有十六品 左平五人 一品 達率三十人 二品 恩率三品 德率四品 扞率五品 柰率六品 六品已上 冠飾銀華 將德七品 紫帶 施德八品 皂帶 固德九品 赤帶 (李) [季] 德十品 青帶 對德十一品 文督十二品 皆黃帶 武督十三品 佐軍十四品 振武十五品 克虞十六品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀部 肉部 內掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法部 後官部 外官有司軍部 司徒部 司空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 網部 日官部 都市部 都下有萬家 分為 五部 曰上部 前部 中部 下部 後部 統兵五百人 五方各有方領一人 以達率為之 郡將三人 以德率為之 方統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外 民庶及餘小城 咸分

(肆) [隸] 焉

其衣服 男子畧同於高麗 若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據地為敬 婦人衣 (以) [似] 袍 而袖微大 在室者 編發盤於 首 後垂一道為飾 出嫁者 乃分為兩道焉 兵有弓箭刀矛 俗重騎射 兼愛墳史 其秀異者 頗解屬文 又解陰陽五行 用宋《元嘉曆》 以建寅月為歲首 亦解 醫藥卜筮占相之術 有投壺 樗蒲等雜戲 然尤尚奕碁 僧尼寺塔甚多 而無道士 賦稅以布絹絲麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑罰：反叛 退軍及殺人者 斬 盜者 流 其贓兩倍徵之 婦人犯姦者 沒入夫家為婢

婚娶之禮 畧同華俗 父母及夫死者 三年治服 餘親 則葬訖除之 土田下濕 氣候溫暖
五穀雜果 菜蔬及酒醴肴饌藥品之屬 多同於內地 唯無駝驢騾羊鵝鴨等 其王以四仲之
月 祭天及五帝之神 又每歲四祠其始祖仇台之廟

自晉 宋 齊 梁據江左 後魏宅中原 竝遣使稱藩 兼受封拜 齊氏擅東夏 其王隆亦通
使焉 隆死 子昌立 建德六年 齊滅 昌始遣使獻方物 宣政元年 又遣使來獻 蠻

蠻者 盤瓠之後 族類（番）〔蕃〕衍 散處江 淮之間 汝 豫之郡 憑險作梗 世為寇亂
逮魏人失馭 其暴滋甚 有冉氏 向氏 田氏者 陬落尤 盛 餘則大者萬家 小者千戶 更
相崇樹 僭稱王侯 屯據三峽 斷遏水路 荆 蜀行人 至有假道者 太祖畧定伊 瀍 聲教
南被 諸蠻畏威 靡然向風矣

隋書

百濟之先 出自高麗國 其國王有一侍婢 忽懷孕 王欲殺之 婢云：「有物狀如雞子
來感於我 故有娠也 」王舍之 後遂生一男 棄之廁溷 久而 不死 以為神 命養之 名
曰東明 及長 高麗王忌之 東明懼 逃至淹水 夫餘人共奉之 東明之後 有仇台者 篤於
仁信 始立其國于帶方故地 漢遼東太守公 孫度以女妻之 漸以昌盛 為東夷強國 初以
百家濟海 因號百濟 曆十餘代 代臣中國 前史載之詳矣 開皇初 其王餘昌遣使貢方物
拜昌為上開府 帶方郡 公 百濟王

其國東西四百五十里 南北九百余里 南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔城 官有十六

品：長曰左平 次大率 次恩率 次德率 次杆率 次奈率 次將 德 服紫帶；次施德 阜帶；次固德 赤帶；次李德 青帶；次對德以下 皆黃帶；次文督 次武督 次佐軍 次振武 次克虞 皆用白帶 其冠制並同 唯奈率以 上飾以銀花 長史三年一交代 畿內爲五部 部有五巷 士人倨焉 五方各有方領一人 方佐貳之 方有十郡 郡有將 其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其衣服與高麗略同 婦人不加粉黛 女辮發垂後 已出嫁則分爲兩道 盤於頭上 俗尚騎射 讀書史 能吏事 亦知醫藥 蓍龜 占相之術 以兩手據地爲敬 有僧 尼 多寺塔 有鼓角 篳篥 箏 竽 篪 笛之樂 投壺 圍棋 樗蒲 握槊 弄珠之戲 行宋《元嘉曆》以建寅月爲歲首 國中大姓有八族 沙氏 燕氏 刀氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苗氏 婚娶之禮 略同于華 喪制如高麗 有五穀 牛 豬 雞 多不火食 厥田下濕 人皆山居 有巨粟 每以四仲之月 王祭天 及五帝之神 立其始祖仇台廟于國城 歲四祠之 國西南人島居者十五所 皆有城邑

南史

百濟者 其先東夷有三韓國：一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 弁韓 辰韓各十二國 馬韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十余萬戶 百濟即 其一也 後漸強大 兼諸小國 其國本與句麗俱在遼東之東千余里 晉世句麗既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣 自置百濟郡

北史

其國東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 處小海南 東西四百五十里 南北九百餘里 其都曰居拔城 亦曰固麻城 其外更有五方：中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城 王姓餘氏 號「于羅瑕」 百姓呼爲「韃吉支」 夏言並王也 王妻號「于陸」 夏言妃也 官有 十六品：左平五人 一品 達率三十人 二品 恩率 三品 德率 四品 杆率 五品 奈率 六品 已上冠飾銀華 將德 七品 紫帶 施德 八品 阜帶 固德 九品 赤帶 季德 十品 青帶 對德 十一品 文督 十二品 皆黃帶 武督 十三品 佐軍 十四品 振武 十五品 克虞 十六品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀內部 內掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法陪 後宮部 外官有司軍部 司徒部 司空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 網部 日官部 市部 長吏三年一交代 都下有萬家 分爲五部 曰上部 前部 中部 下部 後部 部有五巷 士庶居焉 部統兵五百人 五方各有方領一人 以達率爲之 方佐貳之 方有十郡 郡有將三人 以德率爲之 統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外人庶及余小城 鹹分隸焉

其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其飲食衣服 與高麗略同 若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據地爲禮 婦人不加粉 黛 女辮發垂後 已出嫁則分爲兩道 盤於頭上 主似袍而袖微大 兵有弓箭刀槊 俗重騎射 兼愛墳史 而秀異者 頗解屬文 能吏事 又知醫藥 蓍龜 與相 術 陰陽五行法 有僧尼 多寺塔 而無道士 有鼓角 篳篥 箏竽 簾笛之樂 投壺 樗蒲 弄珠 握槊等雜戲 尤尚奕棋 行宋《元嘉曆》 以建寅月爲歲首 賦稅以布 絹 絲 麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑罰 反叛 退軍及殺人者 斬 盜者 流 其贓兩倍征之 婦犯奸 沒入夫家爲婢 婚娶之禮 略同華 俗 父母

及夫死者 三年居服 餘親則葬訖除之 土田濕 氣候溫暖 人皆山居 有巨粟 其五穀 雜果 菜蔬及酒醴肴饌之屬 多同於內地 唯無駝 騾 驢 羊 鵝 鴨等 國中大姓有八族 沙氏 燕氏 芻氏 解氏 真氏 國氏 木氏 苗氏 其王每以四仲月祭天及五帝之神 立其始祖仇台之廟于國城 歲四祠之 國 西南 人島居者十五所 皆有城邑

舊唐書

百濟國 本亦扶餘之別種 嘗爲馬韓故地 在京師東六千二百里 處大海之北 小海之南 東北至新羅 西渡海至越州 南渡海至倭國 北渡海至高麗 其王所居有東西兩城 所置內官曰內臣佐平 掌宣納事；內頭佐平 掌庫藏事；內法佐平 掌禮儀事；衛士佐平 掌宿衛兵事；朝廷佐平 掌刑獄事；兵官佐平 掌 在外兵馬事 又外置六帶方 管十郡 其用法：叛逆者死 籍沒其家；殺人者 以奴婢三贖罪；官人受財及盜者 三倍追贓 仍終身禁錮 凡諸賦稅及風土所產 多 與高麗同 其王服大袖紫袍 青錦褲 烏羅冠 金花爲飾 素皮帶 烏革履 官人盡緋爲衣 銀花飾冠 庶人不得衣緋紫 歲時伏臘 同於中國 其書籍有《五 經》 子 史 又表疏並依中華之法

新唐書

百濟 扶餘別種也 直京師東六千里而贏 濱海之陽 西界越州 南倭 北高麗 皆逾海 乃至 其東 新羅也 王居東 西二城 官有內臣佐平者宣納號 令 內頭佐平主帑聚 內法佐平主禮 衛士佐平典衛兵 朝廷佐平主獄 兵官佐平掌外兵 有六方 方統十郡 大姓有八：沙氏 燕氏 韋氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苗氏 其法：叛逆者誅 籍其家；殺人者

輸奴婢三贖罪；吏受賕及盜 三倍償 錮終身 俗與高麗同 有三島 生黃漆 六月刺取沈
色若金 王服大袖紫袍 青錦褲 素皮帶 烏革履 烏羅冠飾以金花 群臣絳衣 飾冠以銀
花 禁民衣絳紫 有文籍 紀時月如華人

付録 11. 新羅の内政と風俗記事

梁書

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有似中國 人名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人作之 世相係 辰韓不得自立爲王 明其流移之人故也；恒爲馬韓所 制 辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里 其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通使聘 普通二年 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評 五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名 有子賁 旱支 齊旱支 謁旱支 壹告支 奇貝旱支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 袴曰柯半 靴曰洗 其拜及行與高麗相類 無文字 刻木爲信 語言待百濟而後通焉

隋書

新羅國 在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將毌丘儉討高麗 破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗 百濟 之屬 兼有沃沮 不耐 韓獫之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 傳祚至金真平 開皇十四年 遣使貢方

物 高祖拜真平爲上開府 樂浪郡公 新羅 王 其先附庸於百濟 後因百濟征高麗 高麗人不堪戎役 相率歸之 遂致強盛 因襲百濟 附庸于迦羅國

其官有十七等：其一曰伊罰幹 貴如相國；次伊尺幹 次迎幹 次破彌幹 次大阿尺幹 次阿尺幹 次乙吉幹 次沙咄幹 次及伏幹 次大奈摩幹 次奈 摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大烏 次小烏 次造位 外有郡縣 其文字 甲兵同於中國 選人壯健者悉入軍 烽戍 邏俱有屯管部伍 風俗 刑政 衣服 略與高麗 百濟同 每正月旦相賀 王設宴會 班賚群官 其日拜日月神 至八月十五日 設樂 令官人射 賞以馬布 其有大事 則聚群官 詳議而定之 服色尚 素 婦人辮發繞頭 以雜彩及珠爲飾 婚嫁之禮 唯酒食而已 輕重隨貧富 新婚之夕 女先拜舅姑 次即拜夫 死有棺斂 葬起墳陵 王及父母妻子喪 持服一年 田甚良沃 水陸兼種 其五穀 果菜 鳥獸物產 略與華同 大業以來 歲遣朝貢 新羅地多山險 雖與百濟構隙 百濟亦不能圖之

南史

新羅千餘里 其地東濱大海 南北與句麗 百濟接 魏時曰新盧；宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通其先事詳北史 在百濟東南五使聘 梁普通二年 王姓募名泰 始使使隨百濟奉獻方物

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評 五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名有子賁

旱支 壹旱支 齊旱支 謁旱支 壹吉支 奇貝旱支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 褲曰柯半
靴曰洗 其拜及行與高麗相類 無文字 刻木 爲信 語言待百濟而後通焉

北史

新羅者 其先本辰韓種也 地在高麗東南 居漢時樂浪地 辰韓亦曰秦韓 相傳言秦世
亡人避役來適 馬韓割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言 語名物 有似中國人
名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人
作之 世世相傳 辰韓不得自立王 明其流移之人 故也 恆爲馬韓所制 辰韓之始 有六
國 稍分爲十二 新羅則其一也 或稱魏將毋丘儉討高麗破之 奔沃沮 其後復歸故國 有
留者 遂爲新羅 亦曰斯盧 其人 雜有華夏 高麗 百濟之屬 兼有沃沮 不耐 韓 滅之地
其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 初附庸於百濟 百濟征高麗 不堪戎役 後相率
歸之 遂致 強盛 因襲百濟 附庸于迦羅國焉 傳世三十 至真平 以隋開皇十四年 遣使
貢方物 文帝拜真平上開府 樂浪郡公 新羅王

其官有十七等：一曰伊罰幹 貴如相國 次伊尺幹 次迎幹 次破彌幹 次大阿尺幹 次
阿尺幹 次乙吉幹 次沙咄幹 次及伏幹 次大奈摩幹 次奈 摩 次大舍 次小舍 次起士
次大烏 次小烏 次造位 外有郡縣 其文字 甲兵 同於中國 選人壯健者悉入軍 烽 戍
邏俱屯營部伍 風俗 刑政 衣服略 與高麗 百濟同 每月旦相賀 王設宴會 班賚群官
其日 拜日月神主 八月十五日設樂 令官人射 賞以馬 布 其有大事 則聚官詳議定之
服色尚畫素 婦 人辮發繞頸 以雜彩及珠爲飾 婚嫁禮唯酒食而已 輕重隨貧富 新婦之

夕 女先拜舅姑 次即拜大兄 夫 死有棺斂 葬送起墳陵 王及父母妻子喪 居服一年
田甚良沃 水陸兼種 其五穀 果菜 鳥獸 物產 略與華同

大業以來 歲遣朝貢 新羅地多山險 雖與百濟構隙 百濟亦不能圖之也

舊唐書

新羅國 本弁韓之苗裔也 其國在漢時樂浪之地 東及南方俱限大海 西接百濟 北鄰
高麗 東西千里 南北二千里 有城邑村落 王之所居曰金城 周 七八里 衛兵三千人 設
獅子隊 文武官凡有十七等 其王金真平 隋文帝時授上開府 樂浪郡公 新羅王 武德四
年 遣使朝貢 高祖親勞問之 遣通直散騎侍郎 庾文素往使焉 賜以璽書及畫屏風 錦彩
三百段 自此朝貢不絕 其風俗 刑法 衣服 與高麗 百濟略同 而朝服尚白 好祭山神
其食器作柳杯 亦以銅及瓦 國人多金 樸兩姓 異姓不爲婚 重元日 相慶賀燕饗 每以
其日拜日月神 又重八月十五日 設樂飲宴 賚群臣 射其庭 婦人發繞頭 以彩及珠爲飾
發甚長 美

新唐書

新羅 弁韓苗裔也 居漢樂浪地 橫千里 縱三千里 東拒長人 東南日本 西百濟 南瀕
海 北高麗 而王居金城 環八里所 衛兵三千人 謂城爲侵 牟羅 邑在內曰喙評 外曰邑
勒 有喙評六 邑勒五十二 朝服尚白 好祠山神 八月望日 大宴齋官吏 射 其建官 以

親屬爲上 其族名第一骨 第二骨以自 別 兄弟女 姑 姨 從姊妹 皆聘爲妻 王族爲第一骨 妻亦其族 生子皆爲第一骨 不娶第二骨女 雖娶 常爲妾媵 官有宰相 侍中 司農 卿 太府令 凡十 有七等 第二骨得爲之 事必與衆議 號「和白」 一人異則罷 宰相家不絕祿 奴僮三千人 甲兵牛馬豬稱之 畜牧海中山 須食乃射 息谷米於人 償不滿 庸爲奴婢 王姓金 貴人姓朴 民無氏有名 食用柳杯若銅 瓦 元日相慶 是日拜日月神 男子褐褲 婦長襦 見人必跪 則以手據地爲恭 不粉黛 率美髮以繚 首 以珠彩飾之 男子翦發鬻 冒以黑巾 市皆婦女貿販 冬則作灶堂中 夏以食置冰上 畜無羊 少驢 羸 多馬 馬雖高大 不善行

長人者 人類長三丈 鋸牙鉤爪 黑毛覆身 不火食 噬禽獸 或搏人以食；得婦人 以治衣服 其國連山數十里 有峽 固以鐵闔 號關門 新羅常屯弩士數千守之

付録 12. 倭の内政と風俗記事

後漢書

其地大較在會稽東冶之東 與硃崖、儋耳相近 故其法俗多同 土宜禾稻、麻/麻紵、蠶桑 知織績為縑佈 齧白珠、青玉 其山有丹土 氣溫暖 鑿夏生菜茹 無牛、馬、虎、豹、羊、 鵲 其兵有矛、楯、木弓、竹矢 或以骨為鏃 男子皆黥面文身 以其文左右大小別/警 尊卑之差 其男衣皆橫幅 結束相連 女人被發/髮屈纒介 衣如單被 貫頭而著之；並/併 以丹硃塗身 如中國之用粉也 有城柵屋室 父母兄弟異處 唯會同男女無別/警 飲食以 手 而用籩豆 俗皆徒跣 以蹲踞為恭敬 人性嗜酒 多壽攷 至百餘歲者甚眾/衆 國多女 子 大人皆有四五妻 其餘或兩或三 女人不淫不妒 又俗不盜竊 少爭訟 犯法者沒其妻 子 重者滅其門族 其死停喪十餘日 儵人哭泣 不進酒食 而等類就歌舞為樂 灼骨以蔔 用決吉凶 行來度海 令一人不櫛沐 不食肉 不近婦人 名曰“持衰” 若在塗吉利 則僱 以財物；如病疾遭害 以為持衰不謹 便共殺之

三國志

男子無大小皆黥面文身 自古以來 其使詣中國 皆自稱大夫 夏後少康之子封於會稽 斷發文身以避蛟龍之害 今倭水人好沈沒捕魚蛤 文身亦以厭大 魚水禽 後稍以為飾 諸國文身各異 或左或右 或大或小 尊卑有差 計其道里 當在會稽 東冶之東 其風俗 不淫 男子皆露紵 以木綿招頭 其衣橫幅 但結 束相連 略無縫 婦人被發屈紵 作衣如 單被 穿其中央 貫頭衣之 種禾稻 紵麻 蠶桑 緝績 出細紵 縑綿 其地無牛馬虎豹羊

鵠 兵用矛 楯 木弓 木弓 短下長上 竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與儋耳 硃崖同 倭地
溫暖 冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室 父母兄弟臥息異處 以硃丹塗其身體 如中國用粉也
食飲用籩 豆 手食 其死 有棺無槨 封土作塚 始死停喪十餘日 當時不食肉 喪主哭泣
他人就歌舞飲酒 已葬 舉家詣水中澡浴 以如練沐 其行來渡海詣中國 恆使 一人 不
梳頭 不去蟻虱 衣服垢汙 不食肉 不近婦人 如喪人 名之爲持衰 若行者吉善 共顧其
生口財物；若有疾病 遭暴害 便欲殺之 謂其持衰不謹 出 真珠 青玉 其山有丹 其木
有柟 杼 豫樟 榑欂 投櫃 烏號 楓香 其竹筱箨 桃支 有薑 橘 椒 蘘荷 不知以爲滋
味 有獼猴 黑雉 其俗舉事行來 有所雲爲 輒灼骨而蔔 以占吉凶 先告所蔔 其辭如
令龜法 視火坼占兆 其會同坐起 父子男女無別 人性嗜酒 〈魏略曰：其俗不知正歲四
節 但計春耕秋收爲年紀〉 見 大人所敬 但搏手以當跪拜 其人壽考 或百年 或八九十
年 其俗 國大人皆四五婦 下戶或二三婦 婦人不淫 不妒忌 不盜竊 少諍訟 其犯法
輕者沒其妻 子 重者滅其門戶 及宗族尊卑 各有差序 足相臣服 收租賦 有邸閣國 國
有市 交易有無 使大倭監之 自女王國以北 特置一大率 檢察諸國 諸國畏憚 之 常治
伊都國 於國中有如刺史 王遣使詣京都 帶方郡 諸韓國 及郡使倭國 皆臨津搜露 傳
送文書賜遺之物詣女王 不得差錯 下戶與大人相逢道路 逡巡 入草 傳辭說事 或蹲或
跪 兩手據地 爲之恭敬 對應聲曰噫 比如然諾

晉書

男子無大小 悉黥面文身 自謂太伯之後 又言上古使詣中國 皆自稱大夫 昔夏少康之
子封於會稽 繼發文身以避蛟龍之害 今倭人好沈沒取魚 亦文身以厭水禽 計其道里

當會稽東冶之東 其男子衣以橫幅 但結束相連 略無縫綴 婦人衣如單被 穿其中央以貫頭 而皆被發徒跣 其地溫暖 俗種禾稻系甯麻而蠶桑織績 土無牛馬 有刀楯弓箭 以鐵爲鏃 有屋宇 父母兄弟臥息異處 食飲用俎豆 嫁娶不持錢帛 以衣迎之 死有棺無槨 封土爲塚 初喪 哭泣 不食肉 已葬 舉家入水澡浴自潔 以除不祥 其舉大事 輒灼骨以占吉凶 不知正歲四節 但計秋收之時以爲年紀 人多壽百年 或八九十 國多婦女 不淫不妒 無爭訟 犯輕罪者沒其妻孥 重者族滅其家 舊以男子爲主

宋書・南齊書では内政・風俗の記事はない位。

梁書

倭者 自云太伯之後 俗皆文身 去帶方萬二千餘里 大抵在會稽之東 相去絕遠 從帶方至倭 循海水行 歷韓國 乍東乍南 七千餘里始度一海；海闊千餘里 名瀚海 至一支國；又度一海千餘里 名未盧國；又東南陸行五百里 至伊都國；又東南行百里 至奴國；又東行百里 至不彌國；又南水行二十日 至投馬國；又南水行十日 陸行一月日 至邪馬臺國 卽倭王所居 其官有伊支馬 次曰彌馬獲支 次曰奴往鞮 民種禾稻紵麻 蠶桑織績 有薑 桂 橘 椒 蘇 出黑雉 真珠 青玉 有獸如牛 名山鼠；又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射之中 蛇則死矣 物產略與儋耳 朱崖同 地溫暖 風俗不淫 男女皆露紵 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死 有棺無槨 封土作冢 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 多至八九十 或至百歲 其俗女多男少 貴者至四五妻 賤者猶兩三妻 婦人無淫妬 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者

沒其妻子 重則滅其宗族

隋書

倭國 在百濟 新羅東南 水陸三千里 于大海之中依山島而居 魏時譯通中國 三十余國皆自稱王 夷人不知里數 但計以日 其國境東西五月行 南北三月行 各至於海 其地勢東高西下 都於邪靡堆 則《魏志》所謂邪馬台者也 古云去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里 在會稽之東 與儋耳相近 漢光武 時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣使朝貢 謂之倭奴國 桓 靈之間 其國大亂 遞相攻伐 歷年無主 有女子名卑彌呼 能以鬼道惑衆 於是國人共立爲 王 有男弟 佐卑彌理國 其王有侍婢千人 罕有見其面者 唯有男子二人給王飲食 通傳言語 其王有宮室樓觀 城柵皆持兵守衛 爲法甚嚴 自魏至於齊 梁 代與中國相通

南史

倭國 其先所出及所在 事詳北史 其官有伊支馬 次曰彌馬獲支 次曰奴往鞮 人種禾稻 紵 麻 蠶桑織績 有姜 桂 橘 椒 蘇 出黑雉 真 珠 青玉 有獸如牛名山鼠 又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射中而蛇則死矣 物產略與儋耳 朱崖同 地氣溫暖 風俗不淫 男女皆露髻 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死有棺無槨 封土作塚 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 或至八九十 或至百歲 其俗女 多男少 貴者至四五妻 賤者猶至兩三妻 婦人不媾妒 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者沒其妻子 重則滅其宗族

北史

倭國 在百濟 新羅東南 水陸三千里 于大海中依山島而居 魏時 譯通中國三十余國 皆稱子 夷人不知里數 但計以日 其國境 東西五月行 南 北三月行 各至於海 其地勢 東高西下 居於邪摩堆 則《魏志》所謂邪馬台者也 又云：去樂浪郡境及帶方郡並一 萬二千里 在會稽東 與儋耳相近 俗皆文 身 自云太伯之後 計從帶方至倭國 循海水 行 歷朝鮮國 乍南乍東 七千餘里 始度一海 又南千餘里 度一海 闊千餘里 名瀚海 至一支國 又度一海千餘 里 名末盧國 又東南陸行五百里 至伊都國 又東南百里 至 奴國 又東行百里 至不彌國 又南水行二十日 至投馬國 又南水行十日 陸行一月 至 邪馬台 國 即倭王所都

漢光武時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣朝貢 謂之倭奴國 靈帝光和中 其國亂 遞相攻伐 歷年無主 有女子名卑彌呼 能以鬼道惑衆 國人 共立爲王 無夫 有二男子 給王飲食 通傳言語 其王有宮室 樓觀 城柵 皆持兵守衛 爲法甚嚴 魏景初三年 公孫 文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金 印紫綬 正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不 服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女台與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 江左曆晉 宋 齊 梁 朝聘不絕

舊唐書

倭國者 古倭奴國也 去京師一萬四千里 在新羅東南大海中 依山島而居 東西五月行 南北三月行 世與中國通 其國 居無城郭 以木爲柵 以草 爲屋 四面小島五十余國 皆附屬焉 其王姓阿每氏 置一大率 檢察諸國 皆畏附之 設官有十二等 其訴訟者 匍匐而前 地多女少男 頗有文字 俗敬佛法 並皆跣足 以幅布蔽其前後 貴人戴錦帽 百姓皆椎髻 無冠帶 婦人衣純色裙 長腰襦 束發於後 佩銀花 長八寸 左右各數枝 以明貴賤等級 衣服之制 頗 類新羅

新唐書 倭 日本

日本 古倭奴也 去京師萬四千里 直新羅東南 在海中 島而居 東西五月行 南北三月行 國無城郭 聯木爲柵落 以草茨屋 左右小島五十餘 皆 自名國 而臣附之 置本率一人 檢察諸部 其俗多女少男 有文字 尚浮屠法 其官十有二等 其王姓阿每氏 自言初主號天御中主 至彥瀲 凡三十二世 皆以「尊」爲號 居築紫城 彥瀲子神武立 更以「天皇」爲號 徙治大和州 次曰綏靖 次安寧 次懿德 次孝昭 次天安 次孝靈 次孝元 次開化 次崇神 次垂 仁 次景行 次成務 次仲哀 仲哀死 以開化曾孫女神功爲王 次應神 次仁德 次履中 次反正 次允恭 次安康 次雄略 次清寧 次顯宗 次仁賢 次武烈 次繼體 次安閒 次宣化 次欽明 欽明之十一年 直梁承聖元年 次海達 次用明 亦曰目多利思比孤 直隋開皇末 始與中國通 次崇峻 崇峻死 欽明之 孫女雄古立 次舒明 次皇極 其俗椎髻 無冠帶 跣以行 幅巾蔽後 貴者冒錦；婦人衣純色裙 長腰襦 結髮於後 至煬帝 賜其民錦線冠 飾以金玉 文布爲 衣 左右佩銀蘂長八寸 以多少明貴賤

(13.13. 箕子朝鮮・衛氏朝鮮・辰・韓)

後漢書

三国志

侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 魏略曰：昔箕子之後朝鮮侯 見周衰 燕自尊 爲王 欲東略地 朝鮮侯亦自稱爲王 欲興兵逆擊燕以尊周室 其大夫禮諫之 乃止 使禮西說燕 燕止之 不攻 後子孫稍驕虐 燕乃遣將秦開攻其西方 取地二 千餘里 至滿番汗爲界 朝鮮遂弱 及秦並天下 使蒙恬築長城 到遼東 時朝鮮王否立 畏秦襲之 略服屬秦 不肯朝會 否死 其子准立 二十餘年而陳 項 起 天下亂 燕 齊 趙民愁苦 稍稍亡往准 准乃置之於西方 及漢以盧縮爲燕王 朝鮮與燕界於溟水 及縮反 入匈奴 燕人衛滿亡命 爲胡服 東度溟水 詣 准降 說准求居西界 (故) 中國亡命爲朝鮮藩屏 准信寵之 拜爲博士 賜以圭 封之百里 令守西邊 滿誘亡黨 衆稍多 乃詐遣人告准 言漢兵十道至 求入 宿衛 遂還攻准 准與滿戰 不敵也 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 (魏略曰：其子及親留在國者 因冒姓韓氏 准王海中 不與朝鮮相往來) 其後絕滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁 魏 略曰：初 右渠未破時 朝鮮相曆谿卿以諫右渠不用 東之辰國 時民隨出居者二千餘戶 亦與朝鮮貢蕃不相往來 至王莽地皇時 廉斯鏹爲辰韓右渠帥 聞樂浪土 地美 人民饒樂 亡欲來降 出其邑落 見田中驅雀男子一人 其語非韓人 問之 男子曰：「我等漢人 名戶來 我等輩千五百人伐材木 爲韓所擊得 皆斷發爲 奴 積三年矣 」鏹曰：「我當降漢樂浪 汝欲去不？」戶來曰：「可 」

(辰) 鏹因將戶來 (來) 出詣含資縣 縣言郡 郡即以鏹爲譯 從芩中乘大船入辰韓 逆取戶來 降伴輩尚得千人 其五百人已死 鏹時曉謂辰韓：「汝還五百人 若不者 樂浪當遣萬兵乘船來擊汝」辰韓曰：「五百人已死 我當出贖直耳」乃出辰 韓萬五千人 弁韓布萬五千匹 鏹收取直還 郡表鏹功義 賜冠幘 田宅 子孫數世 至安帝延光四年時 故受復除

桓 靈之末 韓濊強盛 郡縣不能制 民多流入韓國 建安中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模 張敞等收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍 出 是後倭韓遂屬帶方 景初中 明帝密遣帶方太守劉昕 樂浪太守鮮于嗣越海定二郡 諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戶詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓